もんすたーにっき

eel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もんすたーにっき

【Ｎコード】
Ｎ６５０１Ｖ

【作者名】
ｅｅｌ

【あらすじ】
童貞のまま３０歳を迎え、魔法使いの称号を得てしまった吉田君。朝起きるとそこは異世界だった。目の前には可愛い女の子！これは夢か・・そう思う彼に、彼女は『首輪』をつけて一言。
「今日からあなたは私の『モンスター』です」動揺する吉田君。
そこで彼は思う・・・ピクシーとかいけるんじゃね？・・・
はたして彼はもとの世界に帰れるんでしょうか？

首輪？なにそれおいしいの？

「よし！」
そう言いながら彼女は、鏡の前でくるりと回る。
どこにもおかしいところはない。今日は、彼女にとって特別な日だ。

・・・そう、モンスター調教師としての記念すべき一日なのだ。

彼女の名は「コニー・リコリス」職業「モンスター調教師」
全身をくまなくチェックし確認を終えると、玄関から出てモンスター神殿へ向かう。
彼女は、過去3回モンスター調教師試験に落ちていた。先日4回目の試験を受けようやく合格にいたったのだ。
そんな経緯もあり、彼女は鼻歌交じりに小躍りしながら（道行く人に眉をひそめられながら）モンスター神殿へと向かっていた。
今日は、初めてモンスターを貰う日だ。モンスター神殿にて家宝の石版からモンスターを出してもらい、その子を育てる。そう心に決めていた。
家宝の石版、といっても父が亡くなる前にどこからか持ってきたもので、一昨日まで家の納戸に放り込んであったものを彼女が見つけ、石版に付いていたメモに「だいじなもの」と書かれていたので、彼女が勝手に家宝と認識したのだった。
そうしてしばらく町を歩く、すると大きな神殿が見えてきた。
・・・モンスター神殿・・・
そこは、モンスター調教師が遺跡などから手に入れた石版等に封印されたモンスターを、女神の力をかりて現世に復活させ、自分のモンスターとして使役するための場所である。石版からは一回しか出現させることができず、危険と判断されたモンスターは石版に再

封印させることもある。しかしたいてい、危険な場合やその調教師のランクに合わない場合は出現しない場合が多い。再封印された場合は、自分のランクが適正になったとき、もう一度石版の封印を解くために神殿へ来る事になる。

彼女は神殿の門をくぐり、受付カウンターに声をかける。
「こんにちはー！おじいちゃんきたよー！」
声を受け奥から全身真っ白な爺さんが現れる。
「おお、コニー来たか。早かったな」笑顔で答えるお爺さん。
「うん！今日からついに調教師だからね！早く着ちゃった！！」
「そうだなぁ。ついにワシの仕事を継いではくれなんだか」
少しがっかりしたように、しかしうれしそうに彼女をみる。
「ごめんねおじいちゃん。けど、弟がそっち行ったし、大丈夫でしょ」
「あの堅物じゃのぉ・・・。仕事がやりにくくなりそうじゃわ」
笑いながらじいさんは、奥を指した。
「早速、召喚の儀をするかの。持ってきた石版をだしなさい」
はーい、と言って。コニーは石版をを見せる。すると爺さんは眉をしかめた。
「珍しいものじゃの。これではもしかすると、お前さんのランクじゃ復活しない可能性があるが、いいのか？」
「いいよ。もともとダメもとだし、そのときは市場で可愛いやつ連れてギルド向かうよ」
「そうか。ならよい。ではさっさとやってしまうかの。わしゃ眠いんじゃ」
「うん。さぁいこう！なにがでるかなー」
ウキウキしながら爺さんの後についていく、奥に着くと大掛かりな陣とその前に祭壇があった。
祭壇に爺さんが石版をのせ、祈りをささげ始める。程なくして陣が光り始め、光のカーテンがおりた。

「おお、召喚できそうじゃわい」
「やたー！！なにがでるのかな？」
光のカーテンが徐々に消え始めると・・・・
・・・そこには人型で青い「なにか」をまとったモノが寝息を立てていた・・・

・・・ここは都内某所・・・
その日、彼「吉田　拳」は３０歳の誕生日を一人さびしく迎えていた。
「・・・うう・・ついに魔法使いの称号を得てしまった」
悲しそうにうめく彼は、童〇のまま３０歳を迎え、自虐的のそう呻くのだった。
「もう、俺は一生このままなんだ・・・もうだめなんだ・・あぁぁ」
彼はお酒を飲んでいた。かなり飲んでいた。そしてそれを止めてくれる人は、彼の周りにはいなかった。
彼は、特別容姿が悪いということはなかった。そして、女性と話すことにストレスを感じることもなく（彼の両親がそのように教育した）可能性は十二分にあったはずだ。しかし、彼は現在〇貞なのだった。　環境が悪かったのかもしれない、行動が悪かったかもしれない、そんなことを考えながら彼はその日、いつものように青いジャージを着て眠りに付いたのだった・・・。

・・・寝返りを打つと頭が石の上にあったように痛かった・・・
「んん・・」おかしい、そう思って起きると、天井が異様に高かった。家ではないそう思って周りを見る。
「ここどこ？」
そう言いながら、視界の真ん中にでかい祭壇？のようなものが映った。

ナニこれ・・・そう思いながらよく見るとフシギな格好をした女の子と真っ白い爺さんが見えた。
「ここどこですか？」と聞くと・・
「　　」
「　　」
よくわからない言葉が返ってきた。
「え？なんですか？私は英語とかダメですよ。あいきゃんのっとすぴーくいんぐりっしゅ」
そう言うと、女のこの方が爺さんから、何かを受け取って・・・・・・・僕の首に首輪をつけた・・・

首輪？なにそれおいしいの？（後書き）

初投稿です。

ゴーレム？なにそれ？どんな遊び？

・・・なにこの子・・・

見るからに人間だ。しかし、ヒトガタの魔物も多数存在を確認されている。

私の記憶では「デュラハン」に似ているが、鎧はまとっていない。第一私のランクでは出てこない。

「おじいいちゃん、これ・・・いいの？」

おじいちゃんに連れて行ってもいいのか確認を取る。おじいちゃんも私の一言でハッとし

「・・・召喚できたんじゃから、お前のすきにしなさい」

といってくれた、なのでおじいちゃんから「契約の首輪」を受け取り、そのこに近づいていく。

幸い、暴れるようなことはなく現状をまだ把握できていないような目で私をみている。

動かないでね、と願いながら、首輪をはめた。

「ふうっ」

これで意思の疎通ができるようになった。ここまでで「ドラゴン」とかだと大暴れすることが多い、下手すると死ぬこともある。そうなると、モンスターは即刻処分することになる。私はそうならなかったことに安堵した。

「契約の首輪」の効果で私の言葉が理解できるようになったはずだ。話しかけてみることにする。

「こんにちは、あなた話はできる？」

知能の低いモノだと、会話にすらならず「首輪」の効果で強制的に従わせることになるが、それはしたくなかった。

「！え？話ができるの？」

目の前の子はそう言った。よかった知能は高そうだ。実際ヒトガタの子は皆知能が高い、「デュラハン」は例外として、大抵のヒト

ガタモンスターは知能派が多い。
「あなた自分の事わかる？」
これも一種の確認だ。自分の種類を聞く事で亜種とか珍しいが派生種なのかが判る。そのときの私もピクシーの亜種かな？とか思っていた。しかし・・・
「ん？・・ああ。俺の名は吉田　拳。今年で３０になる。ここはどこだ？なぜ俺はここにいるんだ？」
といってきた・・・驚いてしまった。生まれたそのときからすでに３０歳と言うのは初めて聞いた。今までそんなことは一度も聞いた事がなく、生まれた時は０歳なのが普通だ・・・
この子は一体、なんなのだろうか。
疑問は多々あるがおじいいちゃんが
「用が済んだのなら早くギルドへ行ったほうがいいぞい」
といってくれたので、早く移動しようと考える。
「ケン、一度移動しましょう。話は家で聞くから」
そう言うと彼はうなずいて、私の後についてきてくれた。
玄関を抜け、ギルドへ向かう・・・
道中「あれはなに？」とか彼が質問してきた、生まれたばかりのモンスターとしては普通の（知能が高いモンスターとして）行動だったので少し安心した。
ギルドについてモンスター登録をするとき、また困ってしまった。モンスターの種族について訊ねると・・
「人間」
と帰ってきたので困ってしまったのだ。そのまま書く事もできないので、職員に「ピクシーの亜種です」と答え、大いに珍しがられた。
とりあえず、登録を終えられたので一安心。一路、家を目指す事にした。
途中「君はなにができるの？」と聞くと
「特技？ん～・・・色々。一番は料理かな？」

と言っていた、料理が得意なモンスターなど聞いた事が無い。私は、戦闘には向かないモンスターなのかと思った。町の外れに来たとき、目の前に金髪縦ロールをゆらしたお嬢様風の女の子が目の前に現れた。

「あら？・・・お久しぶりねコニーさん。試験は受かりまして？」

・・・嫌な娘に会ってしまった。

「ええ、おかげさまで。こうして今日は初モンスターを連れて帰るとこです！」

「そうですの。よかったですわね。・・・で？そのモンスターはどちらに？」

・・・いやみ半分事実半分か。私は、となりでボーッとみている顔を指差して

「このこが私のモンスターです！」といってみた。

すると、なんともいえない顔をして一言

「奴隷はいけませんわね、奴隷は・・・」

・・・それは考え付かなかった。そう言われればそんなふうに見えなくもない。

彼がこっちを向いて「なあ、このロールケーキは知り合いか？」と聞いてきた

「残念ながらね」と答えた私たちをみて、ロールケーキこと「ローズ・アサシン」は目を丸くしていた。

「ほんとに、あなたのモンスターでしたのね。失礼したわ、しかし、種類はなんですの？みたことないですわね。」

「このこは、ピクシーの亜種よ。うちの家宝の石版から呼び出したの」

「なるほど、お父様の功績ですわね、しかし、どれだけ強くできますことやら・・・」

「なによ！大丈夫よ」

「そこまで言うのなら、明日、腕試しにランク８の大会にお出しなさいな。ワタクシも最近手に入れた、アーマーナイトを出そうと

思いますの」
「いいわ！勝負よ！」
「楽しみにしていますわ・・・では、また」
彼女が去った後、大変なこととしてしまったと後悔しながら、家に帰り着き。
ケンに明日のことを話すことでさらに気が重くなるのだった・・・

・・・ここはどこだ、なぜ目の前に石の巨人がいる？・・・
神殿で（コニー？コリー？まあどっちでもいいや）につれられてギルドとか言うところで、手続きをして、帰りにロールケーキに出会って・・・次の日。俺は闘技場に立っていた・・・
話によると、ロールケーキの挑発にのって試合をすることになってしまったのだとか。
連れて来られたのは、大きな闘技場。一回戦の相手として
・・・・・ゴーレムが目の前にいた・・・
ありえねえ！！！そう思っていた・・どうしろと・・・
まだ試合開始の合図がなっていない。なので、今のところお見合いだ。しかし、あんなでかいの相手にどうしろって言うんだ！・・・・
ああ死んだなこりゃ・・そう思った。男３０童〇。異世界にて女性とキャッキャウフフできずに死亡・・・よく考えたら今までと変わらんな・・
そんなことを考えている間に試合開始になっていたらしい。
・・・ゴーレムが突っ込んでくる。あまり早くないが、恐怖にすくんで動けない。そのまま拳を振り下ろされる。

・・・ズン！！・・・・

でかい音が鳴った、腕を交際し、防御の構えを取っていた俺はゆっくり目を開ける・・・そこには・・

ゴーレムの拳を受け止めてる自分の腕が合った・・・
「はっ？」
俺は大して力を入れてないにも拘らず、ゴーレムは全力に近い力で押していた。
なんだこりゃ？と思っていると、ゴーレムがいったん離れ助走をつけてジャンプキックをかましてきた。俺はそれをなんなく片手で捕まえると、ジャイアントスイングの要領で元いたところへ投げ飛ばした。
・・・なんだこの力・・・
自分で自分に驚いていた。ゴーレムの体はまるで発泡スチロール柔らかで軽かった。しかし、一歩ごとにドシンドシンと音がする。
「なんだか分からんが、勝てるな」
そう言った後、走り出したのだが、いつもより体が軽い・・・景色が後ろに流れる。全力の半分ほどで、リニアに乗ったような感覚が生まれた。一瞬でゴーレムの所にいき、けりを放つ。
ゴーレムに穴が空き沈む。
・・・会場は静まり返っていた・・・

ゴーレム？なにそれ？どんな遊び？（後書き）

一回の内容が短い・・・です。
ゴメンナサイ

大会？なにそれ？料理の一種？

・・・大会前日、町の宿・・・

「ふう、一通り説明したと思うけど・・」

「ああ、ありがとう。俺の結論だと、ココは異世界だ。」

「異世界？あなたのいた世界じゃないってこと？」

そういうことも稀にある。そうきいていたコニーは、やはり珍しいのね。位に思っていた。

「そう。そして君の話だと、俺の出てきた道（石版）は、すでに使えない。」

「そうね、あれはもうただの石だわ。」

「俺は、召喚とかまったくわからん。なので少しずつ知識を集めて生きたいと思う」

「なるほど・・・あなた帰る気なの？」

「もちろんだ。故郷には俺を待ってくれてる人が・・・・待ってくれてる人が・・・・」

「ん？」

「・・・いないな・・・」

「・・・そう」

少しこの人が可哀想になってきた。

「くぅ・・・しかし、ここに人がいて子孫を残せるのなら・・ここでもいいかな・・よくないな」

・・・・だいぶ可哀想に思えてきた。

「とりあえず、明日大会に出てもらうから」

「大会？」

「そう、モンスター大会　ランク８　愛国記念杯」

「・・・え？なにそれ？おいしいの？」

「・・・いえ、食べ物じゃないわ。れっきとした闘技大会よ。」

「・・本気？だって今日きたばかりだよ俺」

「だからよ、あなたの能力が知りたいの。強いのか弱いのか。それくらい知っておかないと、これから調教できないじゃない。」
「・・・調教？・・・え？・・・Ｓ？」
「ええ。あたしモンスター調教師だもの。あなたのようなモンスターを調教して、大会に出して賞金を得て、それで暮らしているの」
「・・へえ。がんばって！俺帰るわ！」
そういってかれは立ち去ろうとする・・しかし・・私が「見えない鎖」を引っ張ると・・・
「ぐえっちゅ！」
あしもとに転がった・・・
「な？なんだいまの！！」
「今のは見えない鎖といってあなたの首にある、契約の首輪につながってる鎖よ」
「・・・え？」
そう言って彼は首に触るが、そこには何もない。
「何もないよ？」
「まってて」
私は、そう言って鎖に魔力をこめる・・・すると、鎖と首輪が実体化した。
「なにこれ？首輪？鎖？・・・女王様？」
「これはね、『契約の首輪』と『見えない鎖』といってあなたと私を繋げる物よ」
「つなげる・・・・繋げる・・・つながる！合体！！」
なんだかおかしな方向に思考が行っているようなので首輪を閉める。
「ぐえ！な・・なにこれ・・ギブギブ！！」
「はあ・・ハズレかな・・」そう言いながら私は首輪を緩める。
「ハズレって・・・ま、まぁ。俺もそう思うが・・とにかく！これはあれ？しつけ用のモノってこと？」
やはり頭はいいようだ。・・・力とかは・・期待できないだろう

な・・・
「それもあるけど、一番重要なのが、つながっているモンスターと意思疎通が可能になることよ」
「なるほど。だから、君以外の人の話が理解できないのか」
「そういうこと、文字やこの世界については追々教えていくとして・・・あなたどんなことができるの？」
そうこれは重要なことだ。モンスターは各自技を持っている。それを使って敵を攻撃し、倒すのだ。
「技？・・・ワザねぇ・・・」
そういうと彼は、料理台に立ち・・・キャベツの千切りを始めた・・
・・・切り終るとこちらを向き「どうだ！」と言った・・
・・・頭が痛くなってきた・・・
「すごい速度だろう！それにきちんと全て切れており、髪の毛の細さだ！！」
・・・たしかにすごい。速度も申し分ない・・・しかし・・
「で？それで相手モンスター倒せるの？」
「・・・・無理だな！」
「・・・そう」
どうしよう・・・今から訓練を行う暇もない。登録はとっくに済んでしまっていて、今更後には引けない・・・詰んだか。
「もう遅いし寝るよ、いい案が浮かんだら教えて・・・」
彼がそう切り出したので、私も「お風呂入って寝ます」と告げる。
するとなにを思ったのかこちらを向いて、とても真面目な顔して
「一緒に入ってもいいか？」と告げた。
「・・・ん～。怖いからヤ」
と言うと「そうか。残念だ」と、少しも残念そうな顔を見せず布団にもぐった・・・
・・・次の日、闘技場にて・・・
闘技場につくと、彼は辺りをキョロキョロしながら、私について

来ている。
控え室に移動中嫌なやつに会った。
「あーら、おはろうございます。コニーさん」
「おはよ。ローズ」
後ろの彼も「おっす」と言っていた
彼の言葉はローズには分からなかったが、挨拶をした、ということは分かったようで。
「おはようございます」と返していた。
「ところで、本当にその子を出しますの？」
・・・考え直したいが今更引けない。
「ええ、そのつもりです。」
「大丈夫なんですの？召喚して一周目で試合なんて、三流のすることじゃなくて？」
・・・一々、正論を言う。まったくその通りだが・・・
「いいんです、この子の実力が知りたいので。無理はさせないつもりです」
ローズは笑顔で「それならいいですわね」と言った。
「私の『アーマーナイト』も実は一周目でしてね。うちの執事が大丈夫とあまりに推挙するものなので、出すことにしましたの」

・・・アーマーナイト・・・
デュラハンの上級モンスターだ。力と防御力が素晴しく高く、知力、体力ともに申し分ない。すばやさに弱点があるが、それを鑑みてもあまりある強さを持つモンスターだ。又、技のレパートリーも広く、火、雷、風を操る。神域の守護者として存在することもある一流モンスターだ。

「そう、あーまーないとをだすの・・・そう・・」
ああ、負けたな・・そう思った。もし『アーマーナイト』と当たる様なら棄権しようと心に決めて。

「では、ごきげんよう」
そう言ってローズは去っていった。
「『アーマーナイト』ってなんだ？」
彼から問われたので、こう言うものと答えるとあからさまにイヤそうな顔をして「帰る」と言って出口に行こうとしたので、『首輪』をしめて、控え室に引きずっていった。
・・・一回戦、第一試合で、ゴーレムに当たった・・・
ゴーレムは足が遅いので、避けながら戦えるだろう。そんな風に楽観的に見ていたのに・・・
・・・とんでもないことになってしまった・・・

・・・とんでもないことになってるな、自分・・・
しばらくの静寂の後、割れんばかりの歓声が闘技場を包んだ。
早足で会場を後にする俺。通路に出るとコニーが待っていた。
「なにあれ！どうやったの？ゴーレムの体に穴を開けるなんて・・・あんたドラゴン族？」
などと聞いてきた。
「あれで全力じゃないんだ・・」
彼女は一瞬なにを言われたか分からなかったらしく、聞き返してきた。
「え？どういうこと？」
「だから！！あれで全力じゃなかったんだよ！！どうなっちまったんだ！！俺の体は！！」
動揺していた。だから、彼女に掴み掛かり・・・結果一番上のボタンが飛んで・・・
・・胸が見えそうになった・・
「！！」俺は動揺した！！３０童〇の俺には・・・いささか刺激が強かった。
「おちついて！痛いよ！」

そういう彼女の言葉に気がつき。ゆっくり離れた。
「君が強いのは分かったから、次はもう少し手加減して戦ってよね」
・・・そういう彼女の胸は、全開に近かった・・
ヘタレの俺は、後ろを向いて「分かった」と言うしかなかった。
前の試合を見ていたのだろう、相手選手は、棄権した。当然だ、ゴーレムに穴を開けるようなやつの相手は、無理に決まってる。しかし、最終試合の相手だけは、棄権しなかった。
・・ロールケーキ登場だ。
「ウフフ。相手にとって不足はありませんわ！やってしまいなさい！『アーマーナイト』！」
「グオオオオオ！」
アーマーナイトが吼えた。
「んじゃいってくる」
俺がそう言うと。
「くれぐれも殺しちゃダメよ！」
コニーさん・・・そいつは簡単じゃないんよ。

ゴーーン！！

試合開始だ。
アーマーナイトは、こちらに向かって槍を突き出し、雷を放ってきた・・・難なく避ける俺
次に小さな竜巻を放つ・・・両手で作ったカマイタチで竜巻をつぶす。
炎をまとって突っ込んできたので・・・足を地面にたたきつけて地割れを起こし、そこに落っことす。
・・・ふう・・つかれた・・
「きゃーーーーーーーーーーーー！！！！あたしのアーマーナイトがあああああああ！！」

どっからかうるさい声が聞こえてきた。さて帰るかと思って、出口に向かうと・・・

ドガンッ！

と目の前の地面からアーマーナイトが出てきたので・・・

ドガンッ！

と、踵落しをかまして今一度地面にお帰り願った。

「優勝は！コニー・リコリスのケン！！」

ワーーーーーーーーー！！

こんなチートで勝ってもまったくうれしくないので、さっさと帰ることにする。しかし・・

「表彰されてお金貰わないとダメ！」

と言われたので、しぶしぶ表彰され帰途についた。

宿に戻る途中、ロールケーキに何か言われたが、言葉が理解できないので・・

「次、見つけたら犯す！」

と言っておいた。どうせこっちの言葉も分からんのだし、おあいこだろう・・実行はする気だが・・

コニーに普通に怒られ首を絞められた。

宿に着くと・・・

「明日、私の実家に行きそこから本格的に調教に入ります」

と言われた・・・え？、俺調教されんの？

・・・ふと考える３０の童貞でＭに目覚める自分・・・

「ありえん！！！」

「え？だって文字とか覚えるんでしょ？」

・・・そうだった、うっかり忘れてた。

「お願いします。コニーさん力をお貸しください」
「よろしい、貸してあげましょう」そういってにっこり笑うコニー
・・・こいつ・・可愛いじゃないか・・
「さ、疲れたし寝ましょ」
そう言ってコニーは風呂に消えた。
・・・色々疑問はある。
なぜ俺はいきなり強くなったか。
コニーは、俺を帰してくれる気があるのか。
どうやって帰ればいいのか。
・・・しかし、だ。
コニーの風呂に突貫してから考えようと、思い直し、リビングをあとにするのだった・・・

結果として顔が青くなるまで首を絞められたのち・・宿から放り出されました。

大会？なにそれ？料理の一種？（後書き）

執筆は気が向いたらです。
読んでくださるだけで、とてもうれしいです。
頑張って書きます！

メイド？なにそれ？最強種？

・・・もしかしたら、彼は・・・

コニーは風呂上り、窓辺の椅子に座り物思いにふけっていた・・・
ケンは、けろっとした顔で戻り「ちょっと散歩に行く」といって今はいない。
納戸から出てきた石版より出現した。あのおかしなほど強いモンスター。
あれは父の研究の成果なのかもしれない。あのモンスターについて具体的な記述を資料から見たことはない。
しかし・・・
「あれはもしかしたら、最初の竜神族（ドラゴニュート）なのかもしれない・・・」
そう考えれば辻褄が合う・・ような気がする。
「考えてもわかんないんだし、ここに資料は無いし、寝よ寝よ」
そう頭を切り替え、さっさと寝ようとしたとき・・・

ドゴン！！！・・・ゴゴゴゴ・・・

ものすごい揺れを感じた。
「なに？地震？」
ゆれはすぐに収まり、部屋は落ち着きを取り戻した。
「大きかったわね。ま、何事もなくてよかったわ。」
そう言ってから・・・まさか・・・ね。
と考えて、そこまで強くはないでしょ。と考え直し、自分のモンスターが帰ってくる前にコニーは眠りについた・・・

ぐおおおおーーー

朝一番のドラゴンの咆哮でコニーは起きる。外は快晴だった。
「今日もいい天気ね」
そう言ってキッチンに行くと、ケンが料理をしていた。
「おはよう、今日家に行くんだろ？朝飯用意したから、早く行こうぜ」
「・・・えらく積極的ね、何かあった？」
そう聞くとあさってのほうを向きながら「なにもないよ」と答える。
・・・あやしい・・・少し探るか・・
「昨日地震があったんだけど、知ってる？」
すると　ビクッ　っとなったあとに「し、しらないなぁ」と返してきた。
「はぁ、ばれないようにやってきたんでしょうね？」
「そこは抜かりないぜ！！・・・あ」
「・・・馬鹿ね・・・」
呆れつつ、食事を始める。しばらくすると　コンコン　と部屋をノックされた。
「はーい、どちらさんですかー」と言いつつドアを開ける。
モンスター協会の腕章をつけた女性が立っていた。
「昨日の夜、どこかのモンスターにより、草原に大きなクレーターが作られていました。まだ、そのモンスターは特定できていませんので、十分注意して行動してください。」
「・・・は、はい」
青ざめてうつむいた私を見て、協会の人は怖がっていると感じたようで・・・
「大丈夫です。今ギルドを通して、ランク3以上の方に調査依頼がかかっています。すぐにでも、発見してくれるでしょう。」
そう、笑顔で答えてくれた。
私は後ろを一瞥する・・・口笛吹きながら窓の外を見てやがる・・・

「わかりました、私はまだランク８なのでお手伝いできませんが、頑張ってください」
そう言って協会員の女性を押し出すと、テーブルに戻って猛然と食事を再開した・・
・・・一秒でも早くココを出なくては・・・
それを見たケンが一言。
「よく噛んで食べないと、つまるよ」
「あんたがいけないんでしょうがぁ！！」
・・・『首輪』をキュッと締めるのだった・・・
早々に出発準備し宿を引き払うと、町の門に向かって歩き始める二人。
「どっちに向かえばいいんだ？」
「・・・昨日説明したじゃない」
向かう先を指差しながら「こっちへ向かってまず門を出る、その後は道なりに半日ってとこね」
「結構遠いんだな、馬車とか乗り物はないのか？」
「あのね、ウチは貧乏なの余計なお金なんてないのよ」
「昨日の優勝賞金で行けばいいじゃないか」
「・・・ふう、そっか。まだ金銭について説明してなかったわね。後で詳しく教えるけど、昨日の賞金なんかじゃ、食費にして一週間分てとこなのよ。わかる？」
「・・・けちだな。もっとくれてもいいじゃん」
「ランク８じゃその程度よ。楽したかったらもっと稼ぎなさいな」
「りょーかい」
そんなことを言いながら門をくぐる。門番の兵士に通行許可証を見せ、道なりに歩き始める。
・・・しばらくして、兵士が見えなくなるとケンが提案してきた。
「俺がキミをおぶって、もしくは抱えて走る。ってのはどうだい？」
・・・なかなか魅力的な案だ。しかし・・・

「安全なの？あたし死ぬのはゴメンよ」
そう、安全なのだろうか？最悪ブレーキは『鎖』に頼ってもいいとして・・・も、だ。
「ダイジョブダイジョブ、問題ないよ。それに、ちんたら行くより早くついたほうがいいだろ？」
・・・それはそうだ・・しかし・・・
「ほんとに大丈夫なんでしょうね？」私は念を押す。
「もーまんたい」
・・・不安だ・・・
しかし、私が結論を出す前にケンが私を担ぎ上げて・・・「んじゃいっくよー」と、走り出してしまった。
「ちょ、ま・・・」
・・・最後まで言葉にできなかった・・・
恐ろしいほどのスピードで駆けていくケン・・・「わははは」と笑いながら走るので・・・怖い。
後に聞いた話ではこの街道に　笑いながら高速で走る化け物がでる　とウワサになっていた。
３０分ほど、恐怖を味わっていると、家が見えてきて・・・
・・・そのまま通り過ぎた・・・
「ブレーーーキーー！」叫びながら『鎖』で少しずつ自由を奪っていく。
しばらくして、足元に一匹転がっていた。
「あんた！通り過ぎたでしょ！！」
そう言うと「すまなかった。ゴメン。許して」と返ってきたので、仕方なく拘束を解く。
「さ、もう一度。今度はゆっくり移動して」
そう告げると「りょーかい」と言いながら、私を抱えて走り出した。
「ついた」そう告げて家に向かって歩き出す。

後ろに（まったく疲れた様子なく）ケンがついてくる・・・
久しぶりの我が家だ。以前と変わりなく、木製の家と厩舎、それに家の前の花壇には花が咲いていた。
花壇には見覚えのある姿の女性。
「レイ！！」
そう声をかけると、ゆっくり立ち上がり驚いた様子でこっちへ向かってくる『メイド服姿』の女性があった。
「おかえりなさい、お嬢様。」そう言うと深々と一礼して笑顔を見せる。が、後ろにいる者を見て、眉を顰めた。
「あちらはどなたですか？」そう聞いてくるレイ。
「あーあれはね・・」私が答える前に、その馬鹿は、レイの前に進み出ると膝をついて・・言った。
・・・「美しいお嬢さん、私とお付き合いしてくださいませんか？」・・・

・・・メイド服、メガネ、黒髪さらさらロング。これを見ても反応しない男は、男じゃない！！・・・
昨日はやりすぎてしまった。自分の能力が知りたくて、少しやりすぎてしまったようだ。異世界にきて３日目で指名手配とは・・・笑えん。
そんなわけで、少しでも町を離れたかった俺は、コニーを抱えて疾走することにした。
・・・早い・・・すんごく早い。時速２００キロくらい出てる気がする。
・・・楽しくなってきた。「わはははは」と笑いが出てしまう。しかし、しばらくすると、体が自由に動かなくなってきた。『鎖』の効果のようだ。
・・・どうやら、調子に乗って通り過ぎたらしい・・・めんごめんご。

道を引き返して、ようやく着いた。
見た目はロッジだろうか。横に厩舎が添え付けられている。
・・・いいとこだな。・・・そう思った。
「　　！！」コニーが誰かを呼んだようだ。
そして、視線を向けた俺は・・・止まってしまった・・・
・・・素晴しいメイド服、美しい黒髪、ナイスなボディ、そして欠かせないメガネ・・・
俺は無意識に彼女の前に跪き・・・「美しいお嬢さん、私とお付き合いしてくださいませんか？」
と、告げた・・・
二言三言、コニーと会話した彼女は、笑顔で答えてくれた・・・

「いいですよ」

この時の俺の喜びはとても言い表せない・・・年齢＝彼女いない暦の俺はこの時をもって・・
・・・彼女持ちになったのだ・・・
感動のあまり涙を流す俺・・・
そんな俺に彼女はこう言った。
「では始めましょうか・・・」

「・・・は？」
呆然とする俺を前に、彼女は真っ黒な『刀』を抜き放ち・・切っ先をこちらに向けて・・言う。
「到着してすぐに、訓練がしたい、とは素晴しい意欲ですね。その意気をを買って、全力でお相手しましょう。」
・・・俺は・・・一瞬なにを言われているか分からなかった。言葉が通じることに疑問すら抱かず、呆然と彼女を見つめていた・・・
・・・だから、その初動を避けれたのは、奇跡に近かった。
袈裟に刀が振り下ろされ・・・避ける！。
「あぶな・・・本気ですか？」
そう言うと彼女は笑顔で「本気ですよ？だから、あなたの本気も見せてくださいね」と言った。
・・・ヤバイ・・・普通にやり合ってもやばい相手だ、と、本能がささやく。
少し距離があったはずが一瞬で詰められ・・・袈裟、薙ぎ、斜め、切り上げ、突きの５連撃が来る。
・・・フェイントも織り交ぜての攻撃。昨日のやつらとは格が違う一撃。
なんとか全てを避けつつ問う・・・
「なん・・で・・たたか・・うひゃぁ！・・・わない・・と・・いけな・・いんですか？！！」
すると、一瞬で距離をとり一言
「あなたの実力を知らないと、指導できないじゃありませんか」
・・・笑顔で返された・・・そして・・
「あなたも本気できていいですよ。私はそう簡単には倒せませんから」
そう言われると、本気で行きたくなって来る。
紳士として有名な（だと思ってる）俺だが。自分の限界は知りた

い。なので答える。
「分かりました。本気で行きますね・・・」
「ええ。そうしてください」
少し離れた距離を、全力をもって一瞬で詰める。この時初めてメイドさんの顔に驚きが生まれた。
突っ込む俺にメイドさんが刀を合わせてくる。
突きを腕を滑らすようにして流し、足を踏み込んで腹部に掌体を一撃。

ドンッ！！

すごい音がして地面が沈む。が、避けられる。しかし、この型は連撃だ。
2歩目はさらに接近してみぞおちに一撃。浅く入り反撃される、それを、右手でいなして・・・さらに接近し、胸の間に肘を埋め込む。

肘が胸部を破壊する感覚がして・・・彼女が吹き飛んだ・・・
・・・大きな岩に激突して岩が崩れ落ちる・・・ああ、やっちまった。そう思ったとき・・・
・・・首に一本の刀が添えられた・・・
「甘いですね。変わり身です」
そして、俺は安堵する、と同時に敗北を認めて両手を挙げた・・・
「あなた、なかなか強いですね。しかし、攻撃が素直すぎる。それでは、高レベルにはいけませんよ」
そう言われて振り返った先には・・・
・・・黒の上下、下着だけの天使がいた・・・
「？きいてるのですか？」
「はい！」
・・・その後、彼女が服を着替えるまで・・俺は首を絞められな

がら・・・鎖でぐるぐる巻きにされた・・・

・・・メイド服・・・最高！！・・・

メイド？なにそれ？最強種？（後書き）

えーと、メイド服は実は私の趣味ではありません。
私は、ピンクナースのほうが・・ゲホンゲホン・・

設定？なにそれ？妖精さん？（前書き）

るーるる♪るるるるるーるるー♪（徹〇の部屋の音楽）

「ごきげんようみなさん。」

「私、ローズ・アサシンですわ。」

「台本を読んだところ、この先出番がない様なので、勝手に出番を作らせていただきました」

「さてこのコーナー、皆さんからのお便りをいただいて、質問に答える」

「そういうコーナーですの。以後よろしくお願いしますわ」

「さて、第一回のお便り、P．Nうなぎさんから・・・」

『こんにちは、ロールケーキさん。』

「私はロールケーキではありませんわ！！！！」

ドガッ！！（殴る音）

バゴッ！！（セットに穴があく音）

ゴゴゴゴドスン・・・・（セットが倒壊する音）

「・・・・・・」

るーるる♪るるるるるーるるー♪

「今日はこの辺で・・また次回お会いしましょう♪」

設定？なにそれ？妖精さん？

・・・強いとは思っていたけど。まさか、レイに変わり身をさせる程とは・・・

戦闘が始まって数分、今目の前には、首に刀を当てられて降参しているケンとレイの様子が見えている。一見、レイの勝利のように見えるが、実のところ痛み分けだろう。

・・・なぜなら服を脱いだレイの腹部がひどい内出血を起こして、真っ赤に染まっているのが見えるからだ・・・

召喚（うまれて）されてまだ一週間も経っていないとは、誰も信じないだろう。

レイは戦女神（ヴァルキリー）。その強さは、父さん自慢の一つだ。

・・・戦女神（ヴァルキリー）・・・

ヒトガタモンスターそ最高峰と言える。このモンスターは、協会ランクＳ以上の人しか飼育が許されていない。その強さは多岐にわたり、唯一の弱点と言えば、その撃たれ弱さくらいと言えるだろう。

それ以外はすべてが高ランクであり、学習によって人語を話すことすらできるようになる。寿命も長く、幻想種や神王種といった特殊なものを除けば、一番と言っても過言ではない。まさに最高の種族だ。

レイのランクはＳでスザクの称号も持っている。一般にランクは８～１まであり、その上のモンスターはＳのランクが与えられる。称号はその上にある、４神の大会で優勝しなければ手に入らない。

それほどの強さを持つレイに苦戦させるとは・・・

・・・ケンが後ろを振り返って、レイの下着姿を凝視している・・・うん、転がそう・・・

『首輪』と『鎖』でぐるぐる巻きにして放置したあと、レイの手当てをすべく家に入る。
「あの・・・あれはいいのですか？」
「いいのよ。レイの裸を鑑賞しようなんて１０年早いっての。それより、けがは大丈夫？早く中に入ってカラーに治してもらおう」
「そうですね。少しキツくなってきました。カラーならリビングで読書の最中だったはずです」
・・・家の中に入り、カラーを探す・・・
本の前に妖精が一体、ちょこんと座って本を読んでいた。
「カラー、お嬢様がお戻りになられましたよ。あと、私の治療をお願いできますか」
カラーと呼ばれた妖精は、こちらを見てあわてた様子で飛んできた。
「どどど、どうしたのそれ！！さっきまで元気だったじゃない。レイ姉」
「私を見るより、お嬢様に挨拶なさい」
そう言われた妖精は、羽をパタパタさせて空中に留り、隣を見る。
「！！！コニー姉！おかえり！！！早かったね！！今日の夜着くっていってたのに」
「ただいま。カラー、とりあえずレイの治療をしてあげて。話はそれからね」
「うん！」
そう言うと妖精は、ケガをしたレイの腹部を　飛び回り光の粒を落としていく・・・
程なくして、レイの腹部は以前と同じようにきれいになった。
「で、どうしたのこの怪我。誰にやられたの？私がとっちめてやるんだから！！」
・・・妖精（フェアリー）・・・
俗に幻想種と呼ばれる、非常に珍しいモンスター。妖精種自体世

界で3種類しか目撃例がなく、その生態はよくわかっていない。能力は、知力がズバ抜けて高く、妖精の亜種に至っては、ドラゴンを使役していたとの報告もある。体がとても小さく、成人男性の手の平程。イタズラが好きで、よくものを隠す。

「カラー、いいのよ。私がそうするように言ったのだから、気にしないで。ありがとう。楽になったわ」
「これくらい、いいよ。で、なにがあったの？」
「お嬢様が遂に、ご自分のモンスターをお持ちになられたのです」
「おおお！やったねコニー姉！おめでとう！」
「ありがとう。で、これをやったのがそのモンスターってわけ」
カラーは怒ったように赤く点滅する。
「むー！許せない！こんな美人に手を挙げるなんて！」
「いいのよ。あの子の実力が知りたかったの。だからこれは、しかたがないことなのよ」
そう笑顔でこたえるレイ。それを見たカラーは何も言えなくなってしまった。
「とにかく連れてくるから、喧嘩しちゃだめよ」
「はーい」と、カラーが返事をしたのを確認して、ドアを開けると・・・
・・一匹のミノムシのようなものが、そこに転がっていた・・・
瞬間的に扉を閉める。
・・・ドアの向こうから「むぐーむぐー」と声が聞こえる。
「コニー姉、今のなに？」
・・・今のが、あたしのモンスターです・・・

・・・勉強、なんか大嫌いだ！・・・
なんだかんだと騒いだ後、やっと開放された俺は、レイさん、カラーちゃん（妖精だった、すごいびっくり）と自己紹介をし、お昼

をいただいた。（レイさんが作ってくれた、絶品だった）
その後コニーから「今後のために会話や読み書きができるようになっておきなさい」と言われ。
「レイさんお願いします！」と言ったら、笑顔で「イヤです」と言われた・・・ショック。
なんでも家の管理があるらしく俺にかまってる暇はないらしい。
そんなわけで妖精さんことカラーさんから教わる事となった。
「それじゃ私がしっかり教えてあげます」
「よろしくお願いします！」
「よろしい、では基本的なことからね」
この世界の言語は「人界共通語」「モンスター共通語」「古代語」「神界語」の四種類しかないらしく、これなら全部覚えられるんじゃね？と思っていたのだが・・・
「難しい・・・」
そうなのだ、とても難しいのだ。人界共通語は、今俺が話しているモンスター共通語（日本語）とは待ったく別体系の言語で、英語圏の人が日本語を覚えるよりも難しかった。そんなわけで・・・
・・・5分後・・・
「・・・無理」机に倒れこむ俺がいた・・・
「ま、いきなり全部を覚えろっていってもむりよね」笑いながらカラーちゃんが言う。
「まあ、今日は触りだけにしといて、本格的にやるのは明日にしましょ」
「はーい」
明日以降か、気が重いな。
「それよりこの世界について色々知りたいでしょ？聞きたいこと質問していいよ」
「お、ほんと？ありがとう。んじゃ・・・そうだな・・・モンスターってなに？」
「また難しいこと聞くわね」

そうねぇ・・と言いながらカラーちゃんは少しずつ話してくれた。

・・・モンスター・・・

それは人が世界を治めるための重要なパートナーであり、人の世では欠かせない存在だ。その多くは人の生活を助けるものであり、彼らのなした功績はきわめて大きい。一般に仕事や生活で人に寄り添って助けてくれる存在で、郵便配達をする「ロードランナー（小型恐竜種）」や土木工事をする「ゴーレム」などがあげられる。元は、女神様により「人が世界を統治できるように」と遣わされたもので、共に助け合いながら発展を遂げてきたのだ。

「へー・・・なるほど」

「まあ、中には例外もいて『女神の兵』になったモンスターもいるからそれが全てじゃないけどね」

「女神の兵？」

「ええ、俗に『神王種』と呼ばれる存在よ」

・・・神王種・・・

『女神の兵』と呼ばれる彼らは世界に5体いることが知られている。

北の大陸を守る「朱雀」炎を纏った鳥の姿をしていて、不死の存在と言われている

東の大地を守る「神龍」とても超大竜でその瞳は全てを見通すと言われている

西の大地を守る「幻虎」その姿を見たものはいないが、伝承ではどこにでもいて、どこにもいないらしい

南の大地を守る「神樹」世界の始まりから生きていると言われる大きな植物（プラント）だ

中央大陸を守る「女王」ヒトガタをしており女王の城に住む存在で、その姿には誰もが膝をつくらしい

「この5体が現在確認されてる『神王種』よ」
「へぇ、強いの？」
「さあ、戦う以前に彼らを前にすると自然と頭を下げてしまうそうよ」
「なるほど・・・そういば『神』じゃなくて『女神』なんだな」
「ええ、この世界には神は一人だけ『女神』様だけだもの」
「他の神様はどこにいったの？」
「さあ・・・あたしが知る限りだと、過去に神々の争いがあって今は『女神様』一人だけってことね」
「なるほど」・・・つまり俺が帰るには女神様に会う必要があるって事か・・・
「そろそろご飯の時間だわ。今日はこれくらいにして明日また続きをしましょ」
「りょーかい」
「明日からはビシビシいくから、そのつもりでね」
「うー・・わかりました」
・・・その後、食事をした後、レイの入浴を覗こうとして、木に吊るされることになるのだが・・・
それはまた別のお話・・・

追記設定
・・・モンスター協会とギルド・・・
この世界には多数のギルドがあるがこのお話でギルドというと、主にモンスターギルドを指す。
ギルドだはモンスターにちなんだ様々な依頼を受けることができ、それで生活を成り立てている人もいる。また、ギルドは町を警備を引き受けており、警察と同じように動く。そのネットワークは世界規模の上、必ず町や村にひとつ以上あり、郵便や荷物配達をやって

いるところもある。
　モンスター協会は、モンスターに関連するほとんど全てを行っていると言っていい。ギルドと重複するところもあるが、モンスターの召喚や飼育管理、モンスターに関する様々な雑事も行っている。登録はギルド、協会どちらでも可能だが記録は協会でしか閲覧できない。モンスター大会の主催も協会だ。

・・・大災厄・・・
　この世界は7度の大災厄にみまわれ、その都度主役が変わっている。順に「蟲族」「竜族」「不死族」「物質」「水族」「植物」「獣族」そして現在「人族」が世界を治めている。すべての大災厄に共通して種の傲慢な行いが原因と言われている。

・・・契約の首輪と見えない鎖・・・
　契約の首輪と見えない鎖は、女神様の髪の毛で出来ているといわれているが、実際のところよく分からない。高位の神官が契約の魔方陣より生み出すもので、使用者の魔力を利用し伸縮するフシギ物質だ。鎖の長さも自由自在だが、使用者の魔力が乏しいとその距離も短くなる。普段は目に見えないが、魔力を通すと見えるようになる。絡まったりせず、常に一本まっすぐの状態を保てる優れものだ。

・・・魔法・・・
　一応この世界にも魔法はある。しかし、使うのはもっぱらモンスターであり、かれらは本能的なものとして仕様しているので、詠唱や準備と言ったものをあまり必要としない。ケンの地割れやカマイタチは魔法じゃなく物理現象として起こしている。レイの変わり身は魔法で、体力の半分と服を引き換えに物質として触れるモノを残して敵の背後に回る、いわゆる奥義だ。

設定？なにそれ？妖精さん？（後書き）

・・・停電で3回書き直しました・・・
ありえん・・・バックアップはしっかりとりましょう。
次回投稿は８／１２になります。
・・・次回予告・・・
女性三人？と暮らすウハウハルートに突入した３０歳童貞。
しかしそこに、幼馴染を名乗るものが登場！！
「アンタ邪魔」そう言われたとき、ケンはフラグがまったく立っていない事に気づく！
・・・次回！「フラグ？なにそれ？買い物袋？」をおたのしみに！！

・・・あー、ウソつくのって楽しいなー。

フラグ？なにそれ？買い物袋？（前書き）

るーるる♪るるるるーるるー♪（○子の部屋の音楽）

「ごきげんようみなさん。」

「私、ローズ・アサシンですわ。」

「前回はお見苦しいところお見せしてしまい、申し訳ありませんでした。」

「気を取り直して今回も始めさせて頂きますわ」

「それではP．Nウナギパイさんから・・・」

『こんにちはロールケーキさん』

・・・ピクッ

「おほほ、こんにちは（死ねばいいのに）」

『質問です。ロールケーキさんの髪についてるケーキはおいしいのですか？あじはどんなですか？教えてください！』

「食べられるわけありませんわ！！！」

ドゴッ！！！（セットに蹴りを入れる音）

ドガン！！！（セットが倒れる音）

「おじょー・・さま・・・」（控えていた執事が倒される声）

るーるる♪るるるるーるるー♪

「今日はこの辺で・・また次回お会いしましょう♪」

・・・次まともなのが来なかったら、便りを捏造しましょ・・・

フラグ？なにそれ？買い物袋？

・・・ケンがうちに来て2週間がたった・・・

特に厳しい訓練を課すこともなく、毎日、人語を理解させるために当てている。

「ちがう！！！なんどいったらわかんのよ！！」

「その発音の違いがわかんねーんだよ！！」

カラーとケンの言い合いも、もう慣れたものだ。そろそろあたしのところに飛びついてくる時間だ。

ガチャン！！・・・ドアが開く。

「コニー姉！！」そういってカラーが、その可愛らしい姿であたしのところに飛んできた。

「どうしたの？カラーまたケンがなにかした？」

「そうなの！あいつ自分が馬鹿で理解できないからってあたしに当たるの！ひどいよ！」

そう言うカラー。この二週間であいつは日常会話くらいなら、なんとか話せるようになった。毎日やっているのだからそれくらいは、とは思うが、『契約の首輪』を使っても意思疎通ができないモンスターもいることを考えれば、それは十分すごいことだった。

「そう、わかった。またあいつの首をキュッっとしめておくから、今日の締めにテストをやりに行って。ね」

「はーい」渋々、と言ったように今日もリビングに戻っていくカラー。実際、彼女の教え方もうまいのだろう。そろそろ仕上げに何かさせたいところだ。

「お嬢様」そう呼ばれて振り向く。レイがいつものメイド服姿で

立っていた。
「なに？レイなにかあった？」そう尋ねる。
「実は、日用品が無くなりそうでして、町まで買いに行く許可を戴きたく参りました」
「そう。あたしの許可なんてなくても行ってもいいのよ」
「そうは参りません。お嬢様は現在、当家の当主なのですから・・・」

・・・父がいなくなって大分立つ・・・
いなくなった日のことはよく覚えている、レイが称号もちになった次の日、もう一体の称号もちトールと共に研究したい遺跡がある。と言って出かけていったのだ。父がいなくなることなど、よくあることだったので、あまり気にしていなかったが、出かけて一月たったある日、レイの『契約の首輪』が『戒めの首輪』に変わったのだ。

・・・戒めの首輪・・・
マスターが死亡、または、超長距離に行ってしまい、首輪に干渉できなくなると、女神が自動的にその権限を譲り受け、『女神が管理するモンスター』になる事で起こる現象だ。『契約の首輪』との違いは、成長の停止、技の威力の減衰、人に害する行動の抑制等色々ある。

・・・あの日は、すごく泣いたっけ・・・
昔を思い出し、少し涙が出そうになった。
「・・・お嬢様？」レイに声をかけられてハッとする。
「レイ・・・」
「なんでしょうか？」
「父さん・・・生きてると思う？」
・・・それは、ただの感傷だったと思う。生きてるなんてありえない。父はSランク調教師であり、モンスター学の権威でもあった。

アホみたいな魔力を持ち、世界の裏側からでも『首輪』を維持できる・・・なのに・・・

「生きておられます」

はっきりとした口調・・・私は少し驚いた。

「何で・・・そう思うの？」・・・・問う。

「なぜ・・・ですか。私は『首輪』を通して、マスターと繋がっているので、理解（わか）るのです。」・・・と。実際、繋がっているのは女神様とだったが、私はそんなことは言わず。

「・・・そう・・・早く帰ってくるといいな・・・」と言った

「・・・そうですね」

青い空を見ながら、父の無事な帰還を祈った。

「お嬢様、それで、許可はいただけますでしょうか？」

思い出したように問われて「いいよ」と返す。

「ありがとうございます。では、明日にでも」そう言いながら夕食の準備に戻ろうとするレイ。

・・・！・・・いい事思いついた・・・・

「レイ待って！」とっさに声をかける「はい？」と答え、不思議そうな顔をする。

「何かございましたか？」

「あのね・・・」そういいながら、あいつのオロオロする姿を想い、ニヤニヤが止まらなかった。

・・・おつかい。それは一種の登竜門だ。幾多の試練が待ち受ける、恐怖の旅・・・

「そんなわけであんた、明日買い物行って来て」

そう、コニーに言われたとき、俺はとっさに反応できなかった。・

・・なんだと？・・・・
「一人で・・・か？」
「当然でしょ」
あたり前田のクラッカーよろしく、なんでもないように言うコニー。
「ちょ、ちょっと待ってくれよ！俺まだ会話が完璧にできないんだぜ。そんな俺が行っても間違ったもの買ってくるのがオチだ」
そういう俺に対し「間違ったら、もう一回行けばいいじゃない」というコニー。
・・・やばい・・・決定事項なのか・・・
「コニー姉！それいい！」
なんて、カラーちゃんも同意する。
「お願いしますね。ケンさん。助かります」「まかせてください！！！」反射的に答える。
・・・レイさんに言われるとつい気張ってしまう俺・・馬鹿だな・・・
「内容はあしたメモを渡しますので、頑張ってきてくださいね」
「・・・はい」
そんなわけで、おつかいに行くことになってしまった・・・

・・次の日・・・
「はい、これがメモです。」そういって俺にメモを渡してくれるレイさん。
「いってきます」町まで向かう俺。
少し鬱になりながら、歩き出す。
・・・誰にも声をかけられませんように・・・
そう言いながらしばらく歩く・・・歩く・・・町の門が見えてきた。
通公証ををみせ通してもらう。久しぶりの町だ。
「さて、どこから回るかな・・・」そういいながら商店が立ち並

ぶほうに歩き出す・・・
・・・迷った・・・「あちゃー・・・」
そういえば、おれはものすごい方向音痴だったっけ・・・母譲りの方向音痴を発揮してことごとく道を間違い。ついた先は、薄暗い路地裏だった・・・
「・・・なぜだ・・・」頭を抱えて座り込む。
落ち着け・・そう自分に言い聞かせ。気分を落ち着ける・・・

チャリーン

目の前に硬貨が投げられる。おばあさんが気の毒そうにこちらを見て。「がんばって」と声をかけて行った・・・
・・・俺は物乞いじゃないのに・・・鬱が進行した・・・

「キャー！誰か助けてー」

どこかからか声が聞こえた。急いでそちらに向かうと、3人の若い人と3体のヒトガタのモンスターがいた。
「叫んでも誰も来ないぜ」
「きてたしても、魔人三体相手になんもできないしな」
そう言いながら、なかなかかわいいお嬢さんに近寄っていく男達。
・・・助けたほうがいいよな・・・
そう思って近づいていく。すると、俺に一番近いヒトガタがこちらに気がついた。
「何だ、お前」ヒトガタが俺に問う。
「正義の味方」と答える俺にそいつは・・・
「そうか、ならウチのマスターを止めてくれ。俺たちじゃ止められなくてな」そう返してきた。
・・・へーいいやつなのかな・・・
そう思い、真ん中の若いやつに声をかける

「待て！なにしてる！」
驚いた様子で、三人がこちらに向き直る。
「何だお前？」そう問われたので「正義の味方」と答える。
お嬢さんが期待のこもった目でこっちを見ている。
リーダー？が、俺に向かって言う
「さっさと失せろ。怪我したくなければな、ここにいる魔人三体は脅しじゃないぞ」
「そうか、俺ランク8だからなーああこわ。」
そういうと、やつらは笑いながら「馬鹿かこいつ」と言ってきた。
「あのなおっさん。何のつもりか知らないが、消えろ。さもなければ叩き潰すぞ」
「いいねぇ。ちょうど暇してたところだ。かかってきな」
リーダーが笑みを消し、一体の魔人にいけと命じた。

・・・魔人・・・
ヒトガタのモンスターで雷撃、エナジーボルトといった魔法攻撃や力技を得意としている。
ランク3以上の調教師が飼育を許される、結構強いモンスター。
能力的には力、知力が秀でているが、素早さや防御力に難点があり、攻撃されるとすぐに沈んでしまう可能性がある。

俺は、小手調べのつもりで軽くけりを出した。フェイントのつもりで、結構ゆっくり放ったので、避けられてから・・・と思っていたが・・・

ゴカッ！・・・ズズン！！！・・・・

・・・当たってしまった・・・
しかも、泡を吹いている・・・
「おい！タロー！しっかりしろ！」

・・・犬じゃないんだから・・タローて・・・
「引き上げるぞ！！」リーダーの一言でタローを担いで走り出す。他二体の魔人。
帰り際仲間を担いだ魔人に「ありがとう」と小さく言われ「どういたしまして」と返す。
あっという間に見えなくなった。

「ふう・・・」一息ついて帰ろうとするところに・・・
「ありがとうございます！」そう言いながら女の子が胸に飛び込んできた・・・
・・・チチでけえ・・・
そんなことを思いながら、緩まる頬を必死に取り繕い。
「いえ、自分は当然のことをしたまでです」と返す。
「まあ、謙虚な方・・・」頬を赤くする彼女・・・
「では、自分は用がありますのでこれで・・・」そういって立ち去る俺。
「あの！せめてお名前を」
「名乗るほどのものではありません」そう言いながら路地に向かって歩き出す。
・・・俺かっこいい！！・・・そう言ってしばらく歩くと・・・
・・・お嬢さんがいるところに、戻ってきてしまいました（笑）・・・

フラグ？なにそれ？買い物袋？（後書き）

つい筆が進み。書きあがってしまいました。
次回投稿は明日になる予定です。（今度はほんと）

・・・次回予告・・・
助けた女の子（巨乳）と一緒にショッピング！
これってデートじゃね？人生初のデートにテンション上がりまくり。
いい気分のところに女の子から
「ぜひウチによっていってください！」と言われ狼男に変身する
３０歳童貞。
遂に、童貞卒業か！！
そんな二人の後ろに３つの影が・・・「買い物そっちのけで何してんの・・アイツ」

・・・次回！もんすたーにっき！「執事？なにそれ？必殺技？」
をみんなで観よう！！

・・・あー、やらかした・・・

執事？なにそれ？必殺技？（前書き）

るーるる♪るるるるるーるるー♪（○子の部屋の音楽）

「ごきげんようみなさん」

「前回、前々回と取り乱してしまい申し訳ありません」

「今回は大丈夫だと思いますので、ご安心くださいませ」

「では、早速今回も始めさせていただきますわ」

「それではＰ．Ｎロリコンも個性さんから・・・」

『こんにちはローズさん（失笑）』

・・・失笑いりませんわよね・・まあいいですわ。

「こんにちは」

『質問です。これ、題名が「もんすたーにっき」になっているのに、日記形式じゃないのはなぜですか？』

「なるほど、いいとこ突きますわね。・・・」

「お答えしますと・・・」

「知りません」（笑顔）

るーるる♪るるるるるーるるー♪

「あら、時間のようですわ。それではごきげんよう。また次回お会いしましょう」

・・・今回はまともでよかったですわ・・・答えは知りませんけど。

執事？なにそれ？必殺技？

・・・何してんのよ、アイツは・・・

ケンが家から出て行く・・・その様子をなんでもないように装い、しばし待つ・・・

・・・そろそろいいかな・・・

そう思って、レイの方を見ると・・・頷いている。

・・・よし！・・・

「いくわよ！！」そう声をかけると「はーい！！」と、元気な声が返ってくる。

「カラー、もう少し声を小さく・・・ね」「はーい！！！！」

・・・さて、行くか・・・

家から町まで、ほぼ一本道なので、カラーにお願いして姿を消してもらう。

「いっくよー！」カラーの掛け声とともに、七色の光の粒が私たちに降り注ぐ・・・

妖精種（フェアリー）の奥義、「いたずらの風」。

光を屈折させ、そこに誰もいないようにみせる、反則級の技だ。音は出てしまうが、基本的に妖精は飛んでいるので、音もなく移動できる。

一応、はぐれた時の集合場所を決め、みんなで手をつなぎ、いざ出発。

「レイ、アイツに追いつくまで、よろしくね」

そういって、レイにつかまる。

「分かりました、しっかりと掴まっててくださいね」

そう言って、あたしを抱えると、結構な速さで疾走した・・・

町に着くと、アイツは辺りを見回し、商店の立ち並ぶ方に歩いて

いく。
「大丈夫そうね。」
何事もなく何品か買って、次の店に向かっている。
「あー、普通すぎてつまんない。」・・・もっと苦労すると思ってたのに・・・
レイが苦笑して「いい事ではありませんか」と言う。
「そうなんだけどねぇ」・・召喚して2週間程度で、言語習得・・・納得できない気がする・・・
「あ、コニー姉、アイツいないよ」
「え？」そう言われて前を見る・・・確かに、消えた。
「レイ、どこ言ったか分かる？」
「いえ、食器類を見ていました、申し訳ありません」
レイに分からないのに、私に分かるはずもない。
「・・・そう」どこに行ったのだろう。次の買い物目標のお店は、目の前だと言うのに。
「いないものは仕方ないよ。レイ姉、あたし新しいリボン見に行きたい！」
「お嬢様」・・・よろしいですか？・・・と目で言うレイ。
苦笑しながら「ええ、行きましょう」と答えると「やった！」とカラーが喜んだ。
・・・アイツどこいったのかしら・・・

しばらくして、店で新しいリボンを買い、ご満悦の様子のカラーを横目に、店を出る。すると・・・
「お嬢様。ケンさんです」と前を指差された。
「どなたかとご一緒のようですね」
レイは、ケンの横にいる小柄な女の子を見ながら思案げに言う。
「な・・・アイツなにやってるのよ」・・・一人で買い物に行かせると、女の子に手を出す・・・
しかも、相手は笑顔で答えているのだ。・・・むぅ・・・よく分

からないがイライラする・・・
「お嬢様？」レイの言葉で　ハッ　とする。「なんでもないわ」
そう言い返し、跡をつける。
「お嬢様・・・あの方はもしや・・・」
レイの言葉で、私も気づく。「そうね、あれは・・・」
確かあの子は・・・「ヴァイオレットちゃんじゃない？」頷くレイを見て、確信する。
「なんでアイツが、よりにもよってヴァイオレットちゃんと一緒なのよ」
まったく、よりにもより度があるってものだ。そう言って見ていると、二人で楽しそうに買い物をしていく姿が目に入る。
・・・ふう、何やってるのかしら、あたし・・・
レイが心配そうにこちらを見ている。
・・・しかし、相変わらず大きいわね・・・あの子の姿を見ながら、そう思う。
「スミレ姉、おっぱいおっきいくていいなー」くしくも、カラーから同意を得てしまった。
「だいぶ注目されていますね」レイの言うとおり、二人は周囲の人たちから注目を集めていた。
当然だ、ヴァイオレットちゃんは『女神の巫女』であり、町のアイドルなのだから。
「ローズにみつかったら、大変ね」
「この間から、西の大陸に向かわれているそうですよ」
「そう、ツいてるわね。アイツ」
・・・チッ、面白いものが見れると思ったのに・・・
そうこうしてるうちに、買い物を終え、大きな屋敷の前で二人が立ち止まる。
何か言い合って、ケンが中に引っ張り込まれた。
「あらー。掴まっちゃったか・・・」そう言いながら屋敷に目を向ける。

「お嬢様、いかが致しますか？」そう問われ「帰ろう」と返す。
「承知しました」・・・では・・・と、町の門へ歩き出す・・・
・・・まったく、何してんのよ・・・理由無きイライラを抱えながら。帰途に着く。コニーだった。

・・・初デート・・・それは魅惑の言葉・・・それは、青春と言う名の甘いデザート・・・

お嬢さんと再会し、恥ずかしながら迷子であることを伝えると笑顔で「ご案内します」と言ってくれたので、厚意に甘えることにした。
通りに戻る途中、自己紹介をし、彼女が「ヴァイオレット・アサシン」であることを告げられる。
・・・アサシン・・・どっかで聞いたことある名前だな・・・
ヴァイオレットちゃんは言うなれば『合法ロリ』だ。この顔、この小ささで、俺の3つ下らしい・・・
「おにいさまですね」そう笑顔で言われると・・おっもちかえり～♪・・したくなる。
「ケンお兄様・・・そう呼んでも・・・いいです・・か？」
恥ずかしそうに言うヴァイオレットちゃん・・・
一瞬、何を言われたのか解らなかった・・・が・・「あの・・」と、声をかけられ「あ、ああ・・」
と、答える俺を見て、うれしそうに笑顔を見せるヴァイオレットちゃん。
・・・死ねる・・・心からそう思い、俺の周りを天使が舞っていた・・・
「ところで、お兄様、今日はどんな御用だったのですか？」
「日用品の買い物だよ・・・ほら」そう言ってメモを見せる。
「わー、きれいな字ですねー。お母様の字ですか？」

「いや、レイさんって言うお手伝いさんが書いてくれたんだ」
「なるほど・・・では、お兄さまの彼女（ガールフレンド）ではないんですね？」
「ん？それはそうだよ。俺に彼女なんているわけない」笑いながら言う・・・悲しい・・・
「では、私が立候補しても、問題ないわけですね？」
「そうだね」・・・・ん？・・・・彼女？・・・・
「えと、ちょっとまって・・」
「なんでしょう？」そう言いながら、首を傾げる姿も・・・愛らしい・・
「あのね、実は俺、今、ある人のモンスターをやってるんだ」そう言い放つ・・・傷はまだ浅いはずだ・・・ここで言わなければ、必ず後悔する。
「・・・そうなのですか・・・モンスターさんだったのですか・・」顔を伏せるヴァイオレットちゃん。
「うん、だから、ごめんね」そう答える・・・がヴァイオレットちゃんは、何かつぶやいてる

・・・おかしい、マナの反応は・・・ごにょごにょ・・

「え？なに？」そう聞き返すが・・・
「なんでもありません」そう、笑顔で返されては何も言えない。
「ではその、お買い物のお手伝いくらいはさせてください」
・・・いい子だな・・・「いいの？助かるよ。」
「いえ、お兄様は迷子になるくらい、町に不慣れなようですからね」
「これは手厳しいな」
・・・そうやって、しばらくの間、彼女と買い物を楽しんだ・・・
彼女には、妹がいるらしく、とても可愛いのだと言う。「俺には、兄と姉が・・・」
と、他愛もない会話をしながらしばしのときを過ごす。そして・・

・

「ふう、これで、そろったかな？」彼女にもメモを見てもらい。全部そろったことを確認してもらう。

「はい。全部あります」彼女のお墨付きを貰い、ひと安心する。

「じゃあ、そろそろ帰るよ」

「待って下さい。今日のお礼に、是非、私の家によって行ってください」

「でも、俺モンスターだよ。家の方にご迷惑じゃないかな？」そうなのだ、俺は今モンスターをやっている。娘がモンスターを兄と呼ぶのは、あまりいい気持ちはしないだろう。

「そんなことは、関係ありません！家のしきたりで、世話になった人にはお礼を。と決まっているんです！」

予想外の力強い言葉に驚いている俺を・・・「さあ、こちらです」と引っ張っていく。

少し歩くと、大きな屋敷が目の前に現れた。

「え？ここ？」そう、言う俺を　ズンズン　と引っ張っていく。

そうして、屋敷に入ると・・・

「おかえりなさいませ。お嬢様・・・」そう言いながら、白髪に白い髭の執事らしき人が声をかけてきた。

「ただいま、ムドー。」そういうヴァイオレットちゃんに、「こちらは？」と聞き返す。

「この方は、今日、私が暴漢に襲われそうになっていたところを、助けてくださった方です」

「おお！それはありがとうございました」

「いえ、たいした事は・・」

「ムドー、私は一度戻って着替えます。その方の世話は任せます。粗相のないように」

そう言ってこっちに向き直り「また後で、お会いしましょ。お兄様♪」そう言って奥へ行ってしまった。

「では、こちらへ・・・」そう言われムドーさんについていく・・

・

「お名前をおききしても？」そう言われて「ケンです」と答える。

・・・でかい家だな・・・

「ふむ。ケン様・・いいお名前ですな」「いえいえ普通ですよ」

そんな会話をしながらどこかの入り口に着いた。

「こちらが、当家の浴場になります。一度さっぱりされるとよいでしょう。」

そういわれ、風呂に押し込められる俺・・・・汚いかな？・・・・

風呂には、なんと先客がいた・・・偉そうなおっさんだ・・・

「おや？きみは？」そう言われて、自己紹介をし、ここに至る経緯をざっと話していく。

おっさんは、タイジュ・アサシンといい、ヴァイオレットちゃんの父親だそうだ。

・・・義父さん・・ですか・・そう思う俺に「何か言ったかね？」と返す。・・いい勘してるな・・

「君はモンスターだったね」そう言われたので「ハイ」と答える。

何か考えているようだった。「そう言えば・・・」と、言いながら・・

「そう言えば、君は。先日の愛国心杯に出場しなかったか？ランク８の・・・」

「ええ、出ましたね」

「そうか、やはりか。あれほどの力の差を見たのは久しぶりだったからな。君は本当にランク８だったのかい？」

「ええ、現在ランク８ですよ。俺がここに召喚されてから、まだ、昇級戦がありませんからね」

しばし驚いた様子のおっさん。

「きみはまだ、３ヶ月たっていないのかい？」そう言われ。「ええ」と答える。

「そうか・・・」考え込むおっさん・・・

男同士の色気要素ゼロに、読者はつまらんだろうな。と思い。出

る事にする。
「では、お先に」そう言ったが聞こえていないようだった・・・
・・しばらくして・・夕食の用意が出来たことを告げられ。食堂に移動する。
・・・馬鹿でかい机にフォークとナイフ・・・という事もなく。程々の大きさのテーブルに、程よい感覚で腰かけ、おっさんと料理を待った。ヴァイオレットちゃんはすでに座っており、とても愛らしいサマードレスに身を包んでいた。・・・姿を誉めると紅くなった・・・いいね！・・・・
おっさんがテーブルに着き。料理が運ばれてくる・・・テーブルマナーはカラーちゃんからしっかりと教わっていたので、問題なかった。
「ところで・・・」食事が一段落し、おっさんが俺に話しかけてきた・・
「ところで君は、『大陸間対抗戦』と言うものを知っているかい？」
「いえ、なんです？」
「昔、大陸同士で争っていたものの名残で、その大陸の代表１０名で争われるモンスター大会のことだよ。」そう、おっさんは言った。

・・・大陸間対抗戦・・・
古い時代人が争っていたころ、平和的に物事を解決するための代理戦争として始まった大会。各ランクの代表とフリー１名の合計１０名で争われる。毎年１回だけあり、今でも色々な権利を賭けて、大陸同士で争われている。

「で、その大会がどうしたんですか？」
「その、キミにフリーの枠で出場してもらえないかと思ってね。」
「お父様！それはすばらしいですわ！」ヴァイオレットちゃんが

熱烈に支持した。
「え？・・・そんな簡単に決めていいものなんですか？」・・心配したように訊く。
「いいのだよ。今年は当家の推薦でフリー枠を埋めねばならなかったので、頭を痛めていたのだ。君ほど強ければ問題ない。」
「はあ・・・そんなもんですか？」
「そうだ。それにな戦闘前にデータの開示を行うのだが、キミのランクと容姿を見て、強そうと思う輩（やから）は皆無だろう。」・・・どうせ弱そうですよ・・
「そうっすね」・・・少し投げやりに言う・・・
「あ、お兄様拗ねてる。可愛い♪」
「おお、すまなかったな。作戦として素晴しい成果が上がると思うとな・・つい・・・」
「いえ、いいんです。その通りですから」・・そう、その通りなのだ。・・・その通り・・
「そうそう、報酬だがね・・・出場してもらうだけで1万G（ゴールド）、一試合勝利ごとに2万Gだそう。試合数は個人と合わせると、全部で8試合ほどだな。」
「ほほーそれはまた・・豪勢な・・・」
「一応準備支度金もだそう。どうかな？引き受けてくれないか？」
「お兄様。お願いします」
・・・ん～。引き受けていいもんかな・・・
「少しお願いがあるんですが・・・」
「何だね？」
「『女神様』がどこにいらっしゃるか教えていただけませんか？ちょっとした用事がありまして」
「ふむ。そうだね・・・」そこで、ヴァイオレットちゃんを見るおっさん。
「お兄様、『神域』と言う場所をご存知ですか？」
「いや？なにそこ」

「中央大陸の奥『女神の森』のさらに奥に、人では入ることの出来ない場所があります。なんでもそこには、女神様がお住まいなのだとか・・・」
「ほーそんな場所があるんだ・・つまり・・」
「ええ、そこに行けば・・あるいは・・」
「なるほど、ありがとう。どうやって行けばいいの？」
「簡単です。『女王の城』に行って、許可を貰い、そこから歩けばすぐですもの」
「へー・・・『女王の城』・・ねぇ・・・」・・おっかないな・・
「ええ、引き受けてくださるなら。『修行に行く』との名目で手配させていただきます」
「ん～・・じゃあ、お願いしようかな」
「本当かね？ありがとう。これで今年の対抗戦は安泰だな。」
話がきまると、その後は、雑談に花を開かせ、しばらくして、帰ることとなった。
「泊まっていかないのかね？」そう言われるが・・・
「いえ、買い物の品もありますので・・」そう言って辞去する。
「そうか・・」と引き下がってもらう・・・
「お兄様、また、いつでもいらしてくださいね。当家はお兄様の訪問を楽しみにしています」
「その通りだ！いつでも来たまえ」
「ありがとうございます」
「通達はすぐに出そう。修行。。頑張ってきなさい」
「はい。ありがとうございます。今日はごちそうさまでした。」
そういって、俺は歩き出す・・・
ヴァイオレットちゃんに見送られながら、俺は帰途についた・・・
・・・女神様、か。会えるのかな・・・そんなことを考えながら・・・

・・・アサシン家・・・
「ふう、お帰りになりましたわね」
「そうだな・・・」
そう話す二人・・・
「ヴァイオレット、これでよかったのか？」
「ええ、これでいいのです。お父様・・・」
「そうか・・・『巫女の役目』・・・か。私はそれが呪いに思えてならないよ・・・」
「いいのです。お父様・・・すべては『女神（イデア）様』の思いのままに・・」
・・・お兄様・・・死なないで・・・

執事？なにそれ？必殺技？（後書き）

あとがきです。
ようやく、修行編にいけます。一回一回が長いよ・・・
書きたいこと多数なのに・・・収まらないんです・・・
初レター戴きました。本当にありがとうございます。うれしいですね。グヘヘ・・

さて次回、いつも二人の視点できてますが、さすがに修行中は一人になります。
あと、前後編になる予定です。投稿は、出来次第かな？

・・・次回予告！！・・・
遂に始まった修行！慣れない旅に思わぬハプニング。ポロリもあるでよ。
『神王種』「女王」とはいかなる者か！
次回「もんすたーにっき」「女神？なにそれ？感動巨編？（前編）」に〇ッグキーック！！

・・・あ・・必殺技・・・

女神？なにそれ？感動巨編？

・・・私は、あいつのマスターなのに・・・

東の大陸を離れ、中央大陸に向かう船の上。コニーはそんなことを思っていた。

ケンを買い物行かせたあの日。帰ってくるなり「修行に行く」といいだし、いきなり準備を始めたアイツ。

「なぜ」と聞くと『大陸間対抗戦』に出ることになり、その為に修行をしたいのだと言う。しかも、そのための手配はすでに終えている。なんて言うのだ。

レイが、どうしてそんなことになったのか聞くと、アサシン家のお父さんに「是非に」と頼まれ、断れなかったのだという。

・・・私の了解も無しに・・・

確かにケンは強い、私も修行に出そうと思ってはいた・・・でも・・・

「なんで、『女神の森』なんだろう・・・」

レイがすごく怒って、あいつに切りかかるのを宥(なだ)め、行き先をきいたら「女神の森ってとこらしい」というのだ。『女神の森』といえば中央大陸の最奥だ。しかも、守護するモンスターも並ではない。最低でもランク1くらいはないと、入ることすら許されないはずだ。

数日、そんな感じでもめて、アサシン家からの手紙と支度金。それと、『女王』から招待状が届いた時は、本当にびっくりした。

あいつは、一人で行くつもりらしかったが。

「マスターのあたしが行かないでどうすんのよ！！」、と言うと・・・

「・・・これも修行だな・・・」と言って、渋々ながら（当然だっての！！）一緒に行くことを認めた。

「一緒に行くことはできませんが。無事の御帰りをお待ちしています」とレイに言われ・・・

「おみやげ！忘れないでよ！！」とカラーに言われ・・・

ケンは二人からすごい勢いで説教と文句を言われて、タジタジだった・・・

・・・二人とも、元気かな・・・出発して４日目、今日中に中央大陸の首都「プレセント」に到着する予定だ。

ケンは出発してからずっと、難しい顔をしながら、ブツブツ何かつぶやいていた。（すごく気味が悪い）

４日間ずっとだ・・・「病気ね」・・・『女王』の手紙にはいったい何が書かれていたのか・・・

私たちの言語ではない。手紙は、私たちの知らない言葉で綴られていた。カラーさえ読めなかったらしく、ケンは、とても驚きながら読んでいた。

「何が書いてあったのかな・・・」

ケンは、内容を話そうとせず。「秘密なんだ」の一点張りだった。

・・・あたしにも話せないこと・・・

その事がすごく寂しく感じたのは、マスターとしての責任感から来るもの・・・そう・・・自分に言い聞かせた…

「港に着くぞーー！！下船準備ーー！！」

その声に　ハッ　として、いそいそと準備しているところに、ケンが戻ってきた。

「おりるぞ。準備できたか？」その物言いにカチンときて「出来てるわよ！！」と言い返す。

・・・世界にきて３か月しかたってないのに・・・マスターは私なのに！！・・・

そう思わずにはいられなかった・・・

港町に到着してすぐに、ギルドへ向かう。周辺地図を手にれるのと、『女王の城』への行き方を教えてもらう為だ。

「人が多い街だな」そう言いながら、あたりを見回すケン。
「中央大陸にはここと、あと二つしか町がない上に、女神さまが住んでるところだから、人がいっぱい来るのよ」
そう教えると「へえぇ」と関心しながら、あたしの後についてくる。
「どこにいくんだ？」と言うので「ギルドで情報収集」と応え、先を急ぐ。
ギルドに着くと、受付にいた女の人に地図がほしい事と、『女王の城』への行き方を聞く。
「えーと、地図ですね。わかりました。少しお待ちください。城へはその地図を使ってお教えします」
そう言われしばし待つ・・・
「お待たせいたしました。こちらが地図になります」
地図を手渡され、城への道を聞く。
「城へは観光ですか？」そう聞かれたので、「修行です」と答える。
ギルドの職員さんは、すごく驚いて「修行・・ですか？・・・城に？」と聞いてきた。
「いえ、森のほうです」そう返すと、さらに驚いたようで・・・
「森って『女神さまの森』ですか？」
と聞くので、頑張って笑顔を作り「そうです」と答える。・・・
すると・・
「もしや、ケン様とコニー様でらっしゃいますか？」と聞かれたので・・「はい」と返す。
「ああ、お待ちしておりました。」と言われた・・・
あたしが怪訝そうにしていると、職員さんは「ささ、こちらへ」と、言いながら奥の部屋に案内されてしまった。
「どういうことですか？」そう聞くと職員は・・・
『女王』様から連れてきてほしい、と言われている。ついては、城まで自分たちが連れていくから、少し待っててほしい。というよ

うなことを言われた。・・・何この待遇・・・

「いいんじゃね。連れて行ってもらおうよ」・・・と、ケン。

是非に！と職員さんが頭を下げてくるので、仕方なくお願いすることにした。

しばらくすると、用意ができた、と言われたので表に出ると・・・

・・・豪華な竜車が用意されていた・・・

「なんだこれ・・・竜？」

「・・・そうよ、地竜・・・高いわよこれ・・」

・・・地竜・・・

竜種のなかでも比較的おとなしいモンスター。大会などで戦闘をこなし、引退後は竜車（馬車の竜版）等に利用されることが多い。土系の技を主に使い、強いものになると大地震（アースクエイク）なども使うようになる。

馬車の中でも、これでもか。と接待され。『女王の城下町』についた時には、泊まる宿まで用意されていた。

・・・なんなのだろうか・・・この待遇・・絶対おかしい・・・

自慢じゃないが、私はランク８だ。（ほんとに自慢じゃない）

当然、功績もないし、こんな事はありえない。・・・しかし・・

「ふう、いい旅だな！」・・・上機嫌のアホが一人・・・

「明日の朝、お迎えにまいります」　職員さんはそう言って、去って行った・・・

・・・事情を聞くの忘れた・・・・

・・・行かなければならない・・・必ず・・・

あの日。買い物から帰って、コニー達に、修行にいく旨を伝えると・・・当然のようにみんなが怒った。

まあ、予想できていたことなので、必至で頭を下げ「仕方なかった」を強調した。
その甲斐あってか、なんとか納得してもらい、旅の準備をしているところに・・・あの手紙が来た。
日本語で書かれたそれは、俺にしか読むことができない。つまり、完全に俺宛だ。
内容は、女王から・・・『女神の森』へ進入を許可する事。女王の城まで来てほしい事。そして・・・
・・・元の世界への帰還方法について話がある・・・ということだった。
俺が異世界から来たことは、コニー以外、誰も知らないはずだ。それなのに・・・なぜ・・・
俺は、『女王』不信を覚え、できればコニーには来てほしくなかった。だが、強情な彼女を深淵の姫とするには、いささか俺の胆力が足りなかったようだ。
仕方なく連れて行くことにしたが、俺は自分が、この世界の常識にものすごく疎いことを、彼女に世話してもらいながら、自覚したのだった。
彼女のおかげで・・・なんとか、中央大陸の港町につき。ギルドで話をしていると、職員のお姉さん（Dくらいあるな）が、連れて行ってくれると言う。
これ幸いと、お願いして。竜車？にのって移動することに。なかなかの速度で、俺は、お姉さんの『揺れ』を楽しみながら、町まで移動した。
さすが中央大陸の首都、すごい人の数が町にあふれていた。
人ごみが好きじゃない俺は、さっさと宿に入り明日の準備をした後・・寝た。
夢にお姉さんが出てきたので・・俺は・・・股に（以下削除されました）

・・次の日・・・
お姉さんと会った時、一方的に気まずい思いをし、城まで案内してもらう。
・・・すごいでかい城についた・・・どのくらいでかいというと、西部ドー○くらいのでかさだ。（イマイチわからんか）
門前でお姉さんと別れ、城に入る。門で招待状を見せ、案内してもらう・・・見た限りでは、城にいるのは、全てモンスターのようだった。
すごく広い部屋に通されて、膝をついて待つように言われる。コニーは、なぜか女王に会うことが許されないようで、別室で待機だ。
しばらく待つと・・・・

ドルルルルル・・・・

ドラムロールが流れ出し、カーテンの奥に人影が映る。
その人影が手を挙げると、全ての音が停止し、椅子に座るしぐさを見せた。
「楽になさい」そう言われ、膝立ちから、立って力を抜く。
「今日は遠いところをわざわざ、ごくろうさまでした」
「いえ、・・・」そう言ってカーテンの奥を盗み見る。
「気になりますか？」そう言いながらカーテンをつまんで見せた。
「・・・はい」正直に答える。
少し笑い声が聞こえ「いいでしょう」そう言われた。そして・・・
「人払いを・・・ケンさん以外は全て出てお行きなさい」
そう言った後、全てのモンスターが部屋から出て行った。
「やっと楽になるわ～・・・」なんだかゆるい声が聞こえた。
「あ、ケンちゃんごめんね。すぐそっちいくから」・・・すげえフレンドリーだ・・・
そう言いながら、カーテンの奥から出てきたのは・・・
・・・なんと俺の（実の）姉ちゃんだった・・・

・・・は？ありえん・・・・

女神？なにそれ？感動巨編？（後書き）

あとがきです。
急展開！ねえさん登場！いやー・・・収拾できんのかな・・
色々書いていたら、後編が２つになってしまいそうです。
できるなら、一本にしたいですが・・・
さて次回！ついに会った女王。その正体はお姉ちゃんだった！
・・・てことは、女神さまは・・母さん？・・・
そんなことは絶対ないので安心してお読みください

・・・次回！もんすたーにっき「女神？なにそれ？感動巨編（後編１）」に・・・ちぇっけらー！

自重？なにそれ？黒歴史？（前書き）

るーるる♪るるるるるーるるー♪（〇子の部屋の音楽）

「こんにちは！！カラーだよ！」

「こんにちは、皆さん。レイです」

「今回は、巻き毛（ローズ）さんがいないから、あたし達がお送りします！」

「はい、しかも私たちが疑問に思うことを直接、作者さんにぶつけますね」

「んじゃ、いくよ！『質問、作者はロリコンなんですか？』」

作「え？・・・打ち合わせと違うんだけど・・・」

「どうなのよ！！」

「・・・２Ｄロリ（びょうき）・・だけど・・」

るーるる♪るるるるるーるるー♪

「あら、時間のようですね。それでは、また次回お会いしましょう」

「うそ！まって！うそだから！！・・・」

自重？なにそれ？黒歴史？

・・・なんなのよ。この待遇は・・・

ケンが謁見の間に入っていく。あたしも後に続こうとすると、衛兵に遮られた。

「ちょ、通してよ」そう言ってもただ首を振るだけで動こうとしない。案内をしてくれた、トラのモンスターに、後についてくるよう言われ、渋々ついて行く。

・・・なによこれ、まるでアイツの方が偉いみたいじゃない！・・・

・マスターはあたしよ！・・・

謁見の間から少し離れた部屋に通され、待つ様に言われる。

あたしは、ケンを待つ間ずっとイライラしていた。

・・・しばらくして・・・コンコン・・ドアをノックする音がする。

「！」瞬間、あたしはドアに駆け寄って、力いっぱいドアを開けた。

誰が部屋の前にいようと、今度こそケンの所に行こうと思っていた・・・しかし・・

・・・そこには、白いドレス、真っ白で長い髪の毛、均整の取れた顔に大きな瞳、すごいプロポーションのきれいな女性が、笑顔を浮かべて立っていた・・・

「え？」一瞬、たじろいでしまった。人間とは思えない、フシギな空気をまとい。こちらに笑顔を向ける女性。

「どなたですか？」すると女性は・・・

「この城の主をしている者で、女王・・・と、呼ばれています」

と、優雅にお辞儀をしたのだった・・

「ケンは・・・どこに?・・・用事は終わったのですか?なぜ、あなたがココに?」そう言うと・・・
「落ち着きなさい。品のない女性は、どこの世界でも軽んじられますよ」
・・ムッ・・・
「そうですか、品性がなくて悪かったですね。で?ケンは?今どこにいるんですか?」
「あの子は、森に向かいました」
「え?森に?一人で?」
「そうです。ココから先は私たちは、ついて行くことができません。たとえ、ついて行ったとしても、結界に阻まれてしまうでしょう」
「だとしても!・・・だとしても、マスターの私に一言くらい有ってもいいでしょう」
「・・・ふぅ・・なるほど、これは想像以上でしたね。」
「なにがですか?さっきからなんな・・・」
「フェン先生の娘さんと聞いていたので、もっと聡明な子だと思っていたのに・・」
その言葉に、私はとても驚く。
「!お父さんを知っているんですか?!」
「ええ、もちろん。二人にはよく、遺跡調査をお願いしていました」
「二人?」
「ええ、あなたの父『フェン』先生と、その師『リワイ』先生です」
「リワイ先生・・・」懐かしい、昔よくお話してもらったっけ・・・
「フェン先生は、お気の毒でしたね。事故とは・・運が無い・・・」
「え?どういうことですか?」父が帰ってこない原因・・・初め

て聞いた・・
「知らされていないのですか？・・・そうですか・・・」
そう言って、少し考え込み・・・いきなり中空に向かって話しかけた。
「イーちゃん、聞いてた？話してもいいよね？」すると、どこからか声がする・・・
「ええ、いいわ。ただし・・・」
「わかってるわ。ありがとう」
女王は、そう返事をするとこちらに向き直った。
「今のは？・・・・」
「ええ、女神様よ」
・・・さすが神王・・・
「さて、どこから話そうかしら・・と言っても、あんまり知らないんだけどね。」
そう言って、話し始めてくれた・・・

・・・あなたのお父様は、有名な調教師であり、モンスター学の権威だと言うことは知ってるわよね。
私も、ちょくちょく依頼して助けてもらっていたの。あの時は・・・そう、あの時はね、ちょっとした依頼のハズだったの。すでに枯れた遺跡の発掘調査でね。ランクも3以上なら誰でも受けることができた。
でも・・・先生はそこで、一対の石版を見つけたの。
ひとつは、白い石版で「ここよりいでしは、かのちよりちかきそんざいのよりしろ」と書かれ
もうひとつは、黒い石版で「かのちよりいでしは、ここにちかきそんざいのよりしろ」と、書かれていた。
二つとも古代語で書かれていて、すごい魔力がこめられていたのが分かったわ。
先生は、その両方を持った瞬間、空間にできた裂け目に飲み込ま

れたの・・・
後で調べて分かったのだけれど、それは、3回目の大災厄の時に作られたものらしいわ。
・・・神々の戦争の時ね。

「それはなんだったんですか？」
「今も分からないの。しかも、ひとつは空間に飲み込まれた、先生がもってっちゃったし・・・女神様がね、もう一個も封印しちゃったから、もうあんなことは起こらないと思うけど・・・」
「そう・・・だったんですか」
「一応、女神様は、フェン先生を探したのだけど・・・」
・・・知らなかった・・お父さんの身にそんなことがあったなんて・・・けど・・
「大丈夫です。父は必ず生きています」
「・・・なぜ、そう思うの？」静かな表情で・・・問われる。
「レイが・・・父のモンスターが『生きている』。と、言っていたからです」
・・・だから・・・
「必ず。助けます！！」
「そう・・・いい顔ね・・」そう言って女王は笑顔をみせた。

フェン先生のことは、引き続き調査をする。と、女王は約束し・・・
「なぜ・・・」と、言う。
「なぜ、あなたはフェン先生のモンスター（パートナー）の様に、彼の事を信じてあげられないのですか？」
「え・・・」言い淀んでしまう。
「あなたは先ほどから、まるで自分の僕（しもべ）の様に、あの子の事を言っているように見受けられます」
・・・言い返せない。
「あの子を思ってくれるのはうれしいのですが、あの子は、あな

たの為に・・・あなただけの為に存在しているわけでは・・・無いのですよ。」
「『モンスターと言えど、その身はしかと顧みよ。調教師心得、第一条』そうではなかったですか？コニー・リコリスさん」
・・・・・・うう・・
「では・・・・では！どうしろと！どうしろと言うんですか？！いきなりの招待状、わけが分からないまま連れて来られて、挙句、黙ってみてろ・・・なんて、あたしの事も気にかけてくれたっていいじゃありませんか！！」
つい、そう言ってしまった・・・しかし・・
「落ち着きなさい。飲み物でもお持ちしましょう。」
「飲み物なんてどうでもいいです！！あいつは、なんでここに来る必要があったんですか？！」
「・・・そうですね。それをお話しするつもりで、ここに来たのですが・・・あたしが悪かったですね。」そう言って女王は、外のモンスターに飲み物を持って来る様に言った。
「まずは謝罪を、ごめんなさい。あの子と一緒にいられるあなたが、羨ましかったのね。あたしは・・・」
「え？・・・」
・・・内緒よ・・・そう言って、女王は・・・
「あの子は、あたしの弟なの・・」
「ええ？」そんなはずはない・・・あいつは、石版から召喚されたモンスターだ。だから、兄弟なんて・・・いるはずない・・・
「信じられないって顔してるわね。仕方ないか・・・けど事実なの。でなければ、こんな手の込んだこと、するわけないわ」そう言って笑う女王。
・・・うーん。そうなのか・・・けど・・・ん？羨ましい？・・・
女王はニコリとして、「そう、あたし、ブラコンなのよ」・・・
そう言った。

・・・ブラコン・・・
俗に　ｂｒｏｔｈｅｒ　ｃｏｍｐｌｅｘ　言われるもので、日本では『兄弟の同士の愛』を、指しているとされる。しかし、正式な兄弟愛は　ｂｒｏｔｈｅｒｈｏｏｄ　もしくは　ｆｒａｔｅｒｎｉｔｙ　であり。日本人の造語である。との考えが世界一般の常識だろう。

・・・ハッ！・・・一瞬・・世界を飛んだわ・・・
「えーと・・女王は一体おいくつなんですか？」・・・聞かないわけにはいかなかった・・・
「えっとねー・・こっちの世界では通算・・・（削除されました）歳・・くらいかしらねぇ・・いやん！女性に歳を聞かないで！」
・・・うぐ・・・
「えっと、それで・・・そうそう。」そう言ってから女王は・・・
「あなた・・・あの子に相応しくないわ・・・」
・・・そう言った・・・

「え？・・・」一瞬・・・言われたことが分からなかった。
「今のあなたには、あの子は任せられない・・そう言ったのよ」笑顔で・・・女王は続ける・・
「ランクとかじゃないわ、そんなもの、人が定めたものでしょ。そんなものに、モンスター（わたしたち）は縛られない・・・」
・・・思考が・・追いつかない・・・
「ただ・・・ひとつ・・私が決める唯一の理（ことわり）があるとすれば、それは、『想い』ね。どれだけ、あの子を想ってくれているのか・・・それだけよ。たとえ、それがどんな形であれ・・ね。」
「あの・・・」
「あなたでは不十分だわ・・もし、あのこが女神様の元から戻った時・・・まだ、そんな顔をしているようなら・・・あの子の『首輪』は・・・外れる事になるわね」

・・・首輪を・・・どうやって・・繋がりが・・・無くなる・・・
「聞こえているかしら？・・・まあいいわ・・・あの子が帰って来るまでによく考えなさい」
そう言いながら、ドアの前まで歩いていく・・・
「どうすればいいのか・・・どうするのが一番なのか・・・」・・・ね。

バタンッ

ドアが閉まり、部屋に静寂が戻る・・・
私は、衛兵が紅茶を運んでくるまで・・・動くことができなかった・・・

・・・ドアの向こう・・・

「ふう・・・すこし言い過ぎたかな・・・」
そう言って女王は、ドアの向こうを仰ぎ見る。・・・でも・・・
「よかった、ショックくらいは受けてくれたみたいね・・・」・・・ショックも受けず、言い返されたら、その場で鎖を引きちぎっていた所だ。
・・・思った以上に、優秀な調教師として育っているらしい。
当然か・・でなければ『召喚の石版』を渡したりはしなかった。
『あの娘の為のナイトを用意してほしい』・・・その言葉を実行に移して、フェン先生は旅立ってしまった。
・・・ウチの弟にはもったいないくらいいい子じゃない・・・あーあ・・妬けるなあ・・・
これからどうなるのか楽しみだ・・・そう思いながら、部屋を後にするのだった・・

自重？なにそれ？黒歴史？（後書き）

あとがきです。
今回はコニーちゃんだけです。まあ、明日にはケンの方も上げられと思います。
毎日毎日暑くて、クーラーの無い部屋より外のほうが涼しいです。
おかしい・・
さて次回は、姉ちゃんに絡まれぐったりしてるのに森へ蹴り出されるケン・・目的ほっといて、童心に帰りクワガタ探索！あ！カブトムシだ！
・・・次回！もんすたーにっき「帰還？なにそれ？中ボスの事？」で・・ゴットウィ〇グ！！
・・・ふう・・あ・・題名・・

ふぇありーにっき（いち）（前書き）

シリアス飽きました

ふぇありーにっき（いち）

・・・これはある意味、国家的プロジェクトと言えよう・・・

俺の名はケン、ひょんな事から異世界にきてしまった、３０男だ。
先日、モンスター図鑑なるものを発見し、読んでいたら、妖精とは、その存在が非常に貴重（レア）であり、その生態は謎に包まれていると言う・・・

・・・ならば・・と、一緒に住んでいる妖精のことを調べるだけで、世界に貢献できのでは？と考え、彼女のことを監察することにした・・・（俺はロリコンデハナイ）

・・・ＡＭ：０８００・・・

朝起きて、朝食を済ませ。カラーの部屋を覗く・・・寝てる・・・
妖精は、その小さな体を小さなベッドに収めて、寝息を立てていた・・

しばらくすれば起きるだろう・・・そう思い、のんびり本を読みながら待つ・・・待つ・・・

・・・起きないな・・・そろそろ１２時に差し掛かる。いい加減、起きてもよさそうだが・・・

・・・コツコツコツ・・・誰かの足音・・・

「む～～ん」気持ちよさげに眠る妖精の前に、ひとつの影が立ちはだかった。

・・・バサッ・・・トスン・・・いたぃ！！・・・

いい音がして、ベッドから落ちる妖精。痛そうだ・・・

「カラーもうお昼ですよ。いい加減おきなさい」

うちの母さんみたいなことをする、この女性はレイさんと言って、この家の家事全般を取り仕切る美しい人だ。

「むー、痛いよレイ姉・・・」そう言ってひらひら飛び、レイさ

んの前でホバリングする。
「カラー、そろそろお昼ですよ。いい加減になさい」
「え！もうお昼なの！朝ごはん食べ損ねた～・・・けど！お昼は食べられるんだよね！起こしてくれてありがとう！」・・・食事基準で生きてるのか・・
「いえいえ、準備ができたらリビングへ来なさいね」
「はーい！」
そう言って、ひらひらと井戸のある外へ飛んでいく・・・
「ケンさんも、ご飯ですよ」
「はーい」そう言ってレイさんにお礼をいい、カラーちゃんの後を追う・・
外に出ると、豪快に頭から水をかぶり、ブルブルブル！！っとする妖精を発見。
・・・犬、猫みたいだな・・・　そう思いながら、近づいていく。
「およ？ケン、どしたの？」そう言うカラーちゃんは、羽をキラキラさせながら俺を見上げる。
「食事の前には手を洗わないとな」・・・少し言い訳臭かっただろうか・・そんなことを気にせず、カラーちゃんは自分が汲んだ水を、桶に移してくれた。
「なら、これで洗うといいよ！」相変わらず無駄に元気だ・・・カラ元気だからカラーなのだろうか？・・聞いてみる・・
「カラーちゃん。なんで名前がカラーなの？」
「ん？えへへー・・・気になる？」俺は「うん、気になる」と答える。すると・・・
「おしえなーい！！」・・・ま、そうくるよね・・・まあ、当然と思い「そっか」と、言いながら手を洗わせてもらう。
「えー、なにその当然、って顔は・・・、いいもん。教えないんだから！」
そう言いながら怒る姿もなかなか愛らしい。そう思いながら・・・
「ん？ごめんね。言いたくないことを無理に聞くような男は、紳（ジェン）トルマン

士とは言えないと、俺は思ってるから。」と、言ってみる。
「んん、なるほど！確かにそうね。あんた紳士だわ！」・・・本当に素直ないい子だ。
納得してもらったところで、食事に行こうと誘い、リビングに一緒に行く。
「いっただっきま～す！！」・・・食べる・・・食べる・・・タベル・・・かゆ・・うま・・
質量保存の法則を、いとも簡単に無視する妖精・・・・それを見ながら、微笑みを絶やさないレイさん。
明らかに、自分の体の全ての体積よりも多い量の食べ物が消えていく。速度も俺と大差なく・・だ。
妖精は、幻想種だから・・・食べ物も幻想に消えるんだろう・・・
そう、自分を納得させて、引き続き観察に移る。・・・あ、俺の盗られた・・・
「なにボーっとしてるのよ。」そうコニーに言われて「いや・・よく食うな・・と」と、答える俺
「いつものことじゃない」そう言いながら資料？に目を通すコニー。
「お嬢様、食事中はおやめください」・・怒られてやんの・・・
「はーい」声だけ返し、気にせず読むコニー。・・・レイさんががっかりしてる・・・
「ごちそうさま！」そう言って出て行こうとするカラーちゃん。
いつの間に食べ終わったのか・・・あわてて俺も後を追う。
レイさんの「三時には、一度お戻りくださいね」の声が聞こえたので、返事をし追跡する

・・・ＰＭ：１３００・・・
ここは図書室・・・個人の家に、学校並みの図書室がある・・・
蔵書は、モンスター関連ばかりだが、中には少女趣味なもの（ＢＬ含む）もある。そんな恋愛ものをうずたかく積み上げて、読んで

いる。・・・あんな短時間にどうやって積んだのだろう・・・
俺も不審に思われないように『モンスター大全』を持って近くに座る。
「カラーちゃんも読書？」そう言いながら近づく・・・が・・・反応無し・・・・
真剣に読んでいるのだろう・・・俺が近くに座っても、まったく気づく気配がない・・・
仕方がないので、とりあえず席に着き。頭から読み直す・・・
時折・・・はふぅ・・えー・・いけ！・・等の声が聞こえる。ボイスレコーダー欲しいな・・・
しばらくして、三時が近づいたので「カラーちゃんおやつの時間だよ」そう声をかける・・・
「おやつ！！」そう言って　ガバッ！！　と、こっちを見るカラーちゃん。
「うん。おやつ、お昼にレイさんに言われたからね」そう返すと・・・
・・・ピューーーーー・・・
と、風のようにリビングの方に消えていった・・・
リビングには、甘い香りが満ちていた。リビングには、カラーちゃんが「おっやつ～♪おっやつ～♪」と、歌っていた。
「あれ？コニーは？」誰ともなくそう問うと・・・
「お嬢様は、フィールドワークです」・・・と、クッキーを持ったレイさんが答えてくれた。
「わーい！！くっきー！！」そう言いながら、皿に飛びつこうとするカラーちゃん・・・欠食児童？
「カラー、淑女の嗜(たしな)みを忘れてますよ」・・そう、笑いながら言うレイさん。
「あたしは・・・カリカリ・・・いつだって・・・カリカリ・・しゅくじょ・・カリカリ・・だもん！」・・・良くて、リスどまりだな・・・真面目にそう思う・・

あっという間に自分の分を食べ終え、俺の分に手を出し、全部食べきると、ご機嫌な様子で図書室に戻った。
「今日の晩御飯は、少し時間がかかります。できましたら呼びますので、7時くらいには家にいてくださいね」
そう言われて、俺も図書室に戻る・・・
・・・本の山が丸々違うものになっていた・・・
ほんの数分の間に、カラーちゃんが読んでいる物が全然違うものになっている・・・
「あら、ケンも読書？」そう言いながら、俺の方を見るカラーちゃん。
「やはり、日頃の勉強が高い知識と想像力の源ね」そう言いながら、何かの調査資料のようなものを読むカラーちゃん。
「そ、そうだね・・」そう言いながら、俺は図鑑の続きを読み始める。
少しすると、カラーちゃんがそわそわし始め、少女趣味のコーナーをチラチラ見始めた・・・
・・・これは・・・そう思い、俺は立ち上がって図鑑を元の位置に戻すと「行くね」と言って図書室を出て行く・・・
・・・頭の中で３００を数え、図書室に入る・・・すると・・・
案の定、資料の山が消え・・・少女趣味（ＢＬも含む）の山が出来上がっていた。
・・・はぁはぁ・・・そんな息遣いが聞こえそうなほど、気合を入れて少女趣味の本（しつこいようだがＢＬも含む）を読む妖精・・・
・・・これは・・・公表できないな・・・そう思って図書室を出て行く俺。
「あーやっぱり『騎士×ドラゴン』は最高ね～♪」そんな言葉が聞こえ、妖精の生態が謎のままな理由を知ったのだった・・・

ふぇありーにっき（いち）（後書き）

あとがきです
シリアスより番外が好きな作者なので、ドンドンこういうのを書いていこうと思います。次は・・・誰にしようかな・・・

帰還？なにそれ？中ボスのこと？（前書き）

誰だ！誰だ！誰だ～♪るるる♪るるるる♪るるるる～♪

「やっほー！みんな！元気？カラーだよ！」

「こんにちは。レイです。」

「今回から、私たちが質問に答える事になったんだ～」

「前回、余りにも苦情が多かった為、このような措置となりました」

「んじゃ、いっくよー！」

「Ｐ．Ｎ　ｅｌさんからのお便りです！」

『こんにちは！カラーさん、レイさん』

「こんちは！」

「こんにちは」

『今度、番外編でお二人の入浴シーンを書こうと思うのですが、お二人はレズ属性はお持ちですか？』

ビリビリビリ！（紙を破く音）

ボウッ！（火がつく音）

「やーレイ姉、今回はお便りこなかったね～」

「そうですね、次回に期待しましょう」

「そんなわけで、今日はココまで！まったね～」

「ごきげんよう」

・・・レイ姉・・・作者殺しに行こうか・・・そうですね・・・

帰還？なにそれ？中ボスのこと？

・・・この森、簡単には入れないんじゃなかったのか・・・

カーテンの奥から現れたのは・・・なんと・・俺の姉さん・・・

『吉田　奈美（なみ）』・・・そう、ナミさんだ・・・

「姉さん！」そう叫ぶ俺に、姉さんは「やっほー」と笑顔で答えた。

「何で姉さんがここに？」

「可愛い弟に会いたかったからに決まってるじゃない！」

・・・ハア・・・そうなのだ・・・この姉は・・・ブラコンだったのだ・・・

「や～ん。ケンちゃん！久しぶり～！元気してた～？」

「ああ・・姉さんこそ・・元気そうだね。」

「うんうん！弟に会えなくてお姉ちゃん寂しかったわ～♪」

・・・脱力する俺・・・

「で？・・・」と、先を促す俺を見て、姉さんは・・・

「そう！実はお姉ちゃんが『女王』だったのです！」・・・むん！と胸を張る姉・・

「そう・・・なんだ・・」・・・ますます脱力する俺・・・それを見た姉は・・・

「そう・・って、驚かない？お姉ちゃんが有名な女王なんだよ！びっくりしたでしょ？」

・・・驚きを通り越して脱力してるよ・・・

「そ・・そうなんだ。びっくりしたよ」頑張って笑顔で返す俺・・・

「でしょ～！えへへ～。お姉ちゃん偉いんだよ～」褒めて褒めてオーラを出している・・・

「へ～・・・すごいね・・・」そう返した俺に・・・

「えい！」っと引っ付いてきた・・「ちょ、なに？」そう言うが・・・

「むふふ～」そう言ってスリスリしてきた。

「弟成分補充中～♪」・・・こうなると離れないので・・しばし待つ・・

弟の俺から見ても、姉さんの容姿はかなり、いいと思う・・・・ので困ってしまう・・

・・・だいぶ待った（と思う）後、ようやく離れた・・・

「ふう、一時充電完了！」そういう姉に、今度こそ疑問をぶつけてみる・・

「で？何で姉さんがここにいるの？」

「ん？それがね～・・」と前置きし・・

「前にお姉ちゃんバイト探してたでしょ？その時にここのアルバイト募集の張り紙を見つけて応募したのそれでね面接の時にここのオーナーのイーちゃんを見た瞬間きゃーーーってなっちゃってそれで絶対ここでバイトするって思ったのそしたらイーちゃんもおっけーしてくれてバイトする事になったの私はね世界の管理運営をする事になってイーちゃんの補佐をしてるのあっイーちゃんって言うのは女神様の事ねとお～～っても可愛いんだよしかもねあたしの他に４人世界を管理している人がいるんだけどそれがまた面白い人ばっかりでね時給もいいからずっとやってるのでもね最近この島（中央大陸）に来る人が多くなっちゃってねあたしも参ってるのよけどね弟にこうやって会えるのも役得よねそう言えばこないだお母さんが心配してたよ急にいなくなったってだから言ったのあの子は大丈夫よってだから安心してね・・・それでね・・・」

・・・長すぎるので要約します・・

「で・・・つまり、パートタイムで働いてる・・・と」

「そうね♪」

・・・はぁ・・・疲れる・・・

「で？姉さんがここに要るってことは、俺いつでも帰れるってこ

と？」
・・・ああ、この世界にきちまった時は、もうどうしようかかなり考えたのに・・・
「ああ、それね・・・無理」
・・・これでやっと帰れ・・・は？・・・・
「え？どうゆう・・・こと？」
「んとね、ケンちゃんは正規の手順でココに来たわけじゃないの。だからね、イーちゃんも『すぐに送り返すわけには行かない』って言ってるの。」
「え・・でも・・」
「最後まで聞いて。けどねケンちゃんは、あたしの弟じゃない？。だからね、条件付で返してもいいって言ってくれたの。他の４人もそれで良いって言ってくれてね。それなら簡単だし、いいかな？って」
・・・つまり・・・
「帰れるには帰れるけど、条件を満たさないと帰れない・・・てこと？」
「そう言う事！さっすがケンちゃん！あったま良い！」・・・ナデナデ・・・
「えっと、俺仕事とかあるし・・急がないといけないんだけど・・」
「大丈夫！仕事は辞表出してきたから！！」
・・・大丈夫じゃね～～～～！！！・・・
「それにね、ケンちゃんのアパートも引き払って、荷物はうちにあるし！」
・・・なにしてくれてんだ～～クズ姉～～！
「あ・・あのさ姉さん・・心配してくれるのはありがたいけど・・・今の仕事結構好きだし・・・ああ・・・もう辞めてるのか・・・」
・・・自分で何言ってるのか分からん・・・
「大丈夫！ケンちゃんもここで働けばいいよ！！」

・・・全力を持って遠慮しよう・・・その前に・・
「その前に、帰れるようにならなくちゃね・・・ずっとこの世界にいるわけにはいかないでしょ？」
「そうね～。私としてはケンちゃんと一緒に入られるから嬉しいけど、お母さん心配するしね～」
・・・俺の存在（じんせい）より母さんの心の方が重いのか・・・
「そ、そうだよね。母さんも心配するしさ・・」
「そうね、じゃあサクッとイーちゃんの所に行ってお話を聞いてきてね♪」
「え？何をすれば良いのか、教えてくれないの？」
「ええ、一応イーちゃんが伝えるって事になってるしね。けど、簡単なことよ。」
「そっか・・分かったよ」・・・ふう、ようやく話が進んだな・・・
「あ、そうそう・・」・・・まだあんの・・・
「これ・・・」そう言って、姉さんが取り出したのは小さな『短剣』だった。
・・・刃渡り15センチ以下の、今の銃刀法にも違反しなさそうな小さな刃・・
「これ、お守り代わりにあげるね」そう言って、手渡してくれる。
「ありがと、姉さん」・・・役に立たなそうだな・・
「むっふふ～。今役に立たないって思ったでしょ～。」
「そんなことないよ！」あぶねぇ・・この姉は頭おかしいん（超能力級）だった。
「そう、まぁいいわ。その短剣はね。『女王の騎士剣』って言って魔力を流すと、持ち主の意思に反応して、自由な大きさにできるすごい物なんだから！」
「へー、すごいんだね～」
「ま、ケンちゃん魔力無いからお守りだけどね♪」・・・この姉・・

「それじぁ、名残惜しいけど、そろそろ出発してね」
・・・ふぅ、やっと開放か・・・
「そうそう・・イーちゃんが可愛いからって押し倒しちゃだめよ！あの子、オトコノコに免疫ないんだから！」
「・・・そ、そう・・紳士に徹するよ・・」
「そうね。さすが我が弟！かっこい～！」・・・もういいかな・・・・・その後も、なんだかんだと世話をやかれたので省略・・・・・・ようやく、森の方の出口に案内される・・・
「それじゃあケンちゃん、頑張って行って来てね！森のお水は美味しいからって飲み過ぎはいけないよ！虫除けは持ったわね。絆創膏はリュックに入れたし・・・ああそうだ、何かあってもお姉ちゃんは森には入らないから、一人で何とかしてね。男の子だもん平気よね。ああ、でもでも、何かあったら心の中で強くお姉ちゃんを呼んでね、すぐに飛んでいくから。あとあと・・・（長すぎるので省略しました）」
「はあ・・・姉さん・・行ってくるよ・・・」
「いってらっしゃ～い！！」手をブンブン振る姉・・・
ようやく森に入ることができた・・・あ・・コニーに一言、言うの忘れた・・ま、しょうがないな・・（今更戻って姉にまた会いたくないし）
・・・しょうがない・・行くか・・・

・・・チチチ・・鳥の鳴き声が聞こえる・・静かでいい森だ・・姉さんの話だと、城を後ろに見て歩き、3日もすれば女神様の入る所に着くそうだ。
「のんびり森林浴と行こうかな・・・」
そんなことを言いながら、渡されたコンパスと城の位置を確認しつつ歩いていく。
・・・しばらく歩くと日が暮れ、夕暮れも終わる時間となった・・・

・・よし、今日はこのくらいにして、休むとしよう。
そう決めると、周囲を確かめた後、簡単な罠を張る事にする。『鳴り鼓』という、侵入者があると、音が鳴るだけの簡単な罠を張る。
・・・こういう時、軍に入隊しといて良かったな、と思う。
罠も張り終わり、虫除けスプレーと蚊取り線香を置き、木の上で寝る・・
旅の疲れもあってか、すぐに眠りに落ちた・・・

・・・カランカラン・・・ガバッ！・・・
鳴り鼓が鳴った！何だ？・・・
朝方、音がしたので飛び起き、周囲を確認し、音が鳴った方に慎重に行く・・・すると・・・
「あれ？ケンちゃんおはよ。早いわね♪」
・・・姉が朝ごはんを用意していた・・・
「ね、姉さん・・なんでここに？」森には入らないんじゃなかったのか・・・
「だぁって～。久しぶりに弟に会ったんだもの！これくらいいいじゃない！」
プリプリと怒って見せる姉・・・姉属性持ちの友人は、本気で羨ましがっていた・・・これで俺（３０歳）より上だ・・・
「そ・・・そうだね・・久しぶりだもんね・・・」そう、気力を振り絞って答える俺。
「そうよね！さ、冷めない内に食べて！」
そういう姉は、どこから取り出したのか、テーブルセットにサバの塩焼きをメインにした純和風の食事を用意していた・・・
俺は、何か言う気も失せ・・・「いただきます」とゆっくり食事をした。
食事が終わり、支度が済むと姉に「いってらっしゃい！頑張ってね」と見送られ。（支度ををしてる間にテーブルとかは消えうせていた）俺は再び森を歩く。

・・・お昼も待ってるんじゃないだろうな・・・そんな心配をしながら歩き出す・・・

・・・結果として、お昼はいなかった。貰った携行食で腹を満たし、さらに歩く・・・

しばらくすると、俺の手を広げるよりも大きな木々が目の前に現れた・・・

「でっかいな～・・・」屋久杉を知っているだろうか？あれよりも大きい木々が群生している・・と言えば、そのファンタジーさが分かって貰えるだろう。

「城が見えなくなるな・・・」

特技『方向音痴』を発動してしまわないように注意して歩く。

しばらく幻想的な光景が続き・・・しかし、唐突に終わる。

線で引かれた様に、一定の所から七色に輝く草原が広がっていた・・・

「は～～～・・・すげぇ・・・」

これもある意味、いや、王道とも言うべき光景と言えよう・・・

○ウシカとか居そうだ。

そんな草原を突っ切るべく歩き始める・・そこへ・・

「おい！そこのお前！何している！！」・・・鋭い声が遮った・・

「え？・・・」そういう声がする方を見ると・・・

・・・一角獣（ユニコーン）に跨った、金髪エルフ（耳が尖ってる）がこっちを見ていた・・・

・・なに？この超超美人さんは！・・・そう思って固まってる俺に・・

「何をしている、と聞いている！！」結構な剣幕で迫ってきた。

「えっと俺、女神様に呼ばれて、今から草原を渡ろうと・・・」

そう言う俺に・・

「お前の様な貧相な顔（ツラ）したやつが来るなんて聞いてないぞ！」

・・・貧相で悪かったですね・・・

「えっと・・・そんな事言われても・・」そう言い返す俺を見て・

・・

「お前！さては『神域』に無理やり入りに来た、愚か者だな！この場で成敗してくれる！！」

そう言いながら、素晴しい体を鎧に包み、剣（サーベル）を抜き放つエルフさん。

「や！ちょっと待って！話をしよう！まだ間に合う！」・・・そう言うが・・

「問答無用！！」エルフさんは馬に乗ったまま切りかかってきた・・

ヒュン！　「うわ！！」・・なんとか避ける・・・

「ちぃ！避けるな！コイツ！」・・んな殺生な・・

「危ないでしょ！綺麗な女の子が、そんなの振り回しちゃいけないよ！！」

「な！！！！綺麗とかいうなぁ！！」

パカラッパカラ・・・ヒュンヒュン・・シャッシャ・・

「あぶな～～！！ちょちょ・・まって」「待たない！黙って死ね！」

・・そんな問答をし、少し避け続けると・・

「くぅ・・あたらん・・貴様なかなかやるな！では、私も本気でいこう！」

・・・いや、止めてよ・・

「待ってよ！俺は綺麗な女の子とは、戦いたくないんだ！」

「！！くぅ～！またそんなことを～・・絶対斬る！」

そう言うエルフさんは、なにやら剣（サーベル）に触れ呪文らしきものを唱え始める・・すると・・刃が緑色に光った・・・

「よし！いくぞ！」

そう言って剣を振ると・・・刃が飛んできた！！

「うわ！なにそれ！反則！！」

すんでの所で避け、何とか回避し続ける・・

ヒュン・・ヒュン・・ヒュン！！

「はぁはぁ・・なぜ当たらぬ！」・・当たったら死んじゃうじゃん！！

「ユニコーン！土葬撃！」・・やばい！！

本能に従って、必死で木に登る・・・

ヒヒーン！ガスン！ドドドドド！！！

・・・足元を土の波が襲う・・・

・・あぶね～。ナル〇読んでなかったら危なかったな・・・

「ちぃ！これもだめか・・ならば！」と馬を降り、腰だめに構えるエルフさん。

・・・全身が輝き始め・・それが剣に集約される・・・

「秘儀！消滅剣！」

そう言ったエルフさんが・・消える！・・・

・・・あんたが消えんのかい！・・・そう思う暇も無く、目の前に近づく剣を・・・

パン！

と、白刃取りの要領で捕らえる・・・

「な！」と驚くエルフさん・・・その隙に、姉さんに貰った短剣を首筋に突き立てる。

「えっと、降参してくれる？」そう言う俺を見て・・「う・・うん」と、大人しくなるエルフさん・・・

刃を戻し、首に短剣を向けたことを謝る。

すると・・「と、とんでもない！」と、返してくれた・・

聞けば、この短剣を見て女王の騎士だと分かったのだと言う。（実際違うけど）

「失礼なことをしてすまなかった・・」と謝ってもらい・・

「いえいえ、こんな美人さんに会えたんだから、それで十分」と返す。

かなり照れながら・・「神域はこの先になります」と案内までしてくれた・・

途中自己紹介をし。彼女は『バルゴー（おとめざ）』と、いうこ

とが分かった。
しばらく進み、草原の終わり。再び普通の森に差し掛かる。
「この先になります。貴方が、女神様に許可を戴いているのなら、通れるはずです」
そう言われ、森に入る・・・すると・・・
薄い膜のようなものを通過したのが分かった。
「ありがとう。助かったよ・・。そう言うと、彼女は「頑張ってください！」と、応援にしてくれ、草原に戻っていった・・・
・・・もうすぐ、女神様に会える・・そう思いながら、先に進むのであった・・・

帰還？なにそれ？中ボスのこと？（後書き）

あとがきです。
昨日投稿の予定だったのですが。・・・お気の毒ですが、データが消えました・・デレデレデレデレデ～ンデン・・・そんなわけで、今日になりました。あー、もうやる気失せるね・・・
さて次回！遂に女神様登場！その天然さにケンもタジタジ！そして、コニーちゃんの決意とは！・・・
次回！もんすたーにっき「契約？なにそれ？目的語？」・・へへ！燃えたろ？

契約？なにそれ？目的語？（前書き）

そんなわけで！前書きで次回予告！

次回！もんすたーにっき「約束？なにそれ？姉弟喧嘩？」で・・・

サービス！サービス！

契約？なにそれ？目的語？

・・・私は・・・私は！・・・・

女王との話し合いの後、危険だから・・と、護衛の人(モンスター)をつけられ、宿まで戻るコニー・・

女王と話した後、ずっと部屋で放心していたところを、護衛と名乗った人に引きずられる様に部屋を出、何所をどうやって歩いたかも分からないまま・・宿の部屋にたどり着いた。

宿で出された食事も、砂のような味しかしなく・・有機的に、ただ時間を過ごして行った・・

・・・外はいい天気だ・・・

「父さん・・・」知らず声が出た・・・

このままでは、ケンは私の下(もと)から居なくなってしまうだろう・・・

私が目指したのは、父さんとレイのような関係・・父さんと、それを囲む彼らモンスター達との関係だ・・

実際、私はすぐにそういったモノになれるとは思っていない・・・けど、それを目指したい・・と。そのような関係を築き上げて行きたい。そう思いながら、モンスター調教師を目指し続けた・・・しかし・・・

・・・貴方には任せられない・・・

「私には・・か・・」

ケンは女王の弟だと言う・・・ならば、彼も神王たる力を持っているはずだ。生まれた直後で、あの強さは納得と言うものだろう。

ならば、それに相応しい者の下へ行くのが適性とも思える・・・

でも・・

でも、あたしは・・・あたしは！！・・・

・・・コンコン・・ノック音が聞こえた。

「失礼します。食事をお持ちしました・・」
「あ、はい。」そう言ってドアの開ける。
・・・ガチャッ・・・
ドアの向こうから現れたのは、護衛として付けられた『虎人(こじん)』のモンスター『ネムル』さんだ。

・・・虎人・・・
ヒトガタのトラのモンスター。武器を操り、人の何倍もの力で敵を叩くファイター。特に素早さと防御に優れており、護衛任務や、盾兵として主に用いられる。ランク6以上の調教師でも扱える、以外に便利なモンスター。

「お食事です。」そう言って、ネムルさんは、テーブルにトレイを置くと、部屋を出て行こうとする。
「あ！・・あの・・」
「？なんでしょうか・・・」なかなかに怖い顔だ・・・
「あの！この町って治安が悪いんですか？」
そう・・・護衛を付けられた事を意外に思ったのだ。この町は、人が多いのに、昼夜問わず。とても平和な町だった。一日中、窓の外を見ていたので活気が、あるとてもいい町に見えたのだ。
「・・・そうですね・・・」少し考え込むようなネムルさん・・・
「いいでしょう。お話しましょう。あなたは昨日から、ずっと塞ぎ込んでおられるように見えました。それを解消できるようなら、お役に立ちましょう。」
そう言って、人のいい笑みを浮かべた。
「ありがとうございます。それで・・・」
「ああ・・待ってください。順を追って説明しましょう・・まず・・この町は治安が悪いか？・・・でしたね」
「はい。そうです、さっきも言いましたが、とても良い所に思えたものですから・・」

「そうですね。結論から申しますと、とても治安がいい、ですね。」
「では、なぜ護衛が必要なんですか？私の監視役・・　ですか？」
「いえいえ、とんでもない・・・」そういうと、なぜか上を見上げて、様子を伺うネムルさん。
「・・・続けます、護衛・・・と言うのも貴方を、女王様から守るため・・なのですよ」
「え？・・・どういうことですか？」
「私は、あの城に居るモンスター達の中でも結構な腕前だと自負しています・・・しかし・・」そこで一度区切って・・続ける・・
「しかし・・あの方には・・女王様には、まったく勝てる気も・・・戦うことすら思いつきません」
「それは・・・どういうことですか？」
「そのままの意味です・・・私では近づくことすら危ういでしょう・・・」
「・・・」
「しかし、ですね。そんな私でも、女王様の一撃を、貴方の変わりに受けることくらいはできる・・・そういう意味で、私は『護衛』として貴方についています。女王様が、戯れにあなたを殺さないように・・・一撃失敗すれば、正気に戻ってくださるでしょう。聡明な方ですからね・・」
「で・・でも、ここはお城からだいぶ離れています。そんなにいつも居なくても、大丈夫なんじゃ・・・」
「いいえ・・・先ほどの治安の話ですが・・この大陸を女王様が、統治されているのはご存知ですね。」
「ええ」それは、周知の事実・・・各大陸を最終的に治めているのは各『神王』なのだ。
「普通、神王は、俗世に意見をする事はあまりしません。それぞれの国が法を定め、それを守って人々は生活をしています・・この大陸・・もはや一つの国家ですね。この国では完全に、女王様が『

法』なのです・・」
・・・それは・・・いいのだろうか・・
「もちろん、基準はあります。ごく当たり前のことを守っていれば、何も起こることはありません・・ですが・・」
「・・・なんですか？」
「一度、窃盗や強盗、人の尊厳、生き物の尊厳を悪し様にする行為をすると、その場で制裁が加えられます。」
「え？・・・その場で・・ですか？」信じられない・・
「見てもいない事を、信じられないのは無理もありません。しかし、事実なのです・・つまり・・」・・・続ける・・・
「つまり、女王様は常にこの大陸で起こる事のすべてを『見て』いらっしゃいます」
・・・それは・・神・・と言うのではないだろうか・・
「生物には、それぞれ気持ちがあり、なぜそうなったのか理由があります。犯罪の行為によりますが、その制裁も状況に応じて適正な罰が選ばれています。ですので、現在この国に住む者で、不満を持つ者はとても少ないのです」
・・それはそうだろう、他の大陸や国では、犯罪行為など日常茶飯事だ。
「当然、他の神王達は、干渉すべきではない。等の意見を出すのですが・・・女王様は、他の神王よりも数段強いので、結果、反映されることはありません」
「どれくらい強いんですか？」
「そうですね・・伝承によると、女神様が女王様を神王に推挙された時、他の４神はこぞって反対されたそうです。そこで女神様が、戦って決めるようにとおっしゃられ、戦いが始まったそうですが・・・」
「・・・」
「それは、おおよそ戦闘と呼べるものではなく、一方的なものだったとあります。

４神が一斉に攻撃しても、まったくダメージを与えられず、それどころか自身のエネルギーに変換して、反撃したそうです・・・
なす術もなく、圧倒的な力で４神を退けた女王様は、自分で他の４つの大陸から大地を削り取り、今の中央大陸をお創りになったと言います。
そして、その地に女神様はお住まいになり、今のような形をとった。と、されています」
・・・・なにそれ・・・４体の神王より強いって・・・何歳よ。いったい・・
「そういうわけで、この地は平穏ですが、貴方は無事に帰れるかどうか分からない。ということですね」そう言って、笑顔を見せるネムルさん・・
「まあ、伝承なんて当てにならんもんですが、女王様が常にこの大陸を見ていることは、事実です。お気をつけください」
「・・・はい。ありがとうございました・・・」
では・・・と言って、部屋を出るネムルさん。
そんな人に・・あたしは・・・挑戦しようとしている。
言われっぱなしは癪に障る！あたしは！！
・・・絶対に認めてさせてみせる！！・・・

・・・白い髪、女性感溢れる姿、なによりその母性！嗚呼・・女神様・・・

草原抜け、ついに・・『神域』に足を踏み入れる。
見た目は普通の森だ・・・小動物の影もちらほら見える・・・というか監視されてる気がする・・
「方向は・・あってる・・かな」
草原から入ってすぐの所に、一本の道があった。まるで、誘うように用意してあった道を歩き続ける・・
しばらくすると・・・あまり大きくない、歩いて一周できそうな、

泉が現れた・・・
「お、泉だ・・」そうつぶやいて、ほとりに腰を下ろす・・・
手で水をすくい、飲む・・うまい・・
少し飲んでいると、背後に気配がする・・
「こんにちは～」間の抜けたような声・・振り向くと・・・
・・そう・・『女神』がそこにいた・・・
呆然となる俺・・白くふっくらとした髪、豊穣としか表現できない胸、まるで稲の様に細い腰、脚はすらりとし健康的・・なにより、羽衣一枚しか纏(まと)っていない！！・・・
「あ～の～」間延びした声に・・ハッ！となる
「こんにちは、お嬢さん。美しいですね。是非！俺の嫁になっていただけませんか？」
・・・言い切ってから気づく・・・やっちまった！！・・・

「ん～・・いいですよ～・・」にっこりと笑う女神様・・

「ああ、まぁそうですよね。だめですよ・・・今なんと？」
「いいですよ～。結婚しましょう♪ダーリン」

・・・嫁！確保完了！！！みっしょんこんぷり～～と！！・・・

・・・ああ、俺の旅はここで終わるのか・・・長かった・・・
思えば童貞の日々も、この人と会うために布石だったに違いない！そう！それが世界の真理だ！！そう思う俺に・・
「真理ではないですね～」そう返す女神様・・・
「えっと・・心読まれてます？」・・・どうなんですか～？・・・
「ええ！読んでます～」そう返された・・・
「ん～・・・あ！そうだ。自己紹介を・・おれは・・」そう言いかける俺に・・
「知ってますよ～。ナミちゃんの弟君なんですよね～。思った通

り、可愛いですね～」
そう言いながら、スリスリしてくる女神・・・
「あの～、確認なんですが・・『女神様』・・ですよね？」
「は～い！女神の『イデア』と言います。よろしくね♪ダーリン」
・・・結婚は決定か？！・・うれしいが・・・
「ん～。残念ですが、決定ではないですね～。条件があるのですよ～」
「条件？」「はい～」と残念そうにする女神様。
「あのですね～。ここに来ていただいたのは、そもそも帰るための条件をお話しする為だったのですよ～。しかしですね～、結婚となると、そのはーどるも上がってしまうのですよ～」
「ん～と、順番に説明しても貰えますか？まず、結婚条件から！！」・・・当然だ！
「はーいダーリン♪。えっとね、『英雄』になってもらいます。」
「・・・え？」・・・３０童貞男・・英雄になる！・・・聞いて笑えるな・・
「ん～とね。称号として、そういうものがあるの。そのためには、お姉さんを倒せば良いんです～」
・・・へー・・・無理・・・
「無理じゃないよ～。ダーリンならできるよ～。でもね、今すぐは無理かな？他の４人の神王を倒して、『正式な挑戦権』を持たないと、まず勝てないかな？」
・・・そんなものあってもなくてもおなじ・・よ？・・・
「ダーリン・・あたしと結婚したくないの？」・・うるうるしてる・・・その姿は犬のク〇ちゃんを連想させた・・
「いや！楽勝だよ！そんなのすぐにできるさ！」そう言うと、パッと笑顔になって。
「そうだよね！うんうん。そう言ってくれると思ってたよ～」・・・俺馬鹿・・
「そっか。頑張ってみるよ・・それで、帰る条件の方は？」

「それはね～。わたしと結婚するか、『世界のゆがみ』を消してくれればおっけ～なの～」
「『ゆがみ』？」なにそれ？
「最近、多くなってきちゃって～。わたしだけじゃ対処しきれなくて困っての～。けどけど、ダーリンが来てくれたから、もう安心だね」そう言いながら笑顔で擦り寄ってくる。
「え、えっと・・その『ゆがみ』って、どうやって消せばいいの？」
「えっとね・・えい！」
・・ポン！・・・「やほー」・・そう言って出てきたのは、女神様の・・子供？・・
「この子は、あたしの分身。このこと一緒にいれば、見つけられるよ。対処もその時教えてくれるよ」・・・俺の手のひらで「よろっちね！」と言っている・・
「とりあえず、文字数が多くなりすぎちゃったから、説明はココまでね」
・・・よく分からんが、大人の事情のようだ・・
「じゃ！最後に！さーびす～」
そう言って、女神様が手をかざすと・・・城の映像が流れた・・・
！！！「コニー！！」そこには・・・・
「急いだほうがいいよ～」そう言って女神様は・・泉に消えた・・
俺は全力で城に戻る・・・
・・・間に合え！！・・・そう、一心に信じて・・・

契約？なにそれ？目的語？（後書き）

あとがきです。

毎日一話書いてます。アホですね。楽しんでください！それでは！

メイドさんの憂鬱（前書き）

１０００ユニ突破！お気に１０突破！ありがとうございます。
感謝をこめて、番外です。

メイドさんの憂鬱

「はぁ・・・」

最近、ため息が増えた。

あの人が来てから、お嬢様は以前にも増して元気になられ。カラーにいたっては、騒ぎを起こす回数が確実に増えたように思う。その大元になったのは、良くも悪くもあの人だろう。

・・・先日、お嬢様が連れて来たモンスター、名をケンと言う。その姿はまるっきり人だ。しかし、その強さは人にあらず、モンスターのそれを越えるかもしれない強さを持っていた。

そんなモンスターが、お嬢様の初のモンスターなんて・・・きっとお嬢様の名は、世界に轟くに違いない！

「レイ姉～、ご飯まだ～？って、拳握り締めてどうしたの？」

この子はカラー、幻想種妖精族のとても珍しいモンスターだ。私と共に旅をしていたのだが、とある理由でここに世話になっている。

「どしたの？ぼーっとして・・・」

知力、知識はとても高く。私よりも博識であり、何よりその知識は良い方に使われるべきと、信じて疑わない純粋さに、いつも感謝と尊敬の念を抱いている。

「いえ、なんでもないのですよ・・・最近出番が減っているものですから、作者に言いに行こうかと・・・」

「さんせ～～！！すぐ行こう！ああ・・・でもご飯～～！！」

その姿はとても愛らしく、見る者の庇護欲をあおる。

「では、ご飯を食べてからにしましょうね」

「はーい！」

そう言って、テーブルでおとなしく待つカラー。

・・・今頃、お嬢様はどうしています事やら・・・

お嬢様とケンさんが修行をしに、中央大陸に行って早三日。私たちは、いつもの様に変わりなく過ごしていた。

お嬢様が、モンスター調教師を目指し始めてから・・・もう、かなりの時が立っている。小さかったお嬢様も、今では立派なレディーと行って差し支えないだろう・・しかし・・

「あの、マスターを彷彿とさせる学者肌は、どうにかならないものかしら・・・」

そうなのだ・・この家に帰ってきてから、毎日毎日フィールドワークと研究、そして資料と睨めっこの日々・・・

おおよそ、『女の子』としての行動に欠けているのではないか・・・

もっと言えば、以前は調教師になるべく、そうしたことを避けて来たのだから・・・これからは、むしろ全力で『女の子』をして行く必要があるのではないだろうか！！

そう思わずには、いられない・・・それに・・

「レイ姉～～！！まだ～～～？おなか減ったよ～～」・・そう言われ、ご飯の支度の真っ最中だった事を思い出す。

「ごめんなさい。すぐに行きます」

「はーい！急いでね～」

こういう時、カラーの素直さには本当に感心する・・・そう・・こういう素直さを見習ってほしいのだ！・・・おっと、考えが過ぎてしまった・・・カラーが食事を待っている・・急がなくては・・

「おまたせしました」

「やっときた～。わーい！ご飯♪ご飯♪」

「今日も二人ですし、ゆっくり食べましょう。」

「うん！」そう言って、いつもより少し遅く食べる・・

「今頃コニー姉とケン・・どうしてるかな～」

「フフッ」

「どうしたのレイ姉？何か可笑しかった？」そう言ってカラーが首を傾げる。

「いえ・・・私も、まったく同じことを考えたものだから・・・」

そう言って、二人で笑いあう。

「ケンが来てから、コニー姉楽しそうだよね」
「そうね。とてもいい事だわ。」
「ま、レイ姉もだけどね」
「え？・・・」そうだろうか・・・
「ケンが来てから、必ず毎日3時のおやつが出るようになったもんね～♪」
そう言いながら、うれしそうなカラー。
私が・・楽しそう・・確かに3時のお茶の時間、カラーと一緒に楽しそうにお話しする彼の姿は、とても好ましく思う。でもその分、仕事が増えたのも事実だ。モンスターである私は、少しぐらい仕事が増えた所で、大した事にはならない。厄介なのは、カラーと一緒になってはしゃぐところだ。
「カラー、ケンさんを騒ぎに巻き込むのは止めなさい」思い出したので、嗜めておく。
「えー・・・ケン、すごく楽しそうだよ。それにレイ姉だって・・・」
・・・怒っている私が・・・楽しそう？
「カラー、私は楽しくなどありませんよ。はしゃぎすぎてお嬢様の研究の邪魔などしたら、それこそカラーの本意では無い、違いますか？」
「う～ん。そうだけど・・・怒ってるレイ姉も楽しそうに見えるんだよ～」
「・・・そうですか・・・・」
私と共にずっと旅をしてきたカラー。度々こうして、私自身気づかない私の事に気づかせてくれる事がある・・・では、私も楽しんでいる・・と言う事なのだろうか？
そう言えば・・この子たちを叱る時、あまり・・いや、全然嫌な気分にならない・・・それは、私の使命感から来るモノだと思っていたが・・・
「そう・・なのかもしれないですね」

「そうだよ～！だから、今度一緒になって遊んだら、もっとはっきり分かると思うよ！！」
・・・それもいいかもしれない・・・
私は、自分がとても固い思考をしているのを自覚している。一度その殻を破ってみたほうがいいのかもしれない・・
「そうね・・・お嬢様たちが帰ってきたら、みんなで一度遊びに行きましょう」
「やった～～～～～！！」
そう言って、喜ぶカラー。
「カラー食事は・・・」そういう私に・・・
「楽しく！でしょ？！」
喜ぶカラーの姿を見て、二人が早く帰って来ないかな・・と。密かに願う昼下がりであった。

「で？作者に文句言いに行くんでしょ？」
「あ・・そうでしたね。この間のレズの件の言い聞かせないと・・・」
・・・え？・・・いい感じに話、終わったじゃん！・・・もう・・それは・・・うぎゃああ！・・・・
ガシュ！ザク！ズバ！・・・・パタリ・・・

メイドさんの憂鬱（後書き）

あとがきです
いつも読んでくださって、ありがとうございます。そろそろ色々しなくてはならず、掲載が遅くなる事もあると思います。しかし、連載は続けていきますので、どうぞこれからもよろしくお願いします。

約束？なにそれ？姉弟喧嘩？（前書き）

そ～らに♪そびえる♪るるるる♪るる～る～♪

「そんなわけで！カラーだよ！」
「レイです」
「前回、入浴シーンは回避したけど・・・」
「活躍している所が無かったですね」
「まあ、あの作者じゃしょうがないよ」
「そうですね。気を取り直しまして・・・」

「P．Nケンさんからの質問です！」
『こんにちは。いつも楽しく拝見させて戴いています。質問なんですが』
『カラーちゃんは、いつも裸（マッパ）なんですか？教えてください』

「・・・・・」「・・・・・・」

「残念！時間のようですね！それじゃ次回！まったね～」
「またお会いしましょう」

・・・ケン・・・帰ってきたら・・・土に還しましょう・・・

約束？なにそれ？姉弟喧嘩？

・・・絶対に負けない。あれは私が育てるの！・・・・

ネムルさんと話をしてから二日後、昨日城から『来てほしい』と連絡があった。

私は朝ごはんと共に、決意を心に蓄えていた。

「そろそろ時間です。向かいましょう」

そう、ネムルさんに言われ。「分かりました」と準備をする。

部屋を出て、城に向かう。・・・途中でネムルさんが、果物を買っていた。

城の仲間にお土産・・・だそうだ。

城に着いた所で、一旦別れる。私は、謁見の間に向かった。

部屋の前で、ネムルさんが戻り部屋に入る。

・・・ギギギ・・なんて音もせず、私は部屋に入った・・

「ようこそ。朝早くからご苦労様です・・」と、言われ・・・

「いいえ。女王様のお呼びですから」と、笑顔で返す・・

「ふふふ。いい笑顔ね・・・結論は出たかしら？」

そう言われ、今一度、胸に力を入れる。

「はい」

「では、聞かせて頂戴・・・貴方の結論を・・」

・・・聞かせてやろうじゃない！あたしの『決定』を！・・・・

「私は・・・私が！ケンを育てます！」・・・言い切った！・・・・

しかし、女王はつまらなそうに・・・「・・・それで？」と、言った。

「ケンは私が育てます。今までそうして来たし、これからも変わりはありえません。アイツは私が召喚(だ)したモノです！だ・か・ら！あたしが責任をもって育てます！！」

・・・しばらく女王は、本当につまらなそうに私の方を見て・・・

「それで？」と続けた・・・そして、思いついたかのように・・

「ああ！食事がまだなのね？だから、頭の巡りが悪いのでしょう！誰か、朝食をお持ちなさい。ガロプラの血がありましたね。あれを出しなさい。」

そう言う女王に・・・「食事は済みました」と告げる。

「そうなの？ネムル？」不思議そうに、ネムルさんに聞く女王。

「は、御済でございます」と返すネムルさん。

「ふぅ・・・そう・・なの・・、そうですか・・つまり・・」一旦区切る、そして・・・

「つまり、『死』を選ぶのですね？」・・・そう言った女王の背後から、ナニカが漏れ出てくる・・・

「・・私は・・私は！アイツと居たいんです！」気力を振り絞る・・すると・・

「そう」と、急に笑顔になり・・「合格です」と言われた。

「え？」戸惑う私。

「合格ですよ、コニーさん。よかったですね」そう言って立ち上がる女王。

「え・・あ、ありがとうございます」そう言って、私はホッとした・・・だから・・

「さあ、遠慮なく地に這(は)い蹲(つくば)りなさい」そう言われて、応じられなかった・・

「あぶない！！」そう言ってネムルさんが駆け寄ってくる・・直後・・

ビカッ！バリバリバリ！・・・

と、室内を激しい雷鳴が轟(とどろ)き・・黒焦げのネムルさんが・・・私のいた所に立っていた・・

「ネムルさん!!」そう言う私に。

「ね・・護衛・・必要・・だ・・たでしょ・・」そう、笑顔で言う。

「あらら・・ネムル。まだ護衛任務中でしたね。ご苦労様でした、この後は休暇を与えましょう。ゆっくり休むのですよ」

そう言う女王は、手の平から氷の矢を作り・・・投げた。

ザシュッ　そう、音がして

ドサッ　と、ネムルさんが倒れた・・

「ネムル・・さん」私は、信じられなかった・・自分の部下を・・ああも事も無げに・・

「さ、もういいですか?お祈りの時間は終わりですよ」そう、笑顔で言いながら・・

ビュオオオオ・・・女王は、手に風を集めていた・・

「乱気流の玉です。全身をくまなく傷つけ、最後に首を切り落としてくれ、土に還り易くなる。エコですね」

そう言いながら・・それを・・投げた・・

ゆっくり近づいてくる・・

「さようなら」女王はがそう言うと・・

ヒュゴゥ!一気に速度が上がる・・・私は・・・

「ケン!!!」そう、叫んでいた。

・・・どのくらい、目を瞑っていただろうか・・・

「姉ちゃん!なにしてんだ!」そう聞こえた。

目の前に青い服の男・・・ケンが背を向け・・・立っていた・・

・・・馬鹿姉!ふざけんのもいい加減にしろ!・・・

ザッザッザッザ・・・
俺は森を走っていた・・・今しがた、女神のイデアから分身を預かり城に向かって全力を出していた・・
「ダーリン」そう言うイデア様の分身・・名前を『リーベ』と言うらしい（分身なのに・・）
「ダーリン、爆走中のとこすまへんけどな・・・」そう言う彼女は、エセ関西弁だ・・
「これ、さっき渡しそびれてしもて。受け取ってな」そう言って、背中？から饅頭（まんじゅう）のようなものを取り出す。
「これはな『魔力の種』言うてな。その身（みー）に魔力を集められんねん」
「おお、なにそれ。すごそうね」言いながら受け取る。
「味は、甘くていけるねん。ワイも甘いもん好きやけど、人工物系の方がが好みやね」
そう言うリーベを無視しつつ、饅頭を食べる・・すると・・
「お！おお！なんだこりゃ」体に、血とは別の何かが巡り始める。
「お、うまくいったね。それが魔力よ。それを使えば、色々できんで」
「そうか・・」試しに足に集めて、蹴って見る・・・
ブフォォォ・・・
「うおおお！速・・い・・」一気にスピードが増した・・・
「そうそう、そんな感じで・・て、そう言う使い方してる奴見んの二人目やな」
「へー。一人目は姉さんか」それ以外いないだろ。
「せや。魔力自体を力にできるっちゅうんは、結構難しくてな。あんたの姉ちゃんは、ちょと特殊やし」
「まあな・・」俺も同感だ。
・・・全力に魔力を乗せ、更なる速度で走った結果。三日掛かった行程を、かなり短縮した結果・・・

「城だ！」到着できた。直後・・・
バリバリバリ！・・・
すごい音が聞こえた・・・
「謁見の間や！」そう言われ走る・・
「ケン！！」コニーの声が聞こえ・・姉ちゃんが何かを投げた・・・
速攻、間に割って入り『それ』を切る。
「姉ちゃん！なにしてんだ！」そう言う俺に・・・
「おかえり、ケンちゃん。やっぱり『姉さん』より『姉ちゃん』の方が良いわね」と、のんびり言った。
俺は剣を構え、黒焦げの虎？とコニーを見る。
「・・・これは、何の茶番だ？」そう言う俺に・・
「あら、早いわね。さっすが私の弟、その力・・・魔力を手にしたわね」
「ああ、さっきな」
「そう・・それにしては・・・イーちゃん。もしかして・・・」
「それはしてへんで、あたいは『魔力の種』あげただけや」そう言いながら、俺の肩からリーベが答える。
「あら！！リーベちゃんになってたのね！！後でスリスリさせてぇ！！」・・・俺は、シリアスの空気が霧散していくのを感じた・・
「う・・いやじゃ・・ダーリン助けて」そう言って、俺にすがるリーベ・・
「まあ！ケンちゃん・・・いいわ！リーベちゃんを懸けて、戦争よ！！」
・・・へ？まじ？・・・姉さんは空気を歪ませるほど、魔力を集めている・・
「ちょっと！姉さん！ココじゃまずいよ！！」そう言う俺を・・
「んじゃいっどう！！」と、姉さんが言うと・・・周囲が歪み・・景色が森の入り口へと変わった・・・
「ここならいいでしょ！行くわよ」そう言いながら、手に持って

いた黒い何かを投げた。
『それ』は黒いダイヤのように見えた。『それ』に吸い寄せられる！
ヒュゴウ！ゴーーー！
「うわ！・・なに・・これ・・」すごい風を全身に受けながら・・聞く・・
「それはね『ブーヨ・ディアマンテ』よ」そう言う声が聞こえた直後・・
・・俺は闇に飲まれていた・・

約束？なにそれ？姉弟喧嘩？（後書き）

あとがきです
何とか予約投稿であたしがいない間も、毎日投稿する予定です。
でなかったらごめんなさい；；
次回！リーベちゃんをめぐり熱い戦いをする二人！（目的変わってるな・・）
「やめて！あたしのために」そう言うコニーは、すでに外野その１。
・・次回！もんすたーにっき「カエル？なにそれ？賢いの？」のまき～♪

カエル？なにそれ？賢いの？（前書き）

かがく～の♪げんかいを♪こえて♪るるる～る～♪る～るる♪る～る～

「オス！ケンです」
「ども、作者です」
「女性人から出演を断られたので、俺たちが今回はやります！」
「ですね」

「では早速・・P．Nなっちゃんさんから」
「・・・」
『こんにちは。質問です。弟が最近冷たいんですが。いい方法ありませんか？』

「・・・あきらめる・・とか・・どうすかね？」
「いや、俺も・・コメントし・・・づ・・・」
「ん？作者さんどした・・」
後ろを振り向くケン・・・そこには・・・

・ザザザ・・ザザ・・・
ピンポンパンポーン♪しばらくおまちください・・・

カエル？なにそれ？賢いの？

・・・アンタの物はあたしの物、あたしの物は私のもの！・・・・

「ネムルさん！」そう言いながら、ネムルさんに近寄って揺する・・

ケンが女王の攻撃を切った少し後、何か言い合って女王と共に消えてしまった。

私は、黒焦げのネムルさんが心配で駆け寄った。

・・・すると・・・

「・・・墨？・・・・ぶどう？」・・・・そう・・・

「ああ～、ばれましたね・・」そう言って、何事もなく立ち上がるネムルさん。

「え・？え・・・・？」なんで？どうして？

「女王様から言われたでしょ。『合格』だって。一応試験のつもりだったんでしょうな」

ネムルさんは、手で墨を払いぶどう液を拭き始めた・・あー染みになるな・・・なんて言っている。

「つまり・・・ネムルさんは女王からの任務で、一芝居打ったと・・」

「なかなか、真に迫ってよかったでしょ。わはは」

・・すごい心配したのに・・・ガクッ・・・

「そう言えば、気が付いてましたな。ケンさんと言いましたか、彼は私の芝居と女王の演技を見破ってましたな」

「・・・そうなんですか？」そうなんだろうか・・私は、それどころでは無かったので分からない。

「言ってたでしょ『茶番』って、さすがですな。」感心したように言う。

「でも！私に攻撃したのは事実ですよ！」あれは本当に死ぬかと

思った。
「あれも、ケンさんの到着に気が付いていて、ギリギリ本当に本気を出した場合のみ、間に合うように調整されて打たれたもの、なんですよ。」
・・・あれは・・・そう・・でも・・
「ケンさんを試したんでしょうな。でも、予想よりケンさんが速かった。そんなところでしょう」
なるほど。そういうこと・・なんだろうか？・・
「さ、それより妖怪大戦争を見に行きましょう。今頃、森の入り口でやってますよ」
そう、子供みたいにウキウキしながら、あたしを引っ張るネムルさん。
「わ、わかりました。行きますから・・・」そう言って後に続く。

森の入り口では・・・ケンが黒い何かに吸い込まれ・・すぐに出てくるところだった。
バリン！！ドサッ！
「う・・く・・」
ケンは苦しそうに呻きながら、女王を見据える。
「あらら・・ケンちゃん。これも破るのね、けど・・今ので体感時間で一ヶ月ってとこかしら？早く休まないと死ぬわよ♪」
ゴハッ！（吐血している）
「くそ！馬鹿姉が！何すんだ！」
スゥ・・と、女王の目が細まる・・・
「馬鹿？お姉ちゃんに向かって馬鹿・・とは・・再教育が必要なようね・・」
そう言いながら・・・手の平で次々と色とりどりの宝石の様な物を作り、宙に浮かべる・・
全部で１０個程つくり、背後に回転させながら構える女王。
それを見ながらも、ケンは膝を付きながら息を整えていた・・・

それでも・・
「再教育？はは！姉さんも冗談がうまいな！その自信、叩き潰してやんよ！」
そう言いながらケンは剣を捨て、拳(こぶし)に魔力を集め始める・・・
「なるほど・・・いい判断ね。でもね・・・」そう言う女王は・・・宝石を細かくチリになるまで小さくし・・・ケンを指差す・・
「あなたの手で掴めるモノは、限られてるのよ」そう言うと、七色に輝くチリがケンに向かう！
「はは！姉ちゃん！俺は何も、手で掴むなんてめんどくさい事はしないぜ！」
そう言うケンは、両手を腰の位置に持ってきて軽くジャンプし・・・地面に両の拳を叩きつける！

ドガン！ゴゴゴゴーン！

地面が隆起し、チリの全てを吹き飛ばしてそのまま大量の土砂が、女王に襲い掛かる。
「あら・・・」女王はそう言いながら、片手を前に差し出す・・・それだけで、女王の目の前にあった事象全てが・・・停止する！
「あらら、ケンちゃん。後で直すのが大変なのに・・・ね！」そう言いながら、そのまま左手を後ろに差し出すと・・・
キイン！
甲高い音と共にケンが剣を振り下ろしていた。
「ち！だよなぁ！姉さんにこんなの効くわけねぇ！」
バッバッバ！　ザザ！
ケンがバク転で後退する・・しかし・・
「ふふ・・当然でしょ。この地においてあたしは、イーちゃんより強いのよ！」
サッと手をかざすと、ケンが後退した地面に穴が開く。
「うおおお！あぶね！」ケンは、間一髪穴をよける。

「ふふふ、ケンちゃん。さすがよね・・・そろそろ、反則するわよ！」
そう言う女王の体が、霧になって霧散する・・
「な！ずりーぞ！」そう言いながら、周りを確かめる。
「『正式な挑戦権』の無い者には、相応の手段を取って良い。そう言うことになってるの。ごめんね」
声が何所からとも無く聞こえてくる・・・
「そう・・、姉さんそういうことすんだ・・なら・・・死んでも文句言うなよ！！」
そう言った、ケンは両腕を胸の前で交差させ・・・何かをしている・・・
「ケンちゃん、悪あがきは良くないわよ？さ、気絶程度で許しましょう。」
女王の姿は見えない・・が、周囲の景色が・・魔力で歪み始める・・・
「さて、圧殺とかあんまり面白くないでしょうけど・・・ま、死なない程度に潰して上げます」
声と共に、ケンの周囲の色がドンドン濃くなっていく。
「おやすみなさいケンちゃん『ルフト・ヌル』」
ギュン！
急激に空気が凝縮され、ケンに迫る！
しかし、ケンは落ち着いたように、両手を前に差し出し・・・空気を掴んで・・引きちぎった！
「・・・・あーあらら・・・・」
女王は呆然としていた。
そこに、ケンが迫り・・殴った！
バガン！ドガガガ！ドン！
ケンが拳(こぶし)を振りぬくと・・・森に一本の道ができていた。
「姉さん。魔力に頼りすぎ。『気』を使う俺には、あと一歩足ん無かったな」

そう言いながら・・・ゆっくり構えを解くケン・・
「そうでもないわよ？」
ケンのすぐ横から、女王が現れ・・・ケンを引っ掴むと・・・・バチン！・・・と
電撃を通して気絶させたのだった・・・

「ふう。面白かった。一撃食らうなんて、イーちゃんとやって以来ね！」
「せやの。ウチとなっちんじゃ、勝負つかへんしな」
・・・はっはっは・・・そう笑いあう『女王』と『女神』・・・・
それを見ながら・・・私、選択肢を間違ったかしら・・・そう思わずにはいられなかった。
「いや～、面白かったですな！」ネムルさんは、いい歳してはしゃいでいた。
「あらネムル、休暇あげたでしょ？さっさと家に帰りなさい。奥さんにヨロシクね」
「了解しました。ネムル、これより帰宅いたします。」
「はい。さよなら」
そう言うと、ネムルさんはこちらに向き直り・・・
「コニーさん、これにて私は出番終了です。もし、また会うことがあればその時はよろしく」
と、握手を求めてきた。それを、握り返し・・
「はい。護衛ありがとうございました。私はこれからも、私の道を進んでいきます。また、どこかで」
「ええ。さようなら。またお会いしましょう」
そう言ってネムルさんは帰っていった。
「さて、ケンちゃんは・・・邪魔だから、宿に転移っと」
そう言って、女王が指を　パチン　と鳴らすと、ケンの体が　スウッ　消えた。
こちらに向き直る、女王と女神。

「これから、あの子には多数の事をやってもらいます。あの子が、貴方を守れる程強ければいいのですけど・・・」
「せやな、どんなことがあるかわからへん・・・降りるなら今しかあらへんで、これ以降は認められん。あんたが死ぬか、ダーリンが死ぬか。二つに一つや」
「これが最後です。本当に、あの子と共に歩いていくつもりですか？」
女王は、さっきとはぜんぜん違い優しい目で私を見ていた。
女神は、いいのか？と目で聞いているようだった。
・・・だから私は・・・・
「もちおんでふ！！」・・・噛んでしまった・・・
それから、一頻(ひとしき)り三人で笑いあい。これからのことを確認したのだった・・・

・・・ヒロイン、多すぎじゃね？作者よ・・・

朝、目が覚めるとそこは宿だった。
昨日は、姉さんにバリッされて・・・で？・・・・ま、いいか。話はすんだしな・・カエロ・・
「おきた？ケン」
そういって、コニーが部屋に入ってきて・・・ウチのムスコに挨拶していた・・・
「きゃーーーーーーーーーーーー！！！！」ダッシュで逃げていった。
「ダーリン元気やね」リーベが、おはよ　と挨拶してくれたのでおはよ　と返す。
「まあ、元気じゃなったら問題だしな。」そう納得し、食事の取れるラウンジに行く。
「ケン！なんなのよ！」・・・そう言われても、朝の正常な反応

だしな・・・
「すまん」と謝り、ご飯を食べる。
「食事が済んだら、帰るわよ」
「りょーかい」
「りょーかいや！」
「はい、わかりました」「ヒヒン」
・・・あれ？増えてるような・・・・
「てんことりまーす！」急に俺は人数確認がしたくなった・・・
「では、俺から順に・・・・1」
「2」とコニー。
「3や」とリーベ。
「4です」「ヒヒン」とバルゴーと一角獣（ユニコーン）。
・・・・おかしい・・
そう悩んでいる俺を置いて、コニーがバルゴーに向いて一言・・・
「えっと・・どちらさん？」・・・すると・・
「申し送れました。私は『バルゴー』と申します。これは一角獣の『とうもろこし』です。リーベ様の護衛とケン殿の補佐を仰せつかりました。以後ヨロシク」
・・・え？・・・そう思いリーベを見ると・・
「あー。言い忘れとったわ。スマソスマソ」・・・スマソじゃねえよ！
「ではいきましょう。船に乗るのは初めてでしてな！！いや～楽しみだ！」「ヒヒン♪」
・・・俺のパートのはずなのに、食われてる俺・・・
「と、とりあえず帰りましょ」そう言ってコニーは自室に荷物を取りに行った。
「あ・・ああ」俺も行こうとしたが・・・・
「ケン殿！あれなんですか？！」とバルゴーがうるさくて、それどころでは無かった・・・
・・結局、かなりの時間を掛け、バルゴーに大人しくしているよ

うに伝え、ようやく帰路についたケンであった・・・・

・・・あれ？俺のパート短くね？おい！作者・・どうなってんだ！！・・・・

・・・ケンは黙って帰るのであった・・・

「いやいや・・おかし・・」

ブツン！！

カエル？なにそれ？賢いの？（後書き）

あとがきです。
遅くなり申し訳ありません。
みっくみくにされてました・・・
さて次回！いよいよ大陸間対抗戦！準備にいそしむケン。しかし一方、キャラ被りの可能性がある者同士の壮絶な争いが始まっていた・・・
・・・次回！もんすたーにっき「家賃？なにそれ？勲章の事？」・・・
みっくみくにしてやんよ。

家賃？なにそれ？勲章の事？（前書き）

おひさしぶりです。
毎日見てくださってる方、おまたせしました！

家賃？なにそれ？勲章の事？

・・・まだ、その時じゃない。だから、大丈夫・・・

「そうですか。それは大変でしたね」

そう言う『タイジュ・アサシン』こと、ヴァイオレットちゃんのお父さん。

ここは、アサシン邸。

先日、五日の時間を掛け帰り付いた私に、ケンが「アサシン家に報告に行く」と言うので、私も『マスターとして』一緒に来たのだ。

「はい。本当に色々あって大変でした」そう言いながら苦笑する私。

「お兄様もお元気そうで良かったです」

「当然だよ。ヴァイオレットちゃんに会えるのに、カッコ悪いところは見せられないしね」

その笑顔が十分に格好悪いと思うケド・・・ジト目で見ている私に、二人はまったく気づかないでお喋りしている。

そもそも、アンタがおじさんに報告するの為に来たんでしょうが！！・・・

そう思う私に、タイジュさんは笑顔で・・・

「ふむ。修行は大成功だった・・・と言うわけですな。ケン殿もますます強くなって、試合も安泰ですな！」

そう言ってワハハと笑っている。

一応、女王との関係と女王から貰った『剣』と『魔力』そして『歪み』については伏せて報告した。ケンがそうした方がいいと、言ったのでその通りにしたのだ。

まあ実際、大騒ぎになることが目に見えているのでしかたないか・・・

「また何か必要な物があれば、何でもおっしゃってください。ウ

チで誇れるものは『ヴァイオレット』と『ローズ』くらいしかありませんがなぁ」
「まぁお父様、お父様も十分に私たちの誇りです」
「ありがとう」そう言いながら微笑むおじさん。
「なに？このホームドラマは・・」ケンが良く分からないことをいう。
「いいじゃない。親子仲がいいのはいいことよ」そう言いながら父を思い出していた。
「それよりも、私たち？ヴァイオレットちゃん以外に、誰かいるの？」
「あら、知らなかったの？『ローズ（まきげ）』がヴァイオレットちゃんの妹なのよ」
「へ？・・・妹なの？ヴァイオレットちゃんが妹じゃなくて？」
「そうなのよ・・・フシギよね～」ローズがお姉さんぽいのは、絶対ヴァイオレットちゃんのせいだ。
「へー・・・そう言えば、妹がいるって言ってたもんな・・・」そう話している最中・・・
バン！とドアが開き・・
「ただいま帰りましたわ！お父様」そう言って、ローズが部屋に入ってきた。
「おお！愛しのローズよ。お帰り」そう言うおじさんと
「ローズ・・・ドアは静かに開けましょうね」そう言って静かに笑うヴァイオレットちゃん。
「お・・・おねえ・・さま・・」なぜか後ずさりしている。
「ローズ。お客様の前ですよ、挨拶なさい」おっとり言うヴァイオレットちゃんだが・・なぜか迫力がある。
「は、はい。」そう言いながらこちらを見るローズ。
「やほ。ローズお邪魔してるわよ」面白いことになりそうだ。と、思いつつ声を掛ける。
「あら、貴方でしたの。何度もお誘いしたのに、ようやく来てく

ださいましたわね」
「うん。今度の件で、タイジュさんにスポンサーなってもらったから」
「そうでしたの。なら、これからは頻繁に来てくださいまし」
「私はあんまり来ないけど、こっちのケンはよく来る事になると思うの。よろしくお願いするね」
「そうですの。残念ですわ。で、その冴えない男は・・・」冴えない男・・・思わず笑ってしまった。
「冴えなくて悪いな、俺はケン。一回会ってると思うが、よろしく頼むよ」
「そうでしたかしら・・・覚えてなくてごめんなさいね。ようこそ当家へ、歓迎しますわ」
そこまで話したところで・・・
「ローズ・・・お兄様にその態度は・・・どうなのかしらね・・」
「ひぃ・・・」
そう言いながら、後ずさるローズの背中をむんずと掴むヴァイオレットちゃん。
「少しあちらでお話しましょうか。旅先の話もあるし。ではお兄様、また・・」
そう言いながらズルズルとローズを引きずって、ヴァイオレットちゃんは扉の向こうに消えた・・・「お姉さま・・ま・・・」バタン
「はっはっは。相変わらず仲が良いなあの二人は」そう言うおじさんだが・・仲・・いいの？
「さて、大会の話をしようか。次の月の初めに、南の大陸で行われるんだ。場所は北の町『ヴァルトオアーゼ』にある闘技場。ケン君は、フリー枠だから予備も兼ねて貰うことになる」
「予備ですか。それなら楽で良いですね」
「ケン黙ってて・・」
「そうだね。しかし、Sランクの欠員が出たときの代りにもならなければいけないから、一概に楽とは言えないけどね」そう言って

笑顔で続ける。
「団体戦は補欠扱いだが、個人戦は別だ。フリーだから全てのモンスターのトーナメント戦に出ることができる。もちろん、ランクと相談しなければいけないが・・」
「しかし、ケン君は最低ランクだ。だから、日程さえ合えば出られるだけ出てもらう予定だ」
「え？全部に出るんですか？」驚きながらケンが聞き返す。
「ああ、全部といっても日程がかぶっている所もあるから、正確にはランク6，3，2、Sの四つだ。しかし、体力的な問題もあるだろうから・・・」
そう言っておじさんは、一息置いて・・・
「Sと3に出てもらう」そう言った。
「Sと3ですか。それなら、なんとかなりそうですね」・・・コイツは・・
「いやいや、あのねケン。Sの意味分かってる？ものすごく強いんだよ！」
「ああ、大丈夫だろ。Sって言っても色々いるしな」・・・確かにそうだけど・・
「コニーさん大丈夫ですよ。ケン君なら初戦で負けることはありませんよ」
「初戦だけ勝ってもしょうがないと思うんですけど・・・」
「はっはっは。冗談です、まあ大丈夫でしょう」
「まかせてください！」
そう言って、わっはっはと二人で笑っている。
・・・はぁ、だめだ。・・
「そう言えば、資金は足りていますか？必要ならお出ししますが・・」
「いいいいいいいいいいいえ！もういりません！これ以上出して頂いても、お返しできません！」私は、慌ててそう返す。しかし・・
「いいんですよ。返す必要はありません。今回の大会で勝って頂

けるだけで、結構な額のお金が手に入りますし」そう言われてしまった。すると、ケンが・・・

「そうですか。ありがたく頂いておきます」と言うので・・・

「何言ってるのよ！」

「いいんだよ。大人の事情ってやつだよ」なにそれ・・・

「本当にいいんですよ。今回あなた方にお渡ししたお金以上に利益が出ますから」

そう言われてはしょうがない・・・

「分かりました。絶対に勝てるようやらせてもらいます」

「おう、その意気だ」

「あんたがやるんでしょ！！」

そんなことを言っていると、ヴァイオレットちゃんが部屋に戻ってきた。

「戻りましたお父様」

「おかえり。今、大会のことを話していたんだよ」

「そうでしたの、では昇格の事もお話しましたか？」

「おお！そうだった」そう言っておじさんは・・・

「今度の大会で、ケン君がSランクに勝てればお二人のランクを1に認定する事になったんだよ」

「へ？なんですかそれ・・・」

通常、ランク認定は3ヶ月に一回ある昇格戦で優勝しなければならない。ブリーダーは一回昇格すればそれがずっと続くが、モンスターの場合一体一体、順に上がっていかなければならない。

つまり、新しいモンスターを育てる時はランク8から・・・となる。

「えっと・・・それっていいんですか？」

「うん。協会のほうには話を通したし、勝てば認定書が届くよ」

はぁ・・・いいんだろうか・・

「それも、大人の事情ってやつだな」

わっはっは・・・と二人で・・・

「さて、そろそろ帰ります」・・・とケン。
「そうか、大会まで少ししかないが頑張ってくれ。応援にはできるだけ行こう」
「ありがとうございます」
「お兄様頑張ってくださいね」
「ああ、まかせてよ！」
「それじゃぁそろそろ、ケン行くわよ」
「はいはい。ではまた」
そう言ってアサシン家を後にする・・・
・・・大丈夫だろうか・・・大会・・・

・・・しごきといじめは紙一重だ！・・・・

「ぐおぉぉぉ・・・」
「がんばーケン～」
俺が今何をしているかというと・・・

○
<？>
Π
こんな感じで、魔力の制御をしているのだった。
「カラーちゃん、なんかコツとかないの？」
「な～い」・・・そっか。
そもそも、何でこんな事をしているかと言うと・・・この世界で言うところの『普通の使い方』ができないからだ。

・・・魔力・・・
魔力とは普通、世界に干渉する力を指す。地水火風・・・世界に流れる物に干渉して、現象を起こすのだ。ココでいう『普通』とは、

魔法のことであり、現象を引き起こすの事だ。

「頑張んないと日が暮れるよ～」・・・そう言うカラーちゃんは、監視と称してぶ厚い本（中に薄い本が何冊か入っている）を広げて読んでいた。

そうは言うが、『空中に火を起こせ』なんて不可能ではないのか？異世界とはいえ、俺には俺の理論がある！！

「はいはい、無理じゃないよ～。ほら！」

そう言ってカラーちゃんは、指先から火を出して見せた。

「これくらいなら、結構できるモンスターは多いよ」

「そっか～・・・ふむ・・」

火を起こす概念が、俺の中では固まりすぎているんだろうか？試しに・・・頭を空っぽにして、指先に火がある・・と、イメージしてみる。

ボッ！

「おお！ついた！」

「やったじゃんオメデトー」

カラーちゃんが一切こっちを見ずに、祝ってくれた・・

「ありがと」一応返す。

「んじゃ次は水ね」　ペラッ

そう言いながら読書続行中のカラーちゃん・・・

「ふぅ・・・」さっさとやるか・・・そう思って水を出す事に集中する・・・と・・・

「キャーーーー！」バリン！

甲高い声と破砕音。

「何をやっているのですか！」レイさん声。

「あ～またやってるね・・・」　ペラッ

「ああ・・・そうだね」

そうなのだ。バルゴーちゃんが来てから、最近はずっとこうなのだ・・・

バルゴーちゃんは、女神様の分身であるリーベちゃんの護衛と俺の補佐の為についてきたのだが・・・何にもできないのだ。
ずっと森で暮らしていた為、世間を知らず、一般的な家事等でも文明的なことが一切ダメなのだった。
当然、お金を稼ぐ事もできないのでこの家に住む条件として・・・家事一般を手伝う事・・になったのだが・・・
バリーン！ガシャン！「キャーーー！」
・・・これが普通なのだった。
まあそれでも、料理等生活する為に絶対必要なスキルは高い・・・とのことらしいので、意外な事にレイさんの評価は高かったりする。
「ケン。手が止まってるよ」
そう言われ、制御を再開する・・・ジャー・・あ、でた。
そんな感じで、大会まで修行する俺であった・・・

家賃？なにそれ？勲章の事？（後書き）

あとがきです。
また出張で、しばらく更新できなくなります。ごめんなさい
次回予告！いよいよ大会・・ではなく移動になります。会場は南の大陸です。
今回は、みんなで行く予定です。南は森の大陸と呼ばれています。
大会は・・・多数のモンスター戦を予定しています。見たい組み合わせがあれば、感想かメールで受け付けますよ。
・・・次回！もんすたーにっき「森？なにそれ？かんじゅーす？」・・・カイカン！

森？なにそれ？かんじゅーす？（前書き）

今週最後の投稿です。次回は九月１１日位の予定です

森？なにそれ？かんじゅーす？

・・・不安だわ。激しく不安・・・

「ついたー！！」

そう叫ぶカラーを見つつ、私も船から降りる。

「ようやく着きましたね」

そう言うレイに頷きつつ、繁華街のほうに歩き出す。

先日、タイジュのおじさんから船の旅券と今回の旅費を受け取り、こうして5日掛けて南の大陸にやってきた私たち。

「ようやくついたな」

ケンも、伸びをしつつ歩く。

「けど、本当に大丈夫かな・・・」

「大丈夫です、しっかりと言い含めましたから。それに、定期的にアサシンの家の方が見に来てくださるそうですし・・・」

「そう・・かなぁ・・」

今回、バルゴーさんを留守番にして私たちは旅に出たわけだけど・・・ものすごく不安だった・・

「ま、なるようになる・・・だろ。心配しても出てきちまったんだから、今は忘れろ」

ケンがのんびりと答える。

「う～ん。そうね、今は考えてもしょうがないもんね」

そう言って、なんとか忘れるように勤める。

「みんな～！あっちにお菓子屋さんがある～。行こうよ～～」

カラーが、私達を呼んでる。

「あんまり遠くに行かないで～！今行くから～」

そう返しながら、私達はカラーの後を追うのだった。

南の大陸の北。港町『ズー』
森の大陸と言われている所だが、森自体は大陸の中央部分だけでほとんどが草原だったりする。
私達は、ギルドに拠って大会が行われる町についての情報を聞きいて、宿に行こうとしたのだが・・・ギルドの人に・・・
「この時期、と言っても今回行われる大会が、我が大陸で行われるときに限りますが、宿はどこも一杯だと思いますよ」と言われた。
「いっぱい・・ですか・・」
・・・そうよね。普通そうなるよね。みんな見に来るだろうし・・・
「どうにかならないですか?」
「う～ん。開催地迄行けば、選手とブリーダー用の宿舎をお貸できますがそれ以外は・・・」
「う～ん・・もう暗くなってくるし・・う～」
そう言う私にカラーが・・・
「外で寝ればいいよ!!」と、元気に言ってくれた・・・
「ああ、野宿ですね」レイが納得と言ったように相槌を打つ。
「そう。お外で寝るのも楽しいよ」
「う～ん・・野宿かぁ・・・」
「それでいいんじゃないか?『宿が無ければ野宿すればいい』どっかの貴族のような考えだけど、悪くないと思うぜ」
「仕方が無いかぁ・・・」
そう考えて、決定しようとすると・・・
「それは危険だと思いますよ」とギルドの職員さん。
「大会に合わせて、多数の人が出入りしています。治安もあまりいいとは言えない状況です。」
・・・どうしろと・・・
「大丈夫!レイ姉がいるし!問題ないよ!!」
カラーが元気よく答える。
「そうね。レイがいれば問題ないわよね」

「いざとなれば俺もいるしな」
「アンタには期待してない」
と言うわけで・・・
町でテントを借り、町の広場で一泊することにした。以外にも同じような人が多数いて、一つの集合体みたいだったので、治安の方はあまり問題なさそうだ。
「そう言えば、この大陸にカラーの故郷があるのよね」
「うん！妖精の里だよ！みんな入れないけどね」
妖精の里か・・・同〇誌の即売会会場みたいみたいなところだったりして・・・
「カラー一度里帰りしてみますか？」
レイが顔色を伺うように聞く。
「う～ん・・検討中～」
そう言って、カラーは苦笑いを浮かべた。
「そうですか。まあ遠いですからね、無理に行く必要も無いかもしれません」
話は終わりと言うように、レイが寝る準備をする。
「さて、寝ようか」
・・・いつの間にか。ケンが隣のテントからこっちに来て、レイの傍で寝ようとしていた・・・
「さ、吊るしましょうか」
「そうね」
そう言って、一匹の蓑虫を作ると近くの木に吊るしたのだった。

ぐおぉ～～～～

朝一番のドラゴンの咆哮で目が覚める。
外からいい匂いがした・・・
「おはよレイ」
「おはようございます」

レイが朝ごはんを作っていた。
「よ、もうできるぜ」
ケンも手伝っていたようで、なかなか豪華な朝ごはんだ。
「コニー姉遅いよ～」
なんと！カラーがすでに起きて食べ始めていた。
いつも思うが、質量保存の法則って知っているんだろうか・・・
みんな朝食を終え、テントを返してから乗り合いの馬車で目的の町まで移動する・・・
六時間ほど揺られて、開催地『アルベロ』に到着した。
「ふう・・走ったほうが速かったな・・・」そう言うケンに・・・
「そうですね。」同意するレイ・・やめてよ・・
「しかし・・・でかいな・・・」
そう、町の南側にとても大きな闘技場があった。その後ろには森があり、木々がとても大きくて頂点が見えなかった。
「あの木々の中の何本かは、『長老様』の子供なんだよ」と、カラー。
「『長老様』？」
「そ、えっと・・神樹って呼ばれてるかな？」
・・・神王の子供か・・・
「ってことは・・・植物種（プラント）なの？」
「そうなるね」
・・プラントってあんな大きなモンスターだったっけ・・・
「ちょっと、恐怖を感じるわ・・・」
「せやな～。ウチの気持ちもちょっとは分かってもらえるやろ」
「お。起きたなリーベちゃん」
「おはよダーリン」
リーベは少し用事がある。と、機能を停止して、意識は本体に戻っていた。
「あの木々（プラント）はな、動けへんねん。動こうとすると自重で潰れてしまうらしくてな。完全に『木』やね」

そう言ってカラカラ笑うリーベ。
「あー。なるほど・・・そうよね・・けど、話はできるのよね」
「せや。『話せる木』程度におもとったらええんよ」
・・なるほど・・
「お嬢様、そろそろギルドに向かいませんか？」
「あ、そうね。行きましょう」レイに促され、とりあえずギルドまで移動する。
ギルドで、大会についての諸注意と登録を済ませ、専用の宿舎の鍵を預かって（タイジュのおじさんが家を用意してくれていた）宿に向かう。
「ここかな・・・」
なかなか立派な家だった。鍵を差し込んで開け、中に入る・・
「おお、すごいな・・」
ケンも驚くほどにすごい家だった。二階建ての洋館で、調度品も高そうな物ばかり。必要な物も全てそろっており不自由なく暮らせそうだった。
「さて、私は夕食の準備をします。お部屋を決めたら、少しくつろいでいて下さい」
そう言ってレイは調理場に消えた。
「俺は会場を見てくるよ」
「ダーリン私もいくで～」
ケンはリーベと共に会場へ向かうようだ。
「遅くならないうちに帰ってきなさいよ」一応釘を刺す。
了解と言って外に出て行った。
「あたしは～つまみぐい～～♪」
カラーは歌いながらレイの後を追う。
私は、部屋に着くと・・・疲れて寝てしまったのだった・・・
・・・面白くなりそうだ・・・

俺は家から出ると、会場が見える方に向かって歩く。
いくら方向音痴とはいえ、さすがに見えてる物は迷わないだろう・・・
難なく会場に着いた俺は、その大きさに改めて驚いたのだった。
「でかいなぁ・・・」
ものすごく大きかった。サッカーの試合会場を見たことはあるだろうか。ゴールからゴールまでの距離が3倍あって、それが円になっている。と言えばその大きさが分かってもらえると思う。
「大きい生物も出たりするんよ。だからやね」
「けど、こんだけ大きいと試合自体が見えないんじゃないか？」
「そんなことはないんよ。『鏡映』言うてな、その姿を映し出す道具があるねん。せやから、小さい物同士の戦闘もばっちり見ることができるねん」
「へ～。テレビみたいなもんか。すごいな」
「せや。まあ、ご都合主義みたいなところもあるけど」
そんな風に話していると、こっちに向かって歩いてくる影がある。
「こんばんわ」
・・・初音ミ○様がいた・・・
「え・・・？え・・？」
緑の髪、着物を着た○ク様・・・立体になったお姿はすばらしく美しかった・・・胸は控えめが良かったなぁ・・・
混乱してる俺を置いて、リーベちゃんが・・
「おお、『神樹』やないか。久しぶりやな」そう言った・・
「お久しぶりです、女神様。こちらに気配を感じましたので、挨拶に伺いました」
「そんなこと、せんでもええのに」
「いえいえ、そうは参りません」
俺を置いて話し続ける二人。
「ダーリン、この子が『神樹』。この大陸の神王や」

「初めまして。神樹と申します。カラーがいつもお世話になっているようで・・」
「いえいえ！！とんでもない！！ミ〇様お礼を言われることなんてありませんよ！！」
「〇ク？私は神樹。ただのプラントですよ？」
「ああ、失礼しました。知り合い？に、似ていたもので・・・つい・・」
「そうでしたか。女神様、今日はこれで失礼いたします。正式な挨拶は明日・・・」
「そか。了解や、またな」
「ケン殿もまた」
「はい！また明日！」
そう言うと・・・フッと薄くなって消えてしまった・・・
「あれはな『幻影態常（げんえいたいじょう）』言うてな、実態のある影を作り出す技やねん」
・・影分身の術か・・・
「神樹が出てきた・・言うことはダーリン・・・きばってや！」
「応！」
・・・ミ〇様の為に・・おれはやる！！・・・

森？なにそれ？かんじゅーす？（後書き）

あとがきです。
いつも読んでくださってる皆様、本当にありがとうございます。
順調にお気に登録も増え、頑張って書こうと思う日々です。
次回予告！遂に大会開始！しのぎを削る戦いの中、全部ほっぽってミク様を追うケン。お前物語はどうした！！
次回！もんすたーにっき「決闘？なにそれ？井戸端会議？」で、僕と握手！

ピクニックに行こう♪（前編）（前書き）

番外です。
短くして二回に分けました。

ピクニックに行こう♪（前編）

「ピクニックに行きましょう」
・・・それはレイの一言から始まった壮絶なお話・・・

「やっほー！待ってました！レイ姉！！」
カラーがすぐに同調した。
「いいわね。たまにはみんなで行きましょうか」
私も同意し、最近ウチに来たバルゴーさんも誘ってみんなで行く事にする。
「オイオイ、俺も行くよ」
「いいわよ来なくて」
「ひでぇ・・」
「あのー、私いてもいいんですか？」
「いいの！親睦を深める為にきてもらわなきゃ！」
「ブヒヒン」
「とうもろこしもね！」
「ヒヒーン」
「ならウチも行ってええんか？」
「うん！リーベももちろん来てね」
「よっしゃ！ダーリンすまへんな」
「ううぅ・・・」
そんなわけでお出かけ用意！
ケンはお留守番。女所帯でいきましょう！

「で？レイ。どこまでいくの？」まずは目的地だ。
「裏山に行こうかと・・・」
「え”・・・」

私の家の裏手には『霊峰』と呼んでもおかしくない程の山がある。標高１７５２m、山頂は『神龍の鞍』と呼ばれ、長細い鞍のような形をしている。

「えー・・っと、何合目まで？」一応聞いてみる。

「山頂です♪」・・・当然か・・・

「おお！あの山を登るのですか！すばらしい。きっと良いものがみつかるでしょう！」「ヒヒン♪」

・・・良いものってなによ・・・

「わーい。登山登山～♪」

・・・突っ込み役不在！！！・・・

「おお、神龍の別荘に行くんか。楽しみやなぁ」

「あー・・そんな甘いもんじゃないと思うけど・・」

私のつぶやきはサラッと流され・・・

「では準備しますね。すぐ出来ますので皆さんも準備してきてください」

「え”え”え”！！今から行くの？！！」

私の声は華麗に無視され・・

「ハーイ！！」

「ハッ！了解です」「ヒヒン」

「了解や！」

みんな素直に準備に行く・・・

ポンッ　肩が叩かれた・・・グッ！っとケンが、ものすごい笑顔でサムズアップしていた・・・

ガス！ドガ！ゴキ！

とりあえず殴り、私も準備することにした・・・生きて帰れますように・・・

・・数分後・・

「やー！いい天気やね！散歩日和や！！」

「そうですね。のんびり行きましょう」

「はーい！」
「はい。了解です」「ヒヒン」
「はぁ・・・」
誰がどれを言っているかお分かりいただけると思う。
「さて・・・行く前に諸注意です。ここからは、皆でいけるよう助け合いが必要です。隣の人と支えあって山頂を目指しましょう！なお・・・通常ルートは時間が掛かり過ぎる為、裏道を行きます」
「え”え”え”！！あそこを行くの？！！」
何度目になるか・・・私の悲鳴です。
「はい。大丈夫ですよ、お嬢様は私が支えます」
「裏道ですか・・楽しそうですね」「ヒヒン♪」
「せやな、いい響きや」
「うらみちうらみち～♪」

・・

裏道・・・とは名ばかりの・・・絶壁である。１００ｍ程、切り立った崖がそびえるこのルート・・・最初の絶壁だ。
「足場は・・あそことあそこですかね」
そう言うレイ・・１００ｍで足場が・・・二箇所・・・無理無理・・・
「ふむ、十分ですね。行くよ、とうもろこし」「ヒヒン！」
「んじゃ、私は先に飛んでるね～」
「うちもそうするわ」
そう言って妖精と女神は飛び、エルフと馬は軽々と登っていった・・・
「さ、お嬢様。私がお助けします、まずはここに足を掛けてください」
「ええ！オブって行ってくれないの？」
「当然です。日ごろの運動不足を解消なさってください」
・・いやいや、運動とかあんまり関係ないし・・・物理法則守ろうよ・・

「ね～まだ～」
「せや。はよして～な～」
すでに上に到着した妖精と女神が私を呼んでいる。そして・・・
「さあ、行きましょうか」
笑顔で促す・・・メイドさんが隣にいた・・・

ピクニックに行こう♪（前編）（後書き）

あとがきです
せこい私は、短くして二回に分けて掲載する事にしました。
先に言いますが、この番外、オチはありません。あしからず。
後編は９月８日です。

ピクニックに行こう♪（後編）（前書き）

本編は９月１１日位に出来上がる予定です。

ピクニックに行こう♪（後編）

「ピクニックに行きましょう」
・・・それはレイの一言から始まった壮絶なお話・・・

「ぜぇ・・ぜぇ・・・」
「ようやく到着ですね」
「遅いよコニー姉～」
「せや！もっと気張りや！」
・・・ふぅふぅ・・・普通が一人もいない空間は・・キツイ・・
思えば、ケンは意外に常識人だったような気がする。今度からは、少しやさしくしてあげよう・・・
「さて、次はあそこですね」
そう言ってレイが指差す先は・・・谷？だった・・・
「わーすごーい！」
カラーが下を見て驚いている。
「これはすごいなー！下が見えへん」
・・・おかしなことを言われたような・・
「これはすごいですね。・・落した物の音が返ってきません、落ちたら死にますね」「ヒヒン」
アンタらおかしい！！何でそんなに冷静&楽しそうなんだ！！
「ここはですね。普通のジャンプでは届かない危険があります。向こう岸を見てください」
遥か彼方に『向こう岸』が、かろうじて見える・・気がする。
「あー・・・これは届かないかもね～」のんびりと言うカラー。
「せやな～。ちとキツイかもしれへん」おなじくのんびりとリーベ。
「とうもろこし、行けそう？」「ヒヒン♪（訳：余裕っす）」
「ですので、あの位置にロープを下げておきました」

・・・見ると確かに、かなり先のほうにロープが見える・・・切れそうなやつが・・・
例によって・・・
「おさき～♪」
「先いくで～」
そう言って、飛行コンビが飛んでいく。
「さ、久しぶりに天を掛けようか！」「ヒヒン！」
そう言うエルフと馬は、助走もなしに・・・ジャンプした！・・・・
遥か彼方まで飛び上がり、問題なく向こう側に着地していた・・・
・・・ぶ・・物理法則・・無視・・・イカロ○辺りが見たら卒倒しそうな光景だ。
「さあ、お嬢様。ここは私にお掴まりください」
「えええ！・・大丈夫？」
「はい、問題ありません。ロープまで飛べば、すぐですから」
そう言って笑顔を見せるメイドさん。
「・・・・・・・・・・・・お願いします」
レイにギュっと掴まる！
「では・・いきますよ！」
そう言うレイは・・・助走なしでロープまで飛んだ！！
落下しながらロープに手を伸ばす！掴んだ！！
ブチッ！
！！！！！！・・・ああ、オワタ・・・
そんな私の目の前で、冷静に別の手でさらに上を掴むレイ。
ギュン！・・・スタ。
難なく向こう側到着・・・・死んだと思った。
「ふう、危なかったですね」
「・・・・そう・・ね」
顔面蒼白の私・・・これ・・ピクニックよね・・・
「今回は早かったね～」
「せやな！やればできるやん！」

笑いあう二人・・・帰りたい・・・

「さて次ですが・・」

まだあんの！おかしいよ！帰りたいよ！

「あの『沢』を登ります」

そう指差すレイ・・沢？どこにあんの？崖じゃん。

「おーあれはきつそうな『沢』だねぇ」

「せやな、あんなに表面がピカピカやときついかもしれへん」

「あれくらいなら大丈夫だよね」「ヒヒン」

・・・『沢』？崖の間違いでしょ・・・

私の目の前には水が滴り落ちる崖があった。角度は・・まず左手を真上に、右手を真横にして、その中間まで右手を上げる。そして、さらにその「右手と左手の中間まで右手を寄せよう！

そうして左手を下ろせば・・・目の前の角度が体験できるよ♪

・・・無理・・・

「さ、渡りましょうか・・・」

登ろうの間違いだって！！！

「おっさき～」

「さきいくな～」

「では行きますね」「ヒヒン」パカラパカラ

「さ、お嬢様お手を・・・」

そう言われ手を差し出す・・・

「さあ、歩きましょう」

そう言われて歩き出すが・・・ものすごく滑る・・・

「お嬢様。運動不足ですよ」

そう窘(たしな)められるが・・・人には不可能だと思うよ・・・

息も絶え絶えに、何度も転びながら何とか渡りきる。

「山頂まだ～？」

「もうすぐと違うか？」

そう言う二人にレイが・・
「もうすぐですよ。次の場所を越えれば、山頂です」
ああ・・・ようやく山頂デスネ・・・
「最後はあの場所を通過します」
そう言って指差した場所は・・・
「・・・・本当にあんなとこ通るの？」
「はい」
溶岩が流れる川があり、その近くに・・・龍達が巣を作っている・・・
「この『龍の巣』を渡れば山頂になります」
ハイ！龍の巣入りました！そのままですね。
「・・・本気でココを通るの？」
つい、そう尋ねてしまう・・・
「ハイ、今からだとココを以外に山頂を目指せるルートがありません」
ですよね～・・・
「コニー姉、大丈夫だってば！いざとなってもレイ姉が守ってくれるよ！」
「せやで！ここは漢（おとこ）を見せるときや！！」
「とうもろこし、逃げる時はお願いね」「ヒヒン」
「さあ！さっさと通ってしまいましょう。溶岩に気をつけて、龍達は何もしなければ襲ってはきませんよ」
レイがそう言うと・・・
「ハーイ！」
「さっさと行ってしまおう」
飛行チームが、本当にさっさと行く。
「行こう」「ヒヒン」
エルフと馬もそれに続いた。
「さあ、私たちも行きましょう。ここは比較的安全な場所ですので、大丈夫ですよ」

・・・どこと比較したのだろうか・・・
そんなわけでさっさと渡る。
歩いている最中、特に龍達が何かしてくることはなく、こちらを気に留めることもなかった。
向こうからしてみれば、小さい物の存在なんてどうでもいいのかもしれない。
・・・しかし途中、龍の卵の傍でカラーが寝ようとしているのには、正直ビビッてしまった・・・

そんなこんなで無事通過し、ついに山頂にたどり着いた。
「ふぅ・・ようやく着いたね！」
「せやな・・・ピクニックって感じやったし、十分楽しめたわ」
・・・この子達は・・大物なのだろう。私とは感覚が違う・・・
「楽しかったですね、とうもろこし」「ヒヒン」
山頂から下を見つつ腰を下ろす。
「ふぅ～。疲れた・・・」
ようやく息がつけた。
「少し遅くなりましたが、お昼にしましょう」
レイがそう言うと、みんな大喜びで座りレイのお弁当を囲んだ。
・・・チチチ・・・鳥が飛んでいる・・・のどかだ・・
「たまには、こういうのもいいね」
「はい。私もカラーに言われるまでは、気づくことができなかったものです」
「えへん！あたし偉いんだよ！」
色々あったが、この景色とみんながいればそれが全てなのではないか・・・そう思った午後のひと時だった・・・

レイが・・・さあ帰りましょう・・・と言うまでは・・・

ピクニックに行こう♪（後編）（後書き）

あとがきです
いかがだったでしょうか。
本当はみんなの自己紹介話の予定でしたが、いつの間にかこんな話になっていました。ごめんなさい。次は、本編です。いま少しおまちください・・・

決闘？なにそれ？井戸端会議？（前書き）

最近、タイトルと内容が合ってこなくなりました。

決闘？なにそれ？井戸端会議？

・・・モンスター調教師になって数ヶ月、こんなところに来れるなんて思わなかった・・・

ワーーーッ！

「只今より！今年度『大陸間対抗戦』を開催します！」

ワーーーーッ！！

アナウンスが流れ、会場は一気に熱を帯びていく。

私も補欠とはいえ、出場モンスターのマスターだ。気合も入ろうと言うもの・・・

「レイ姉おなかすいた～」

「これをどうぞ」

「ワーイ！ありがとう！！モグモグ・・」

「私も出たかったですが・・仕方ありませんね・・」

「ヒヒン」

「ありがとう、とうもろこし。しかし、慰めは不要です！勝った者を倒せば同じこと！辻斬り上等です！」

「ダーリン出番はないんか？」

「今のところ無いな。まぁ、さすがにココまで来て体調不良で欠場なんてやつはいないだろ」

「ま、せやな」

「最初は、北対南だし・・お手並み拝見だな」

・・・こいつら・・・まぁ、仕方ないか・・

「そろそろ始まるな・・」

「せやね、今回はどんなんが出るんか楽しみやわ」

「それでは、第一回戦『北の大陸　対　南の大陸』を始めます。第一戦・・・ランク８『スライム　対　ベヘモス』を始めます。

・・・へ？・・・なにそれ・・
見ると、巨大な獣が涎を垂らしながら目の前のスライムを見ていた・・・
グゥゥーグフゥゥー
恐ろしい程の息・・見ているだけで泣きたくなるモンスターだった・・・
「あ・・あれでランク8なの？おかしくない？」
「あれは、わざとランクを上げてないんやね。どうせ後で昇格できるんやし、ここで勝っといて後で上げる気なんや」
・・なんて卑怯な・・・
「まあ、うちらも人のこと言えんけどな・・」
そう言ってリーベは、ケンを見る。
「へ？なに？」
「なんでもあらへん」
そう言って私とリーベは闘技場の方を向いた。

「ぷるるる！」
「ガァァァーーー！！」
・・違いすぎる差・・・勝負にならないでしょ・・これ・・
スライムが、べへモスを叩く・・・が・・
プルン・・プルン・・
毛ほどもダメージ与えてないように見える・・・
のんびりそれを見るべへモス。ゆっくり足を振り上げ・・・ズシーーン！！・・・振り下ろした。
ぷち・・・そんな音が聞こえた気がした。
フン！と鼻息荒く、勝利を確信するべへモス。
「勝者！南の・・・」
そうアナウンスが流れようとしたその時・・・
ゴオオオオーーーー！！

何かが放出される音がした！・・見ると・・
スライムが、ものすごい火炎を吐き出していた・・・
グオオオオオオォォォォーーー！！！
のた打ち回るベヘモス・・・
ゴォォォォーーー！！
なおも吐き出される火炎・・気が付くと・・丸焼きにされたベヘモスがそこにあった・・・
静まり返る会場・・・
「しょ、勝者『北の大陸』！！」
アナウンスがそう言うと同時に・・
ウオオオオォォォーーー！！
すごい歓声が闘技場を包んだ・・・

「すごかったね、今の・・」
「せやな・・・スライムには『ヘルファイアー』と『瞑想』があったの忘れとったわ」
「『瞑想』？」
「せや、簡単に言えば自己修復やね。」
「へー。スライムも侮れないのね」

そんな感じで大会は進んでいった。驚いた戦いだけ記していく。

キンナラ　対　ヴァラク

キンナラは、リーベ曰く『天上の楽師』と言うらしいが、筋骨隆々の男の体に馬の頭をしている。右手に槍を持ち左手に・・・なんと、羽衣を着た天女が乗っていた。あれがたぶん『楽師』なのだろう。その証拠に、太鼓を持っている。
ヴァラクの方は、真っ赤な双頭の龍に龍の羽を生やした少年が乗っていた。

「あちゃー。ヴァラクの負けやな、これは」
「なんで？」
「見てれば分かるで」
そういうリーベ・・・カーン！開始の音が鳴る。
グオォォーー！
ヴァラクの龍が吼える。ゴーーーー！！双頭の龍から、ものすごい炎のブレスがキンナラを襲う！
しかし、キンナラは一歩も動かず・・・ただ焼かれていた。
ゴーーーー！　結構な時間焼かれ続けたキンナラ。
「あー、終わったわ」
リーベがそう言うと同時に・・・ズズン！・・・と、音がし・・・
ヴァラクが地面に沈んでいた・・・
キンナラは一歩も動かず、その場に佇んでいた。
「？？？どういうこと？？」私がそう聞くと・・
「あれはな、幻術や」そう言いながらキンナラの方を指差し・・
「あの存在そのものが幻でな、本物は闘技場のどこかにおんねん。そんでな、敵が向こうに攻撃しとる時に・・・ブス！なんや」
「けど、攻撃されたら気が付くでしょ？」
「そこで、あの太鼓や。あの太鼓はな『戦いのドラム』言うてな、対象を狂戦士（バーサク）状態にするんや。そんで、攻撃されても死ぬまで気づかへんっちゅうわけや」
「へー・・」恐ろしいことをするモンスターもいるもんだ・・

バエル　対　ウリュエル

バエルは黒い霧のような泡のような体に、おっさん（インド人）のような頭、カエルの頭、ネコの頭を覗かせている。
ウリュエルはどう見ても天使で、右手に剣を、左手に炎を持っていた。
「なにあれ・・気持ち悪い・・」

「せやな、厄介な奴がでてきたで・・あのバエルっちゅうやつはな・・・」
カーン！リーベの話の途中で試合開始の音がなる。
「とお！」気合と共にウリュエルがバエルに迫り・・斬る！
「うおわ！ゲー！フギャ！」とバエルが鳴いた。
バエルの体が三分の一程斬られ、落ちる。
「あちゃー・・やってもたな」
「へ？」
リーベの声を聞き、私は疑問を覚える。
「みてみー」
私は、闘技場に向き直った・・すると・・・
ボコボコボコ！！！と、切られた部分から・・・小さいバエルが多数生えてきた・・
「うえ」とても気持ちの悪い光景だった。切られた部分からどんどん増えるバエル・・・
「チィ！とあ！！」そう言ってウリュエルは炎でバエルを焼こうとするが・・・
ブハァァァー！！　と、紫色の霧を噴出するバエル本体・・
「うぅぅぅ・・・」　苦しむウリュエル・・・
「あれは毒と麻痺を合わせた霧やな・・きついで～」
次第に動きが鈍るウリュエル。そこに小さいバエルが殺到する・・・
ガリガリガリバリモシャモシャ・・・
そんな音が聞こえる・・・
「た・・食べてる・・・」
「せや。でもってな、食べた分だけでかくなんねん。しかもまた増殖しよる・・・気持ち悪いやっちゃ」
「倒す方法はあるの？」
「ある。たぶん今、あの天使はやっとる」
しばらく見ていると・・・バン！バン！バン！　と、次々バエル

達が破裂していく・・・
「ま、当然そうなるわな」そう言うリーベ。
「うおおお！ゲロゲロ！フギャー！」なぜかのたうつバエル本体。
「何？何が起こってるの？」戸惑う私。
しばらくすると・・・ドーン！と、ついにバエル本体も爆発してしまった・・・
ジューーー！と蒸発していくバエル・・・
「あれはな・・『清浄な気』を食べ過ぎたんや」
「『清浄な気』？なにそれ」
「バエルの弱点や。あれは悪魔やねん。せやから、清浄な気に弱いんや。なのに、あんなにバクバク食べて、本体に気を送っとったら・・そら死ぬわ」
見ると、ゆっくりウリュエルが立ち上がり・・勝利をうたっていた。

コロベンド　対　雪男

コロベンドは、三対で一体のモンスターだ。○んご○ん兄弟のようなモンスターで、一体一体が鉛筆みたいだ。
雪男は、見たまんま雪男だ。白い体毛が全身を覆い、大きい。
カーン！開始の音が鳴る・・・
ダーーン！！　大きい音と共に・・なんとコロベンドの一体がすごい勢いで射出されていた・・・
「なにあれ・・」
「見てのとおりや。あれはなコロベンドの技なんや」
「うごぉぉーー！」　雪男がコロベンドを、まともにくらい顔を抑えている。
その間に、コロベンドは「よいしょ！よいしょ！」と声を出しながら、雪男に近づいていく・・そして・・
バチバチバチ！！　と、三体で電撃を発生させた。

「うごおおーーー！」雪男の悲痛な声が響く・・・
ブン！ドーーン！　、雪男が腕を一閃させ、コロベンドの一体を叩き潰した。
「ころーーーー！」コロベンド達が潰された一体に近づく・・・
「こ・・こ・・ろ・・」　パタリ
「コローーーーーーーー！！」
・・・なんだろう、なんか叫んでる・・・
ひとしきり叫ぶと・・・なぜか潰された一体を担いで、闘技場を出て行くコロベンド。
なんかわからんが、雪男の勝ちのようだった・・・
そんなわけで、まず『北と南』は、『南』が勝利を修めたのだった・・・

・・・やばい人がいる・・・

今日の試合が終わり、会場を出ようとする俺・・・
「すごかったな～。恐ろしいモンスターばっかりだった。補欠一体じゃ、まかなえんだろありゃ・・」
そう言いながら、通路に差し掛かる・・すると・・
「ケンちゃんはっけーん！！」
・・・やな人の声がした・・・
ゆっくり振り向くと・・案の定『姉』がいた。
「やほ！ケンちゃん。応援に来ちゃった♪」
「お久しぶりですな。コニー殿、ケン殿」
後ろに虎人を従えて、俺のもとまで歩いてくる。
俺は頭を抱えつつ、挨拶を返す。
「や、やあ姉さん。久しぶり」
「ほんとよ～。お手紙くらいくれてもいいのに！」
プリプリ怒る姉。

「久しぶりやな、女王。相変わらずや」
「やっほ。リーベちゃん」
「お久しぶりです、女王。」
「あら、コニーちゃん。頑張ってる？」
「おかげさまで。まだまだですが・・」
「あせっちゃダメよ。のんびり二人で強くなりなさい」
そんな会話を聞きつつ、俺は二人を見る・・いつの間に仲良くなったんだ？・・
「明日、ついにケンちゃん達の試合ね」
「まぁ、俺は補欠だけどな」
「そうなの？見たかったのに～」
「まあ、俺なんかが出ても速攻やられるよ」
「そうかしら？」
そんなことを言いながら、闘技場を後にする。
「姉さんは、これからどっか行くの？」
「ええ。これから人間の王に会うの」　虎人がその後を引き継ぐ。
「この国の王ですな。人間は細かい事にうるさいから、注意が必要です」
「そうなのよ。だから、ネムルを連れて来たの」
「そうなのです。この方は作法とかが、まったくの苦手のようでしてな」
・・・ネムルさんかわいそ・・・
「それじゃぁね！対抗戦が終わるまでいるから。また会いましょ」
「ではまた。コニーさんも、またお会いしましょう」
そう言って、二人は去っていった。
宿に戻る俺達。
明日は『東西対決』となる。
「気合入れて応援するぞ！」
「あんたも行くのよ！！」
そんな応酬をするのであった・・・

決闘？なにそれ？井戸端会議？（後書き）

そんなわけであとがきです。
ようやく、大会始まりました。大会名忘れてました。すいません。
次回投稿は、１３日２１：００予定です。
次回予告！遂に東西戦！頑張って応援するケン。出番が少なすぎて開催中にあそびにいく始末。「パフパフどっかでできないかな～」
次回！もんすたーにっき「戦車？なにそれ？ネコの事？」・・・クリリンのことかーー！！・・・ちなみに、ア〇ギは出てきません。

戦車？なにそれ？ネコの事？

・・・こいつの出番が来ませんように・・・

今日は大会の二回戦『東西対決』だ。

「んじゃ行くわよー」

「うーい」

「しっかりしなさいよ！恥かかないでね！」

「うーい」

気のない返事を聞きつつ、ケンとリーベ共に東の控え室に行く。

「まあ、昨日の試合で分かったやろ。補欠が必要な理由が」

「十分にな・・・」

「そうね～。あんなにバシバシすごい試合ばかりだったら、モンスターはもたないわ・・」

「せやねん。一応、試合が終わったら控えの間に復活するんやけど・・・」

「・・・けど？」

「ダーリンは、死んだらそこで終わりやねん」

・・・・・・・・・・・・は？

「へー。それって普通だろ」

「は？あんた本気で言ってるの？」

「は？当然だろ？俺の世界じゃそれが普通だ」

「せやなー。なっちゃんそうやし。ま、しゃーないな」

・・・そんな簡単に認めていいことなの？・・・

「どした？コニー。いくぞ～」

「まって！！」

あたしは納得できないかった・・・

「あんた！何でそんなに冷静なの？死んだら終わりなのよ！？な

のにどうして・・」
「落ち着けって・・・それが『普通』なんだよ。この世界の奴がそうなら、むしろ『やりやすい』だろ？」
「へ？どういうこと？」
「つまりだ・・・ココの奴らは、実質的に『死なない』って事は、だ・・・。本気で掛かってもいいってことだよ」
「なるほど、そうなるんか。ダーリンは優しすぎるわ」
「当然。俺は紳士（ジェントルマン）だぜ！」
「え？・・・つまり、あんたは死んでもいいって事？」
「死ななきゃいいだろ？それだけだって事だよ」
・・・理解できない・・・
「怖く・・・ないの？」
「う～ん・・・怖い・・ねえ・・。うん。怖いな」
「だったら・・」
「でもな～。恐怖は愛でてナンボだぜ」
「ダーリンかっこええ！」
・・・ふぅ・・今は考えるのはよそう・・
「わかった、あんたがそう言うなら。あたしは、何も言わない・・・だけど、覚えておいて・・・あんたが怪我したら・・・あんたが死んだら・・・」
・・・あたしが悲しむって事を・・・
「？どした？怪我がなんだって？」
「なんでもない・・」
そう言って私は歩くのだった・・・

ガチャ　と、扉を開けると・・・
「お兄様～！！」
「うお！ヴァイオレットちゃん！」
ヴァイオレットちゃんを始めとして、８人と８体のモンスターが揃っていた・・・８人？

「あれ？一人足りなくない？」
「ああ、ローズは先に行きました。なんでも『登場にはそれなりに準備が要りましてよ！』って言って走って行ったそうです」
「馬鹿ね」「馬鹿ですね」「馬鹿だな」
三段活用も揃い、改めて自己紹介をする・・
「初めまして。補欠のケンのマスターをしてます、コニーです。よろしくお願いします」
「はい！聞いてます！今日はよろしくお願いします！」うれしそうなヴァイオレットちゃん。
他の面々からも「よろしく」と言われて、ようやく安堵した。
東の面々に、あまり大きなモンスターはいない。これは、相手に警戒心を与えないようにと、タイジュのおじさんの考えだった。
しかし・・・これは・・『ネコ』？しかもブクブク太っている。まん丸だ
「なんじゃい小娘！」　ネコがしゃべった！！
「こ～ら！脅かしちゃダメでしょタマ！」
「しかし主（あるじ）。この娘、ワシがあまりに愛らしいからと誘拐を企てておったのだぞ！」
「そんわけないでしょ。んもうタマったら・・ごめんなさい。コニーさん」
「いいのよヴァイオレットちゃん・・・その子・・出場するの？」
ざわ！　なぜか一気に周りがざわついた・・・
「そうなんです。一応『Sランク』なんですよこの子」
「そうじゃそうじゃ！強いんじゃぞ！」
「知ってるって、大丈夫よタマ。私は、タマが可愛いだけじゃないって分かってるから」
そう言ってふんわり抱き上げ、ナデナデするヴァイオレットちゃん。
ゴロゴロ言い出すネコ。・・・よくわかんないな・・
「へー・・強そうだな・・・」　ケンがそんなことを言う。

「そうなの？私にはわかんないわ」
「だろうな。ありゃ、相当のてだれだぜ」
ネコとヴァイオレットちゃんが仲良くモフモフしている・・・強そうには・・見えない・・
「そろそろ一戦目が始まります。皆さん行きましょう」
そう言って引率するヴァイオレットちゃん・・・少し後、私はケンの言葉の意味を知るのだった・・・

「おまたせしました！二日目、『東の大陸　対　西の大陸』を始めます！！」
ワーーーー！！

「始まったな」
「そうね。ウチのチームには、昨日みたいなすごそうなのはいないけど・・・」
「十分強そうだろ」
「うん」
今日は、ケンの出番は無い。初日に欠場するようなモンスターは、やはり少ない。
「今日は、どんな戦いが見られるかな。楽しみだ」
「そうね」・・・あんたが死ぬかもしれない相手はチェックしとかないと・・・

「それでは、第二回戦第一試合を始めます」
アナウンスが流れる・・
カーン！
開始の音が流れたのだった・・・

・・・覚えられることは何でも、俺の力にする！・・・

カーン！
試合開始の音が流れた・・・にもかかわらず・・・
「出てこないな・・・」
「せやね」
第６試合まで進み、『チャリオッツ　対　ブーヨモノリス』の試合になったのだが・・・自陣のモンスターとマスターが出てこないのだった。
相手モンスター『ブーヨモノリス』一言で言うなら『黒い壁』だ。どうやっているのか、浮いている。時折、顔や手を壁の表面に浮かべている。
「不戦敗？いや、控え室では全員いたしな・・」
「急にお腹が痛くなってトイレにいったんちゃうの？」
「んなばかな」そう言って笑う俺とリーベ。
こうして開始している事を考えれば、審判側は両者が揃っていることを知っているはずだ。てことは・・・
「オーーーーッホッホ！」
・・・やっぱりな・・・
「やっと出て来よった」
「皆さんお待たせしましたわ！私、ローズの華麗なるモンスターの登場ですわ！」
どっかーん！
闘技場の壁の一部をぶち壊して。一体のモンスターが登場した。
モンスター『チャリオッツ』戦車と言うに相応しく、その車体を引くのはドラゴンゾンビだ。それを御者するのはピエロの格好をしたネクロマンサーである。
リーベちゃんの話だと、このチャリオッツは飼うにはとても不向きらしく、制御し自分のモンスターにしている例は極めて少ないのだとか。
「さあ！やっておしまい！」

シャーシャッシャッシャ！　グオーー！
チャリオッツが鳴き、ものすごい勢いでモノリスに突っ込んでいく。モノリスは先ほどと変わらず、ただ浮いている。
ドッカーン！
なかなかの音がして・・・モノリスがバラバラになった。
「オーーーホッホッホ！」
ローズの笑い声がこだまする。
「あれ？おわり？」
やけにあっさり決着がついたな・・
「んなわけないやろ。よー見てみ」
みると、モノリスの破片がチャリオッツの足元に移動し・・・破片から、無数の手が伸びていた。
「な！なんですの？」
ローズが気が付くころには、すでに無数の手に絡め取られているチャリオッツ。
シャーー！グオーー！
チャリオッツが暴れるが・・・すでに遅い・・
手はだんだんと壁に戻り始める・・・そして・・・
ガシャン！
と、チャリオッツを内包したまま・・元の壁に戻ってしまった・・・

「キャーーーー！わたくしのチャリオッツがーーー！」
「どっかで見たな。この光景」
「ま、しゃーないな。向こうが一枚上手やったわ」

第七試合が始まる少し前、俺は控え室に呼ばれていた。
「え？チャリオッツがダメ？」
そう、チャリオッツが先ほどの試合で怪我を負ってしまった、と言うことなのだった。
「そうなのよ」と言うのはコニー。

「なんで？死んでも平気なのに怪我は負うんだ」
「えーっとね。ただで復活できるわけじゃないの。ある程度ダメージを負った状態で復活が許される。ってことなのよ」
「せやな。試合以外では、こんなこと（死んでもｏｋ）なんてあらへん。せやから、ある程度はリスクを負ってもらうことにしとるんや」
「なるほどね」
「だから、明日の試合以降は、ケンが『ランク３』として出場してもらうことになったから」
「了解、それだけなら早く会場に戻ろうぜ『ナーガ　対　ゴーゴン』が観たいんだ」
そう言って歩き出す俺。
「・・・そうね」と、不安そうについてくるコニー・・・
・・・俺は大丈夫だっての・・・

第七試合は、とっくに終わっていた。なぜかゴーゴンが石になっており、後で誰かに理由を聞く必要がある。
そして、第八試合が終わり。第九試合『サマエル　対　ギルガメッシュ』は恐ろしいことになった。
サマエルは１２枚の翼を持ち、それぞれに属性を持たせた恐ろしい天使だ。さらに煌びやかな両手剣を持ち、凄まじい剣戟（けんげき）を繰り出している。
一方ギルガメッシュは１２の武器を背中に浮かせ、一本の刃が渦巻く剣を振るっている。その刃は回転するらしく、サマエルの剣を巻き流しながら攻撃をしている。
「せやあ！」
「はあ！」
と、お互い裂帛（れっぱく）の気合いと共に攻撃を繰り返していた。
「このままでは決着がつかんな・・」と、サマエル。
「そうだな、ちまちまやってんのは性に合わねえ」返すギルガメ

ッシュ。
『はぁぁぁぁ！』気合を入れあう二体。
「何がはじまんの？」
「まあ観ててみ」
「オドの海に還るがいい！『天下逆輪！』」
「消えされ！『天地乖離！』」
ゴゴゴゴ・・・・
恐ろしい音と共に・・・天と地が・・・世界が割れた・・・
結局・・・二体共消耗しすぎて、引き分けとなってしまった。・・・しかし・・
「しかし、やりすぎじゃね？」
「いいんよ。ここなら世界が滅んだりせんしな」
「そういうもん？」
「そういんもんや」

そして第十試合・・・ヴァイオレットちゃんとネコ？の出番となった・・・
『レヴィアタン　対　タマ』
・・・は？・・・何この表示・・・
「タマ～がんばって～」
「まかしときんしゃい！」
そう言って走って？（超のんびり）行くタマ。
「ついにタマの出番か～。ま、タマの勝ちやろな」
「なんで？」
「あ～・・・まぁ、強いからなぁ」
そういうリーベちゃん。
「あれ？相手いないじゃん」
そう、相手がまだいないのだ。見ると、ホースを持った若い男がいた。

「あれが相手？」
「ちゃうで、よー見てみ」
そう言うリーベちゃん。見ていると、男が水を撒き始める・・・
しばらくして、少し大きめの水溜りができた。
「なにやって・・・」
ズゴゴゴゴゴ・・・・・・
水溜りから・・巨大な水龍が現れた・・・
「あれがレヴィアタンや。原初の龍とも呼ばれとる」
「ほへー・・」
でかい・・・全身が出て来れず、水溜りにまだ体が沈んでいる・・・
・
「これはこれは・・・こんなところで会うとは・・・奇遇ですな」
レヴィアタンが喋ったのか、恐ろしく低い声が会場を包む。
「ニャー。なんじゃお前、まだこんなことしとるのか。難儀じゃなぁ」タマが答える。
「お互い様じゃないですか？まぁいい。始めましょう」
それが合図だったように・・・
カーン！と開始の音が鳴る。
ザーーーーサパーーン！
いきなりの大津波がタマを襲う！・・・しかし・・
「なんじゃ、いきなりじゃのう」
のんびりとタマは、その場に留まり・・・波が来るに任せていた。
「さすがですな。ではこれではどうですかな？」
ビシッ
一気に水が凍りつく・・・だが・・
「ふう、涼しくなったのぅ」
やはりのんびりとするタマ。
「・・・・むぅ・・・」
何の効果も得られないと見ると、さすがに唸るレヴィアタン。
「はぁ！」と気合を入れる・・すると・・

ボゥ！ゴーーー！
一気に水が燃え上がる・・・しかし・・
「なんじゃ、暑くなりよったわ。餅餅・・おお！あったあった」
・・・餅を焼き始める始末・・・
「どああ！」
ズズン！
ついに体当たりをするレヴェアタン！
「餅はうまいのぅ」・・・なんて聞こえなければすごかったのに・・・
怯むレヴィアタン・・・そこに・・
「そろそろ止めんか？お前じゃワシには勝てんことくらい理解(わか)っとるじゃろう」
諭すように言うタマ。
「ええ、分かっておりますとも。しかし・・・ここまでとは・・」
「世界から見れば、おぬしは十分に強い。それでは満足できぬか？」
「いえ、そこまで未熟ではないつもりです」
「では・・もういいか？それとも『結果』が欲しいのか？」
「・・・降参します」
「それでよい」
そう言うとレヴェアタンは、もとの水溜りに戻り消えてしまった・・・
ブルブルっと水を払うと、タマはヴァイオレットちゃんのところに戻っていった。
「タマやったじゃない！」
「当然じゃよ。ワシ強いもん」
・・・どうなってんだ？・・・・
なぜか　ポン　とリーベちゃんに肩を叩かれ・・・
「がんばりや、ダーリン」
と、言われてしまった・・・

「第二回戦『東の大陸』の勝利です！」
ワーーーー！！
歓声に包まれながら、会場を後にする。
「明日は『北　対　西』か・・・」
「せやね。ダーリンの出番はもちょっと後かな」
「よっしゃ！」
・・・世界はまだまだ広い・・・

戦車？なにそれ？ネコの事？（後書き）

あとがきです。
いやー戦闘いいですね。ここまで読んでくださっている皆様、本当にありがとうございます。
次回予告！大陸間対抗戦もいよいよ中盤。長いなぁと作者は思う。
そこで一気にすっ飛ばしちゃえと考え・・・げへへ
次回！もんすたーにっき「敗者？なにそれ？負債の事？」・・・飛べねえ豚は養殖だ・・・

間幕：管理者達の夢（前書き）

短いです。

間幕：管理者達の夢

・・・チチチ・・・ザッザッザ・・・

一人の女性が、森を歩いている。
緑色の髪を膝まで伸ばし、真っ黒な着物で体を包んでいる。
十代の顔つきだが、その雰囲気は妙齢な女性のそれだ。
女性は『神域』と言われる所を歩き、その足は真っ直ぐ泉に向かっていた。

・・・ザッザッザ・・ザザ・・

女性は泉のほとりまで来ると、誰もいない泉に向かい深々と頭を下げ・・・
「お久しぶりです。女神様」そう言った・・・
・・・サワサワサワ・・・・
一陣の風が吹く・・・すると・・
「やっほー。久しぶりだね！『神樹』さん」
声と共にどこからか女の子が姿を現した。
なぜか女の子は、セーラー服に金色の髪という出で立ちで泉の上に浮かんでいた。
「昨日お話ししたとおり、今日は『正式に』ご挨拶に伺いました」
そう言う神樹に対し、女神は・・
「そんなのいいのに」
そう言いながら軽く手を振る。
「そうは参りません。約束・・しましたから・・」・・言いながら頭を上げる。
「相変わらず律儀ですね～」のんびり答える女神。
「で？今日は挨拶だけって訳じゃ無いんでしょ？」

「・・・ええ。今日は『管理者』の一人としてご忠告に参りました」目を細める神樹。
「忠告？ありがと～。何かな？何かな？」
少し躊躇うしぐさをする神樹・・・やがて・・
「このまま・・・続けるおつもりですか？」
瞬間、女神の顔が　ピシッ　と固まる・・・
「あのような者までお連れになって・・・世界は最早、許容できなくなっている・・・そう思いますが・・」
「そんなことない！！！まだ・・まだ大丈夫だよ！！！ケンが！ダーリンが何とかしてくれるもん！！」
言い放つ女神を、覚めた目で見る神樹・・・
「本当に・・・本当にそうお思いなのですか・・・？」
「ええ・・・本当よ。大丈夫・・バグさえ取り除ければ・・・」
いつもの緩い表情も消し去り、言い聞かせるような声で女神は答える・・・
「・・・お父上がいなくなった理由・・・ですか・・・」
唐突なもの言いに、女神は・・・
「父さんは関係ない！！！！なんだって言うのよ！！！！」
叫ぶ女神に・・・神樹は・・
「私は・・・私は世界創生と共にこの地におります。彼方より長いときを、この地にて過ごしているのですよ。その私が・・・このせ・・」
「うるさい！！！大丈夫なの！！！世界は私が守っているの！！余計な口出ししないで！！おばあちゃん！」
神樹は、少し残念そうな顔をして・・・
「そうですか・・・私は、何時(いつ)でも彼方の味方です。どうかそれだけは・・覚えておいてください・・」
「・・・」
女神は・・何も返さず・・・神樹は元来た道を歩き始める・・・
「もし・・・」女神が後姿に・・問う・・・

「もし・・・世界が・・・ほ」
「それ以上は・・・言ってはなりません・・・たとえそうなったとしても・・・貴方様は生きることができるのですから・・・」
神樹はそれだけ言うと・・・今度こそ、外に向かって歩みを止めることはなかった・・・

ヒュー・・・
神樹が去り、女神が虚空を見つめる・・・そして・・・
バキッ！
何もないところを握りつぶした・・・
「なっちゃん・・・覗きは良くないよ・・」
女神の手には・・砂のようなものが握られている。
それを虚空に投げ、再び泉に消えていった。

「ヒュー・・怖い怖い」
「女王、あまりそういうことは・・・」
「なによ！大丈夫だって！」
そう言う二人。
女王とネムルは今、南の大陸で人間相手に挨拶回りをしているのだった。
「面白い物が見れたわね～」
「そうですか？私にはサッパリですな」
肩をすくめる仕草をするネムル。
女王は、ニヤッと笑い・・
「はいはい。よく言うわ」
対するネムルも薄く笑いながら・・・
「・・何のことですかな？」
「いいのよ、今更。あんたがなんで私に付いているのか知らないし、強い味方がいるのは良い事だから深くは問わない。けれど・・・

覚えておいて・・」
「・・・何ですか？」
女王は凄惨な笑みを浮かべつつ・・・
「次は容赦しないわよ・・・」そう言った・・・しかし・・
「何のことかサッパリですな」ネムルは飄々（ひょうひょう）とした顔で答えた。
「ふふふ・・それでこそ・・ね」
女王は急に立ち上がり・・
「次やることが決まったわね！世界の『バグ』・・『歪み』についてもう少し調べてみましょう。過去の事もね」
「承知いたしました。女王様」
恭しく頭を垂れるネムルを見て・・・ネコかぶりね・・・そう思った女王だった・・・

間幕：管理者達の夢（後書き）

あとがきです。
少し補正が必要と思い、書きました。本編はいま少しお待ちください。
いつも読んで頂き、本当にありがとうございます。当初、全３６話の予定でしたが、大幅に加筆しております。修正の手助けしてくださる方々、いつもありがとうございます。それでは次回、またお会いしましょう。

敗者？なにそれ？負債の事？（前書き）

もう題名無視ですね。以降はタイトル予告は控えます。

敗者？なにそれ？負債の事？

・・・覚悟はしておかなくちゃ・・・

「いやー、楽しみだな～」のんびり言うケン。

昨日急遽、試合をする事になったと言うのに・・のんきなものだ。

「あんた、準備とかしなくていいの？」

いつもと何も変わることなく、行動するケン。誰だって一言いいたくなるだろう・・・だというのに・・。

「ん？明日試合だってのに、今更準備もないもんだ」

「せやね～。ダーリンの場合、特になんもあらへんよね」

「明日死ぬかもしれない！・・・って言えば、レイさんが夜のお相手とかしてくれないかな？・・・」

「ダーリン！ウチがしたるで♪」

「・・・あ～・・・じょ、冗談だよ」

「え～・・・」

・・・なんなのだろう・・心配するほうが悪いの？・・・

「どした？コニー」

「ふむ・・・あれやな！今日は、あのひ・・・」

ドゴッ！ひゅ～ん・・・ドサ・・・

「黙ってて・・・」

「ヒッ！・・・」ガタガタgt・・・「・・・あの・・コニーさん？」

「・・・行くわよ・・・」「はい！」

そう言いながら、闘技場を目指すのだった・・・

「そう言えば、レイさんとカラーちゃんは？」

「二人なら妖精の里（同人誌即売会）に行ったわよ」

「・・まじ？・・・カラーちゃんの趣味全開の本が、多数並んでそ

うだね」
「・・・そうね・・。レイ・・大丈夫かな・・」
妖精たちに囲まれてうろたえるレイ。そして、それが本にされていく姿が容易に想像できる・・・。
「恐ろしい・・・」
「そう・・・ね・・」
「？？？？」
理解してないリーベをほっといて（いつの間に戻った？）レイの冥福を祈った私達。
そうこうしている間に、闘技場に到着。
「今日も面白い試合が見れるといいな・・・」
「そうね。戦い方とか、勉強になるし」
「せやな。もっと色々見たほうがええしな」
そう言いながら、闘技場の観覧席に到着する・・と。
「あ～！いたいた」
「女王様！お待ちください！」
騒がしい声が聞こえてきた・・。
「ケンちゃ～ん！会いたかったわ！」
「待って・・って言ってるでしょうが～」
声のする方を見ると、予想通りの二人がそこにいた・・つまり、女王とネムルさんだ。
「こんにちは女王、ネムルさん。挨拶回りは終わったんですね」
「いやいや。女王様が『終わりにする！』と言い出しまして。仕方なく・・」
「だってつまんないんだもの！」
「姉さん・・・」
「ま、しゃーないな」
・・・ん～。この人はケンの姉だからなぁ・・ま、当然か。
「ところで、ケンちゃん。聞きたいことがあるんだけど・・・」
「ん？なに？」

「あのね・・・・」
そこまで言ったところで・・・
「お待たせしました！！『大陸間対抗戦』三日目。第三回戦『北対　南』を行います！」
ワーーーー！

と、アナウンスが入る。
「あ～。また後でね」
「ああ、ごめんね姉さん」
「いいのよ。それより試合を見ましょ」
・・・なんだろう・・・・この時は、それでお終いだった。

第一試合『スライム　対　グジラ』

「ぷるぷるぷる」と、ふるえるスライムに対し・・・
ズシーン！ズシーン！と歩いてくるグジラ。グジラは、見たまんまクジラだ。とても大きく、それが二足歩行している。水のように透き通った体をしており、水中では擬態しているのだろう事が分かる。
カーン！試合開始の音が鳴る。
すーー。と、スライムが息を吸い込み・・・ゴーーーー！！　と、炎を吐き出す・・・しかし・・
ザパーーーン！　と、グジラがすでに津波を放っており、炎とともにスライムを押し流す。
「ぷるーーーーっ」
流されたスライムは抵抗らしい抵抗もなく、闘技場の端に押し流された。
「ぷ～る～」　と、目を回しているスライム・・そこへ・・
ゴゴゴゴゴ・・・・とグジラが前転をしながら転がってくる。

ぷちっ　と、音がしたような気がした。
平らになったスライムは、立ち上がることなく・・・グジラは悠々と、その勝利を唱えていた。

『タマゴキャリー　対　カロン』

タマゴキャリーは、卵を背負ったカバだ。二足歩行しているカバが、卵を背負う・・シュールだ。前回の戦いでは特に見せ場もなく、瞬殺されていた。
カロンは杖を持っているのだが、ローブを被っていて体はよくわからない。前回は、主に魔法を使って相手を倒した。
カーン！開始の音が鳴る。
いきなりタマゴキャリーが、背中のタマゴを割りだした。
「ああ、始めおったわ」
「なにあれ？いいの？
「いいんや。おもろいもんが観れんで」
ガシガシわっていくと・・・段々と、カバの体が薄くなっていく・・・そして・・・
「な・・・なにあれ・・」
完全に姿が見えなくなると、別のモンスターが姿を現した・・・
「あれが『タマゴわり』や。ああやって、ランダムで別のモンスターになる技でな。あいつの唯一の技で、運がよければめちゃくちゃ強くなる」
「今回は？あれは強いの？」
「ああ・・・あれにはカロンじゃ相手にならへんやろ・・・『ハデス』になっとる」
そう、さっきまでカバだったのに・・今はとてつもなく大きなガイコツのモンスターになっていた。
そのモンスターが、カロンを睨む・・・
「ヒィ・・・」明らかにビビッていた。

ハデスになったカバは、おもむろに手に持つ杖を掲げ・・・振り下ろした。
ビカ！ゴゴゴーン！
いきなり、ものすごい雷がカロンに落ちた。
「ギャーーー！」　叫ぶカロン。続けざまに何発も落ちる雷。
カロンが黒焦げになったのを見届けると・・・
プシュー・・と、空気が抜ける音がして・・・気が付くと、元のカバに戻っていた。
「変なモンスターもいるのね」
「せや。ああいう、運任せのモンスターも多数いるんや。弱いおもてなめとったら、死ぬこともあるんや。注意しいや、ダーリン」
「へいへい」
見た目では測れない強さ・・か・・注意しないと・・・

『イシュタル　対　レヴィアタン』

イシュタルは・・・
「うおおお！！前！前にいかねーと！」
駆け出そうとするケンを、リーベと引っ叩いて座らせる。
「座ってなさい！」「ダーリン！」
会場の男性の何名かは、前でしっかり見ようと移動している。
そう・・・イシュタルは、全裸の女性だった。
正確には、全裸の女性が真っ赤な獣に跨っている。その獣は、７つの頭と１０本の角を生やしており、いずれも凶悪そうだ。
対するレヴィアタンは・・・すでに出現しており、じっとイシュタルを睨んでいる。
「イシュタルか・・・嫌な奴が相手だな」
「おお！レヴィアタン。命乞いかえ？今なら許そうぞ。我に勝てるのは、オリュンポスの連中くらいだからの」
「・・・」

カーン！　開始音が鳴る・・・が・・
両者とも動かない。
「・・・どうした・・『イシュタル（勝利の女神）』の名が泣くぞ」
「ハハッ。うるさいヘビじゃのぅ。さっさとかかって来るがよい。遊んでやるぞぇ」
しかし・・・動かない・・・両者見合ったままだ・・
「どうして動かないの？」
「動けないんよ。イシュタルはカウンター攻撃が得意でな、レヴィアタンは隙の大きい技が多い。せやから、チャンスを狙っとるんや」
そうして、しばらく待っていると・・・
ザーーーー！ザパーン！
レヴィアタンがいきなり、津波を仕掛けた！
「ようやく動いたかえ」　そう言いながら、のんびり構えるイシュタル。
津波がイシュタルに届いた・・・瞬間・・・
ヒュッ！　っとレヴィアタンの後ろに移動した・・そして・・
ガーーー！　獣が咆哮とともに、角を刺す！
ブシュ！　と、音がしてレヴィアタンの首から血が出てくる・・・
「なんじゃ、あっけないのぅ」
覚めた目でレヴィアタンを見るイシュタル。
「つまらん。興ざめじゃ」
そう言って、角を引き抜き立ち去ろうとする・・・そこに・・
「では、面白い物を見せよう」　そう・・声が掛かる。
驚いて振り返るイシュタル・・・しかし・・
・・・ヒューーン・・・
その姿は、イシュタルが反転しきることなく・・・真っ黒な穴に消えた・・・
「驕れる者は、なんとやら・・だ・・」

そう言って自身も水に帰っていった・・・

「なに？いまの？どういうこと？」

「まー落ち着き。今のはな・・・まず、イシュタルが『自壊の角』でレヴィアタンを刺したんや。『自壊の角』は文字通り、刺された者を自壊させる効果がある角でな、余程の事がないと防ぐことができけへんのや」

「ふんふん。それで」

「で、どうやってかレヴィアタンはそれを防いで『次元の穴』にイシュタルを放り込んだんや」

「『次元の穴』？」

「せや。まあ『次元の穴』言うても、この世界のどっかに強制的に転移させるだけやけどな。まあ行ったら、よほど運が良くないと一両日中には帰ってこれへんけどな」

「なるほど・・」

「イシュタルのカウンター攻撃は、『攻撃反転』もあるからなー。あれが一番かもしれんな～」

「第三回戦・・・勝者『西の大陸』！！」

決着が付き、私達は帰ることにした・・・そこに・・

「ケンちゃ～ん。お姉ちゃんとお話しようよ～」

「・・・ああ・・」

げんなりしたように歩くケン。

それを見送り、私は帰途についた・・・

敗者？なにそれ？負債の事？（後書き）

あとがきです。
いつも読んでくださりありがとうございます。次回は二日後くらいになると思います。少々お待ちを・・・
次回予告！姉に呼ばれて付いていくケン。「あんたそろそろ童貞卒業したいでしょ？相手を用意したわ！」喜ぶケン。しかし、そこには恐ろしい罠が・・・
次回！もんすたーにっき「俺のターン？なにそれ？つまり姉のターン？」・・いい夢みろよ！

俺のターン？なにそれ？姉のターン？

・・・世界・・ねぇ・・

「で、ケンちゃんさっきの話に続きなんだけど・・・」
姉さんに連れてこられ、俺は今闘技場の一室にいた。
「話？なんだっけ？」
「えっとね、たいしたことじゃないのよ。彼方が治す事になってる『歪み』の事なの」
「話そうにも、俺はまだその件には何にもしてないよ？」
「そうなの？」
「ああ、その『歪み』ってのが何なのかすら分かってないんだけど」
「あー。そうなの」
「だから、詳しいことはリーベちゃんに聞いたほうがいいと思うよ」
そう言うと姉は・・・
「なるほど・・じゃあ、そうしましょ」
そう言って・・・俺の背中に手を伸ばす・・・すると・・
「うひゃぁぁ」・・・リーベちゃんが収穫れた。
「なにすんねん！びっくりするやろが！」
・・・いやいや。そう言う問題じゃないと思うが・・・
「こんにちは。リーベちゃん。ちょっと聞きたいことが有るんデスケド」
「にゃ・・なんや」　少し震えながら答えるリーベちゃん。
「『歪み』のことなんだけどね」　姉さんがそう言うと・・・
「なんや・・・そんなことかいな」　あからさまにホッとしたように答える。

「そんな事・・なの？」　姉さんが、少し不思議そうに言う。
「ウチがここにおるんは、ダーリンに『歪み』について教える為や。せやから、ウチが説明するんは当然っちゅうわけや。ウチから言わすと・・なんで今まで聞けへんねん・・てなもんや」
二人で俺を見ている・・俺は後ろを振り返ってみた。・・なんにもないよ？・・
「で？何が聞きたいんや」　何事も無かった様に話すりーべちゃん。
「えっとね。全部かな？あなたが知ってる『歪み』についての全てを教えて」
「よっしゃ！ウチの存在を全肯定やな！まかしとき！」
「お願いね」

・・・『歪み』は、最近になって世界の各地に現れ始めたもんでな。最初は、小さい物ばかりやったから潰すのも楽やってん。しかしな、しばらくするとドンドン増え始めてな。手に負えなくなってきたんや。
数が急速に増え始めてな、小さい歪み同士が結合を始めたときは吃驚したもんや。でもな、大きいことはいい事やで。その大きいのを潰せば一気に消えよる。それに、大きい歪みは、ウチらみたいに強くないと対処でけへん。
せやから、ダーリンには小さい歪みをどうにかしてほしいんや。あれがどうして生まれるのか、どうやって増えるのか等々。原因の方の追究をお願いしたいんや・・・

「なるほど・・・」
姉さんはそこまで聞くと、少し考えたように・・・
「神樹に聞けば、何か分かるかもしれないわね」そう言ってリーべちゃんにいくつか質問する。
「姿形は、どういうものなの？」

「決まってへん。なっちゃんも見ればわかるで、どこがどう・・というふうじゃあらへんねん。ただ『おかしい』んや。生物でもない、かといって無機物とも違う。『この世界の法則』に逆らっとる存在や」
「なるほど、私じゃなくても判断できるの？」
「せやな・・・ダーリンも見れば分かるかもしれへん」
「へ？そうなの？」　俺は少し驚きながら聞き返す。
「せや。だからダーリンにお願いしたんよ。他の神王だと、神樹くらいしか判断でけへん。それくらい些細な違いなんよ」
「けど、『違う』んでしょ？」
「そうや。決定的に違う。本体の女神は言わへんけど・・・この世界にあってはいかんものや」
「・・・なるほど」
そこまで話を聞いた姉さんは・・
「神樹の所に行って来るわ」　そう言って部屋を出ようとする・・・
「待ちや！なっちゃん」
「？な～に？まさか、止めろ・・とか言わないわよね」
「ちゃうちゃう。『あそこ』に行く気なんか？」　真剣な顔で聞くリーベちゃん・・・
「・・・そ・・そうだったわね・・・今の時期は・・・」　少し青ざめた姉さん・・
「せや。少し待った方がええ。せめて明後日まで待ってから行動した方が・・・なっちゃんの為や」
「そうね・・・そうするわ」
どうしたのか、あの姉さんが足を鈍らせるほどとは・・・
「何があるの？その・・神樹の所に・・」　好奇心で聞いてみる・・
「・・・あれは・・・一言で言うなら『好奇心の地獄』ね。死地と言い換えてもいいわ。あたしは一度で十分だった」

「せやな。ウチも世界を見続けとるが、あそこほど乖離した所は・・・他に思いつかへん」
・・・なんだか怖そうなところだ・・・
「というわけで、明日のケンちゃんの試合・・・楽しみにしてるわね！」
「えーー・・」　思わず低い声が出た。

「ところで、リーベちゃん」
「なんや？」
「今の会話・・・女神様（イデア）には内緒ね」
「なんでや？ウチにも、報告の義務いうんがあるんやけど・・」
「そうね～。『世界の危機』だからかな？」
「？？？。それやったら、尚のこと報告せんとあかんちゃうん？」

「まーまー。欲しがってたゲームあげるから！」
「ｏｋや！黙っとくで！・・・ウチはなんも話してへん！」
「ありがと～」
そんなやり取りをしている『女王』と『女神代理』・・・
俺はそんな二人を、肩をすくめて見ていた・・・

俺のターン？なにそれ？姉のターン？（後書き）

あとがきです。
少ししたらカラーの里帰りの様子を書こうと思います。しばしお待ちを・・・
次回予告！ついに試合をする事になったケン。「帰ったら俺・・結婚するんだ」
そんな死亡フラグを無理やり立てるが・・・
次回もんすたーにっき「相手？なにそれ？にいづまですか？」・・・
クリック？クラック！
・・・ウソ予告～♪

相手？なにそれ？にいづまのこと？（前書き）

はい。タイトルウソでしたね。

相手？なにそれ？にいづまのこと？

・・・あたしがしっかりしなくちゃ！・・・・

ついに、ケンが試合する日になった・・・なのに・・

「アンタいつまで寝てんのよ！」

「ん～・・・あと五時間・・」

「出番終わるでしょ！」

・・・こんな感じだ・・・

「あんた、本当は試合したくないんでしょ？」

「ん？ん～・・そそ。だから寝かして」

・・・絶対連れてく！！。

ガス！ドガ！バサッ！ゴロゴロ・・・

そんな風に、朝を過ごした後・・・

「よっしゃ！いくか！！」

・・なんでアンタが一番元気なのよ・・・

さっきのやり取りもどこへやら、先陣切って闘技場へ向かうケン。

「よっしゃ！ダーリンのいいとこ見せてや！！」

「はぁ・・・」

元気よく闘技場に向かうのであった・・・

・・・闘技場控え室・・・

「今日はよろしくお願いします」

「お願いします」

二人揃って頭を下げる。

「よろしく！」

モンスターやマスターにも挨拶され、頑張って等の声も掛けてもらえた。

「しかし、『ランク3』に『ランク8』が出ることになるとはな～。お前普通の試合にすら、まともに出たこと無いんだろ？大丈夫か？」
先日の試合で、ものすごい試合を見せたサマエルからそう言われる。顔を見れば普通に心配してくれているのが伺えた。
「まぁ、やってみない事にはなんとも言えないですが・・・ま、大丈夫でしょ！」
そう返すケン・・・それを見て・・・
「そか。心配無用か・・」
「そうじゃそうじゃ！こやつの事より自分の心配せんか！おぬしはウリュエルとやるんじゃろうが！」
「そうだった・・・」そういって首をすくめる・・・案外気さくなモンスターなのかも・・・
「お兄様は負けません！」
「ありがと。ヴァイオレットちゃん」
「い・・いえ・・」そう言って赤くなるヴァイオレットちゃん。
「あ・・・主～」言いながら擦り寄るタマ。
「はいはい。拗ねないの」タマをゴロゴロさせる・・・
「そろそろ時間ですね・・・」
あたしがそう言うと、皆顔を引き締めやる気をにじませていた・・・

「お待たせしました！第四回戦『南　対　東』を開始いたします！」
ワーーーッ！
『ベヘモス　対　グランパ』
グランパは、ダンディなパパの顔そのものといったモンスターだ。正確には顔しかないのだが・・・
ベヘモスは前回の戦いを引きずる様子も無く、とても強そうだっ

た。
「ねえ。この間の試合でも思ったけど・・・」
「ん？どした？」
「どうしてあんなモンスターが出てるの？」
そう言って私はべヘモス・・・ではなく、グランパを指差した。
「ん？コニーは、グランパを知らんのか？有名なモンスターやで？」
「そうなの？私が持ってる図鑑には・・・載ってなかったかな・・・」
「ん～それはあれやな。通常状態のグランパが載ってないんと違うか？」
「通常状態？」
「せや・・お、始まるで」
カーン！開始の音が鳴る。
グオォォォーー！
べヘモスが唸り、グランパに猛突進する！
ドガーン！
見事もろに食らった・・・ボロボロになるグランパ・・しかし・・・
「ほっほっほ。怒るほどの事じゃない」
そう言って笑っている・・・そう、前回の戦いもこんな感じで何もせずやられていた・・・
「・・・またあれね・・負けて当然じゃない？」
「ん～。まあ、あれがグランパやしなぁ・・」
そう言って苦笑いするリーベ。
ドガーン！
また吹っ飛ばされるグランパ、相変わらず笑っている・・と、思いきや・・・
「グググ・・ググォ・・・」
低い声を出したかと思えば・・顔が上下逆になった！！・・・で？
「あ～。グランパ怒らしたか・・・」

そんな、のんびりとしたリーベの声とは裏腹に・・・
ドゴーン！ドゴーン！ドゴーン！・・・
恐ろしい程の攻撃が繰り広げられていた・・・
主に体当たりだけなのだが、その一発一発が素早く、とても重いのが音で分かる。それが絶え間なく続く・・・
最早、ベヘモスは倒れる事すら許されずに（傍目に見て気絶しているのが分かる）延々と攻撃され続けていた・・・
ようやく攻撃が終わり・・・ズズーン・・と倒れこむベヘモス・・・それを見てグランパは・・
「少々やりすぎたかね」　と言いながら赤くなっていた・・・
「怖いモンスターもいるのね・・」
「せや、瀕死になるとああやって恐ろしく強くなる奴もおる。あと少しと思て、油断は禁物やで！」

『ヴァラク　対　フォラス』

ヴァラクは、前回と同じように真っ赤な双頭の龍に龍の翼を持った少年が乗っている。
対するフォラスは・・・
「普通ね・・・」
「普通や」
そう、普通のどこにでもいるようなおっさんだった。
「あれ、モンスターなの？」
「それは間違いあらへん。前回は見所無しやったからなぁ・・」
そう、前回のカロン戦では普通に負けていた。
「まあ、こうして選ばれる程や。なんかあるんやろ」
カーン！試合開始だ。
まずヴァラクの双頭の龍が炎を吐いた・・・
ゴーーー！
慌てて逃げるフォラス。

初めは警戒していたヴァラクも、相手が逃げるばかりだと分かると自身（少年）も炎の魔法（火球）で攻撃を始めた・・・
「一方的になったわね」
「せやな。ま、あれで『魔神の一柱』や。策があるんやろ」
リーベがそう言うのと同時くらいに・・・
「あ！」
フォラスの姿が　スーーッ　っと消えた。
姿を見失うヴァラク・・だが、龍が鼻をヒクヒクさせたかと思うと・・・
ゴーーーー！　と、闘技場の一角に火を放った・・すると・・
「うわぁぁぁ！」火に撒かれながら、フォラスが浮かび上がり再び逃げ始める。
「あーあ。これは決まったわね」
「・・・せやな・・・ヴァラクの負けや」
「え？・・なん」聞き返す暇も無く・・・
ドドドドド！ドゴーン！
すごい音がして、ヴァラクが滅多打ちにされていた。
今までフォラスが逃げていた方には誰もおらず、反対の方向からヴァラクを攻撃するフォラス。
「なにあれ・・」フォラスが何かを持って、そこから弾？が打ち出されているのが見える。
「あれはな。なっちゃんの世界の武器で『銃器』や。魔法に頼らず人や物を破壊する恐ろしいモンやで」
ヴァラクがボロボロになっても、攻撃は止むことなく・・・ピクリとも動かなくなったヴァラクに、筒状の何かを投げる・・
ドガーン！！ビリビリ・・
ものすごい音と地響きが起こり・・・後には、何も残ってはいなかった・・・
「すごい奴がいるんだな・・・俺の世界のモンを使うとは・・・」
「せやな。あれはフォラスだから持って来れたんやけど・・・『

上級魔神』にはあんなんばっかやで」
「最初に消えたのは囮？」
「せや。初めに消えたのは準備の為やろね。見つかるんを考慮に入れて、自分そっくりの人形を用意してたんや。そっちに気を取られてるうちに・・・ドスンや」
「おーこわ」
そうこう言っている内に・・・
「ケン！次じゃない！アンタの試合！」
「おお！そうだった！急いで下に降りなくちゃ！！」
「そうよ！！急いで！！」
慌てて出て行くケン・・・
「ダーリン頑張りや！！」
「おう！」
そう言って・・・そのまま闘技場に飛び降りていった！
「・・・あの馬鹿・・・」
「いいやん。ダーリンらしいで！」
私も・・アイツらしい・・そう思ったのだった。

『ユマンマキナ　対　ケン』

「なに・・あれ」
出てきたのは、前回戦ったモンスターでは無く初めて見るモンスターだった。
それは、人の形をしているが・・腕の部分に回転ノコギリ、背中には機械仕掛けの翼が見えていた。
「あれは・・・」リーベの驚いているようだった。
「ダーリン！！それが『歪み』や！！」
「え？・・・」
カーン！試合が始まる・・・

相手？なにそれ？にいづまのこと？（後書き）

あとがきです。
文字数が多くなりすぎるので、二人のパートを分ける事にしました。
続きが気になる！そう言う方が一人でもいてくださるといいのですが；；；
さて次回！いよいよ『歪み』との邂逅です！ケンパートで少し短めですが、ご容赦ください。次回もんすたーにっき「人形？なにそれ？中身はサバ？」・・・かぼちゃ～○す！

人形？なにそれ？中身はサバ？（前書き）

ケンパートです。

人形？なにそれ？中身はサバ？

・・・これが・・『歪み』・・・

「ダーリン！それが『歪み』や！！」
リーベちゃんの声を聞いて、相手を見る・・・
「・・確かに・・おかしいな・・」
そう、それは部分的なものではなく・・全体がぼんやりと歪んで見えるのだ・・・でも・・
「でも、やる事は変わんないよな！」
そう言ってまず、小手調べとばかりに・・こないだ学んだ魔法を・・放つ・・
「ファイア！」　直後、火球が敵に向かって飛んでいく！
ゴーーー！ドガン！！
火球が当たり・・敵が吹っ飛んだ。
「続けていくぜ！」
拳に魔力を溜め込んで・・・撃つ！
ダダダダダダダダダダ！！
「北斗〇烈拳！」腕を見えない速度で繰り出し・・撃ちまくる。
「アッー！タタタタタt・・・」
撃たれるままのユマンマキナ・・・
「アターー！」
最後の一発もきれいに決まり、倒れ付す。
・・・油断はしない！・・・
さっきリーベちゃんに言われた事だ、ここで油断は禁物だ。
周りに気を配りつつ、相手を見据える・・・瞬間・・
ヒュン！
「おわっと！」俺のいた所に、メタルブレード（回転ノコギリ）

が飛んできていた。
「あっぶな・・」注意一秒、怪我一生だな・・
そう思っている間に、相手が立ち上がってくる。
「そうこなくちゃ。読者が飽きちまうぜ！」
ユマンマキナ（以下マキナ）は、戻ってきたメタルブレードを腕に戻すと・・・シュィーン・・と、某映画で有名なアレを出してきた・・そう・・
「ラ！ライト○イバー！？」
しかも二刀流だ！足からは何やらミサイル的な物まで覗かせている。
ビューーン！
「脚は飾りかよ！！」
地面を滑らせながら突進してくるマキナ。
「ちぃ！！」俺も剣を取り出し・・・
キィィン！！
刃を合わせる・・・
キィン！キィン！キィン！
三度合わせたところで、俺は後退し距離をとる。
「あーうるせー」
そう、普通の金属と打ち合っているわけではなく、相手は光学装備だ。魔力を付加する事で打ち合えているが・・とても不快な音がするのだ！
「ギギギ・・・コロス・・」
目が合った・・というか・・あれは・・目か？
そう思ってる内に・・・
バシュン！バババシュン！
「うおおお！！」
なんと！この近距離でミサイルをぶっ放しやがった！！
最初の一つを避けて、残り三つを切り落とす！
「おら！」

ズバ！バッバ！ボーンボーンボーン！
ミサイルを相手にしている所・・・なんか嫌な予感がして、慌てて飛びのく・・・すると・・
ピカーーー！バリバリバリ！
奴の目から、ビームが出て地面を焼き切っている。
「王道装備か！おっぱ○ミサイルは装備してんのか！コラ！」
そう言いながら俺は距離をつめて、袈裟に切る・・
ビュン！ウィーン！ガキン！
俺の剣が、腕のメタルブレードで阻まれ絡め取られそうになる・・・しかし・・
「うらぁ！」　ドガ！
マキナの腹に蹴りを入れ勢いをもって後ろに飛ぶ。
・・・なかなか頑丈だな・・
結構な攻撃をしているにも拘らず、なかなか倒れないマキナ・・・
「ダーリン！そいつをよく見るんや！『歪み』の中心があるはずやで！それを突かな倒れへん！」
「りょーかい！」
言われた通りよく見てみる・・・すると・・・
「あった・・そこか・・」
そう、頭部の額の部分が黒く『歪ん』でいる。そこから全体に歪みが広がっている。
「なら・・少し派手にいくか・・・」
そう言いながら、両手に魔力を集める・・・
「ギギ・・ムダダ・・・オマエラニハ・・ワレラハタオセナイ・・」
「？我等？一体しかいねーじゃん」
「ムダダ・・・オマエラニハ・・」
「はいはい。お喋りはしゅーりょー！」
俺は会話を打ち切って・・魔法を放つ！
「メ・ラ・ゾー・○！・・・フィンガーフレ○ボムズ！」

左手に五個のメラゾー〇を発生させ・・投げつける！
ドドドドドン！！
「お次は・・雷〇だ！」
バチバチバチ！
右手に雷を発生させ・・ボムズでよろめいているマキナの額に・・・叩き込む！！
バーン！
ものすごい音がして・・・頭部が吹っ飛んだ！
マキナは、そのまま数歩後ろに下がって・・・ドサッ・・と倒れた。
「よっしゃ！」
俺はガッツポーズと共に、観客席にいるコニーとリーベちゃんに手を振る・・・
「あぶない！」
コニーが叫ぶ！・・俺は後ろからマキナに捕まり・・・
ドカーン！
と、爆発に巻き込まれた・・・
「ケン！」
コニーが叫ぶ・・・・
「呼んだ？」
「え？」コニーの後ろから現れる俺。
「え？え？今・・爆発に・・」
「幻術です」笑顔で答える俺。
「さっすがダーリン！完全勝利やね！」
「当然！」
ぼーっとするコニー・・しかし・・
「なにが！当然よ！！・・・心配したじゃない・・」
・・おぅ・・かわいいじゃないか・・・
「す・・すまなかった・・」
「そうよ！気をつけてよね！！」

涙を浮かべるコニーに・・俺は何も言えなくなってしまった・・・

人形？なにそれ？中身はサバ？（後書き）

あとがきです。
涼しくなってきました、私は冬が好きなのでもっと寒くならないかな。そう思う毎日です。そろそろ番外行きます。お楽しみに！
次回予告！歪みを倒したケン。初戦の完全勝利に他の大陸チームはケンをマークする。そんな中、イシュタル（全裸恥女）がお色気攻撃を開始！ケンは誘惑に耐え切れるのか！！
次回もんすたーにっき「北？なにそれ？負け組みでしょ？」・・・
ギャラクシードリンク飲んでみたいね♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6501v/

もんすたーにっき

2011年9月21日21時04分発行